

う。ヨブも善人は「黄金を積むこと塵の如し」(ヨブ廿二)と言つたではないですか。しかしあの前に行く人達が、貴君のお話になつたやうな人物なら、さういふ善人ぢやありません。客。「その事は私共は皆な同説でせう、だからこれ以上言ふ必要もないでせう」

錢。「さうです、實際その事を最早言ふ必要はありません。聖書も道理も(私共が信するやうに)信じない者は、その身の自由を知らず、その身の安全も求めないですからな」

勝。「さて兄弟達、私共はかうして皆都へ志さす者でせう。そこで悪しき事から心を反すやうに、貴君方に一つの問を出すことを許して下さい。」

まあ茲に一個の人があるとせませう。牧師でも商賣人でもかまはない。その人の前に此の世の善き幸福が得られるやうな便宜が與へられたとするのですな。但しそれを得るためには、尠くとも表面だけでも、今まで係はつたことのない宗教の或る事柄に非常な熱心を現はさねばならぬことにするのです。そこで彼はその目的を達するために此手段を用ひては可けないでせうか。或はこの手段を用ひても義しい正直な人といへるでせうか」

金。「貴君の問の奥底が能く解りました。では、お先へ御免を蒙つて、一つ答へを作つて見ませうかな。最初に牧師に關するお問ねから申しませう。假りに有力な牧師があるとしませう。今は唯僅かな給料を貰つてゐるが、前途にはもつと〜澤山な給料を望んでゐるのです。その望みを達する機會を得るために、益々勉強するし、益々繁く熱心に説教するし、又信者の機嫌を取るために、その主義を幾分枉げるとするですな。私の考では、その人に神の召呼さへあれば、さういふことをしても、又それ以上ごんな事をして差支へない。矢張正直な人だと思ふ。何故なれば、

一、その人がもつと澤山な給料を望むことは當然であります。(それは不法ではない、その望みは攝理に依つてその人の前に置れたものですからな。良心に問ふまでもなく、得られるものなら、得るが善いです)

二、それから又その人がその給料を望んで、益々勉強し、益々熱心な説教家となることすれば、益々善き人物となり、従つてその才能も伸びるから、神の聖意に従ふわけです。

三、それから又信者の機嫌を取つて、そのために自分の主義を幾分變ゆるといふのは、第一、その人に克己の精神あること、第二、その態度の優しく愛嬌あること、第三、牧師の職に益々適當してゐることを示すのです。

四、さればその牧師が給料の少ない方から多い方に變つても、それを以て直ちに貪慾なり

とすることは出来ない。

寧ろそのために才能を伸し、益々精を出すために、能くその職分を盡し、その手に供へられた機會を利用して善事をなした者となすべきであります。

次には商賣人に關するお問ねですが。これ又假りに一人の商賣人があるとして、世にも貧しい商賣をしてゐるおしませう。所が宗教を信じたがために、取引の具合が善くなつて、金持の妻君が見つかるし、店の顧客も益々殖へて善くなつたとします。私の考へでは、それが正當でないわけがないです。何故なれば、

- 一、宗教を信するといふは、その人がどんな手段で信じたにせよ、これは一つの徳です。
- 二、金持の妻君を貰ひ、店に顧客が殖へるといふは不正なことぢやありません。
- 三、それから又、宗教を信じて斯る利益を得る人は、先づ自分が善き者になつて、善きことを以つて善き物を得るのですからな。善い妻君、善い顧客、善い利得、それは皆な宗教を信じたといふ善き事から出たのです。だから、凡てこれを得るために宗教を信することは、有益な善い工風です。

勝手者の間に對して金好氏がかやうに答へたので、一同やんやと喝采した。その言ふ處は

全體に最も健全で有益なるものと思ひ込んだ。誰もこれに反對することは出来ないと思つたので、基督者と有望者がまだ呼んだら聽える所にゐるのを見て、追ひ付いたら直ぐこの間をかけて攻め立てることに一同申し合はせた。あの二人が前に勝手者に反對した仇返しをしやうとするのである。そこで二人を呼びかけた。二人は立ち留つて、靜に人々の來るのを待つてゐた。彼等は途々相談して、今度は勝手者でなく、財實保にその間をかけさせることに定めた。勝手者とかの二人は言ひ争つて尠し前に別れたばかりなので、まだその熱氣が残つてゐるかも知れぬからである。

さて彼等は互に近づいて、軽く挨拶してから、財實保は基督者とその同伴に間を出して、答へが出来れば仕て下さいと言つた。

そこで基督者は言つた。「宗教を信する者には、赤坊でもそれ位の間なら一萬でも答へられます。聖書にもある通り、パンのために基督に従ふことが不正なら、基督とその教を隠れ家にして浮世の富を得、楽しみをなさうといふのはいかにも不埒なことです。そんなことを言ふ者は異教徒か、偽善者か、悪魔か、魔法使位のものです。

一、異教徒といふのは、例へばハモルとシケムとがヤコブの娘と家畜に心を寄せた時に、

割禮を受けるはかその望みを遂げる途がないのを見て、二人はその仲間に向つて、かう言つた。「若し唯われらの中の男子みな彼らが割禮を受くるごとく割禮を受けなば、彼等の家畜と財産と其の諸の畜は我等の所有となるにあらすや」(利世卅四)。實際彼等の欲しいのはその娘と家畜でして、宗教を隠れ家にしてそれに手を入れやうとしたのです。あの物語を全體讀んでごらんさい。

二、偽善なるパリサイ人といふも亦この類の宗旨です。長い祈禱にかこつけて、實は寡婦の家を呑まんとするのです(ルカ廿一)。だから神の審判から受くる刑罰はどれほど大きいか知れない。

三、惡魔のユダも亦この類の宗旨です。彼は財囊のために宗教を信じ(ヨハネ十)その中のものを占有めやうとしたのだが、遂に棄てられ、身離されて、沈淪の子となつたのです(マテ十二)。

四、魔法使のシモンも亦これと同じ宗旨です。彼が聖靈を受けたいと言つたのは、實は金を儲ける下心だつたのです。それ故ペテロの口から罪の宣告を受けたのです(使徒行八)。

五、そのやうに此世の財のために宗教を信する者は、又この世の財のために宗教を棄つる

に至ることは、私ばかりの考ではない。確にユダは此世の財のために宗教を信じたので、宗教をも基督をも賣るに至つたのでせう。だから貴君方のやうに、此間に答へて、是どいつたり申分がないと思つたりするのは、矢張異教的で、偽善的で、又惡魔的なことです。貴君方はその業に依つて報を受けなさるでせう。

そこでかの人達は互ひに顔を見合はせて、基督者に答ふる所を知らなかつた。有望者は基督者の答の健全なことを讀めたので、人々は尙ほ黙り返つた。勝手者と其の同伴は逡巡みして後れて、基督者と有望者を遣り過さうとした。そこで基督者は同伴に向つて、「この人達は人間の宣告にさへ言ひ開きが出來ぬやうでは、神の宣告にどうして言ひ開きをするのだらう。又私共のやうな土の器に言ひこめられて黙つてゐるやうでは、焼ける火の焔に責められたら、何んとするだらう」

やがて基督者と有望者は再び彼等を後に殘して、安樂といふ優しげな原までやつて來た。二人はそこへ來て心も晴々とした。しかしその原は狭かつたので、間もなくそこを通り越した。さてこの原が盡んとする處に、金儲の山と呼ばれる小山があつた。この山は銀山で、往時この路を通つた人々の中には、その珍らしさに誘はれて、そこを見物するために本道を離れ

去つた者もあつた。しかしあまり銀坑の口へ近づいて、足下の地面に欺されて、うか／＼とそこへ乗つて、地が壊れて殺された者もあつた。或は不具になつて、死ぬ日まで、元の身體にならぬ者もあつた。

やがて私が夢の中で見てゐると、路から少し離れて、銀山に向つた處に、デマスといふ者（テ後四）が（紳士然と）立つてゐて、通行の人を呼んで見物させやうとした。彼は基督者とその同伴に向つて、「おい、その路を離れて此方へお出で。見せたい物があるのだ」

基。一路を離れさせてまで私共に見せたいといふのは、それほど値のあるものですか」
 デマス。「茲に銀山があつて、財寶を掘つてゐる者が大分ある。お前さんも来て見なさい、ちつとばかり骨を折ると、直き金持になれますぞ」

そこで有望者が言つた。「行つて見ませう」
 「行きますまい」と基督者が言つた。「これまで此の場所のことや、茲で澤山殺された者のことを聞いたことがあります。それから又その財寶といふは、それを索める者の係蹄で、全くはその旅路の邪魔をするのです」
 やがて基督者はデマスに向つて、聲をあげて言つた。「其處は危ないところでせう。多くの



デマスの誘惑

旅人の邪魔ではないですか」

デマス。「それほど危なくはありません。不注意なことさへしなれば」かう言つたが、その顔は赧くなつた。

そこで基督者は有望者に言つた。「一歩でも枉げてはいけません。靜かにこの路を進んでゆきませう」

有望。「私は保證しますがね、あの勝手が茲へ來て、私共と同じやうに招かれると、必ず見物しに彼處へ行きますよ」

基。「それは無論です。彼の主義はその途へ彼を連れてゆくでせう。百に一つも助かりはしません」

やがてデマスは再び呼んだ。「兎に角來て見ませんか」

基督者は聲荒く答へた。「デマス、貴君はこの路の主の背いて、義しき道の敵ではないか。貴君自身がこの路から背いたので、既にわが主の審判官から罪を定められたではないか。かかるにどうして貴君は私共を連れて行つて同様な罪に落さうとするのか。そればかりか、私共が側道へ行けば、わが主なる大君は、確にそれをお聴きになるに違ひない。さうすれば大

膽に畏れなく主の前に立てる私共は、耻かしめを受くるに違ひない」

デマスは再び自分も貴君方の兄弟の一人だから、若し貴君方が暫らく留まるならば、自分も一緒に行きませうと呼はつた。

そこで基督者は言つた。「貴君の名前は何んですか。私が今呼んだ通りの名でせうか」

デマス。「さうです、私の名はデマスです。アブラハムの裔です」

基。「さうでせう。ゲハジは貴君の曾祖父さんで、ユダは貴君のお父さんで、貴君はその足跡を踏む者でせう。貴君のする事は皆悪魔の戯れちやありませんか。貴君のお父さんは謀叛人として絞殺されたのだから、貴君の受くる報酬もそんなものでせう。確に覺へておきなさい。私共が大君の許にゆけば、必ず貴君の此の振舞を言上しますから」

かう言ひすて、二人は路を進んだ。

折しも勝手者とその仲間の者は再び後の方へ見えだしたが、ひと招きでデマスの方へ引き寄せられた。さて彼等は崖を覗かうとして坑に落ちたか、銀を掘るために下へ降りて行つたか、或はいつも立ちのぼる毒氣にその底で窒息したか、その邊の事状は能く解らないが、兎に角彼等は決して再びその路に姿を見せなかつた。

そこで基督者は歌つた。

「勝手者と銀のデマスは相結び、

一人が呼べば、他の一人、

利得を獲んと走りゆく。

かくて此世に留まりて、

最早一歩もゆかばこそ」

九

さて私が見てゐると、此の原を越えてから直きに、旅人等は古い石碑が往來の側に立つてゐる處へ来た。それを見て、その異様な形を二人は不審に想つた。それは恰かも一人の女が柱の形に化したやうであつた。それ故二人はそこに立つて、唯つくぐと眺め入つたが、暫らくはそれが何にか考へつかなかつた。やがて有望者はその石碑の頂に只ならぬ筆ぶりで書いてある文字を見つけた。けれども自分は學問がないので、(學識のある)基督者を呼んでその意味が解るかどうか見てもらつた。そこで彼は側へ寄つて、字くばりなどを暫らく見て、

これは「ロトの妻を憶へ」（ルカ十七）といふ意味であることを悟つて、それを同伴の者に讀み
 させた。そこで二人はこれこそソドムの災禍を免れて行きながら、慾深い心に引れて後
 振り向いたので、忽ち鹽の柱に化したといふロトの妻であると悟つた。この思ひがけない驚
 くべき状を見て、二人は又話に花を咲かせた。

基。「あゝ兄弟、これは時節柄の見ものですね。デマスが金儲の山を見ろといつて私共を招
 いた直ぐ後にこれが現はれたのですから。若し私共がデマスの望みにまかせたら、どうで
 せう。貴君は餘程心が動いたやうでしたが、私共がうかく行つてごらん下さい。この女の
 やうに後から来るもの、見せしめにされる所でした」

有望。「私は實に馬鹿でした。後悔します。今ロトの妻になつてゐないのが不思議な位です。
 この女の罪と私の罪と別に違ひがありませんから。この女は唯振り向いたのですし、私は
 行つて見やうとしたのです。神の恩寵は有難い。そんな事が心の裡にあるといふのはお耻か
 しい次第です」

基。「茲で見た所を心に留めておきませう、来るべき時の助になりませうから。この女は一
 つの審判を免れて、ソドムの滅亡では死なかつたが、現に私共の見るやうに、他のことで滅

されて、鹽の柱に化せられた次第です」

有望。「誠に、この女は私共にとりて警戒ごも懲罰ごもなります。この女の罪に習ふなどい
 ふ警戒です。又この警戒を受けても思ひ留まらないと、立所に審判に遇ふといふ表號です。

（民数記、用心
廿六章）

コラ、ダタン、アピラムとその部下二百五十人がその罪のために滅びたのも
 すべき表號又懲罰です。けれども特に一つ深く考へねばならぬ事は、この女が唯後を振り向
 いただけで、一足も後へ踏み出したといふことは書いてありません、鹽の柱に化するほどのな
 ら、デマスやその輩が彼處に立つて能くも大膽に財寶を探してゐられます。殊にこの女の
 蒙むつた天罰は、見せしめとして彼等の見える所にあるではないですか。目を擧げたら、ど
 うしてもそれを見ずにゐられないわけですね」

基。「それは實に不思議な事ですが、彼等の心がそれだけ狂暴になつてをるとも言へるです。
 これを譬ふれば裁判官の前で人の懷中を狙ひ、斬首臺の下で巾着切をなす者に誠に能く似て
 るますな。ソドムの民は「主の前に」罪人なる故に、非常なる罪人だと言はれてゐます。

（創世十三）その頃までソドムの地は神から親切にされて、エデンの園のやうに麗はしかつたの
 だが、主の目の前で罪を犯したのです。それ故一層神の怒を増して、その災禍を熱して主の

火を天から降らしむるに至つたのです。さういふ次第ですから、目の前に絶えず實例を置いて警戒められるのか、はらす、それを見ながら罪を犯すといふのは、最も厳しい天罰を受けなければなりません」

有望。「實際御言葉の通りです。でも、貴君も、いや殊に私がその實例とならなかつたのは何によりの仁恵でした。これを好い機会として、神に感謝し、神の御前に畏こみ、常にロトの妻を思ひ出すことにしませう」

さて私が見てゐると、二人はその路を進んで、愉快い川の邊に出た。それはダビデ王が「神の川」(詩四十四)と呼び、ヨハネが「生命の水の川」(黙示廿二)と呼んだ所である。今しもその路は川の岸に沿ふてゐるので、基督者とその同伴とは大歡びで歩いた。流の水を掬んで喉を濕して、疲れた心を慰め、又元氣づいた。それから川の岸には、兩側に緑の木立があつて、種々な果實が生つてゐた。又其葉を食すると、食傷を防ぎ、その他旅に疲れた身軀に起り勝ちな他の病にも效能があつた。又川の何れの側にも妙に美しい百合の咲いた草原があつて、年中青々としてゐた。この草原は安らかなので、二人は横になつて眠つた。目が醒めると、再び木の實を集め、又流の水を掬んで、やがて又横になつて眠つた。かうして二人は數日數

夜を送つた

「水晶の流は清く道に添ひ、

旅行く人を感さめぬ。

緑の草場、百合かほり、

美味き木の實をそなへけり。

その果實と葉と木とが

生えし由來を君知るや、

知らば忽ち所有物を、

賣りてぞ買はん、この野原」

やがて二人は(未だ旅の終りではないので) 出立の用意をして、喰ひ且つ飲んで、出立した。

さて私が夢の中で見てゐると、二人がまだ遠くも行かないのに、川と路とはやがて分れたので、二人は尠なからず名残を惜しんだ。それでも二人は路を離れやうとはしなかつた。さて川を離れてからの路は難澁で、足さへ長い旅のために疲れを生じた。それ故旅人はその路

のために大に心を苦しめた（民数廿）そこで二人は歩みながら、善き路もあれかしと願つた。すると藪し前に當つて、路の左側に、一つの草原と、その方へ越えて行く踏み段があつた。その草原は拔路の原と呼ばれた。そこで基督者は同伴に向つて、「この草原が私共の路筋と並んでゐるなら、この中を通り抜やうぢやありませんか。かう言つて踏み段に上つて見ると、見よ、垣の向ふ側にも路があつて、こちらの道と並んでゐる。そこで基督者が言つた。「これは私の望み通りです。此の小路の方が遙に樂です。さあ、有望者さん、こちらを通り抜けませう」

有望。「それでも、若しこの小路を行つて、本道を離れてしまひはせんでせうか」

「そんな事はありますまい」と基督者が言つた。「御らんない、本道筋と並んでゐるではないですか」

そこで有望者は同伴に勸められて、その後をついて踏み段を越えて行つた。そこを越えて小路に入ると、いかにも足が軽くなつた。それから前を見ると、一個の人が自分等のやうに歩いてゆくの見出した。その人の名は空頼者といつた。二人は彼を呼び留めて、「この路は何處へ行きますか」と問ねた。

「天國の門へ」と彼は言つた。

「ごらんない」と基督者は同伴に向つて、「私が言つた通りでせう。矢張この路を行つて差支へないです」

そこで二人は随つて行つた。空頼者は二人の前に進んだ。然るに見よ、夜になつて、全く暗くなつてしまつた。そのため後から行つた二人は前に行つた人の姿を見失なつた。

前に行つた者は、（その名の通り空頼者なので、足許を慎しまなかつたので、深い坑に落ちた。その坑はこの土地の大君が空しき榮華を恃む馬鹿者を捕へるために設けられたものである。彼はそこに落ちて片々に碎けた。

基督者とその同伴とは彼の落つる音を聞いた。どうしたのですかと呼んで見たが、答へはなく、唯呻く聲が聴えた。そこで有望者は、「私共は今何處にをるのでせう」と言つた。その同伴は黙つてゐた。本道を離れて、どんだ處へ案内したと疑はしくなつたからである。折しも雨が降り出して、雷鳴、稲妻も凄まじく、水さへ溢れ出した。

有望者は打ち嘆いて、「本道を離れなければ可かつたですな」と言つた。

基。「この路を行つたら、本道を離れやうとは誰も想ひませんでしたからな」

有望。「私は初めから變だと思ひました。だから、貴君に一寸念を押したのです。もつと鮮然言ひたかつたのですが、貴君は私よりも年上ですから」

基。「まあ、兄弟、腹を立て、下さるな。貴君を本道の外に連れ出して、こんな危ない目にあはせたのは、何んとも申しやうもないのです。どうぞ、兄弟、赦して下さい、悪い氣で仕たのではないから」

有望。「いや、兄弟、そんな心配は止めて下さい。何んとも思つてゐませんから。これは却つて私共の幸福になるでせうから」

基。「私は情深い兄弟と一緒に嬉しく思ひます。それは兎に角かうして立つてもゐられませんか。引き返さうぢやありませんか」

有望。「それでは、兄弟、今度は私が前に行きませう」

基。「いや、どうぞ私を前へ行かして下さい。危険なことでもあつたら、私が前に當りますから。私のために、路を離れるやうになつたのですから」

「いや」と有望者が言つた。「貴君が前へ行かない方が可いでせう。貴君は心が紊れてゐなさるから、又路を迷ふかも知れません」

やがて何處ともなく人の聲がして、「汝のゆける道なる大路に心を定めよ、歸へれ（二〇廿一）と聽えたので、二人は心を屬まされた。けれどその時には水が大いに増したので、歸り途も甚だ危なかつた。「その時私は私共の居る路から出ることは容易しいが、外からその路に歸つて來ることは六ヶ敷いものだと思つた」。なほ二人は歸らうと努めたが、暗さは暗し、洪水は漲つてゐるし、その歸り途で、九度か十度、溺れる所であつた。

二人は有らん限りの力を盡したが、その夜はかの踏み段に返ることが出来なかつた。それ故に僅かな樹蔭を頼つて、そこへ腰を下して夜の明けるのを待つことにした。所が疲れてゐるので、ぐつすり睡込んでしまつた。さて二人が横臥はつてゐる場所から遠からぬ所に疑惑城と呼ばれる城砦があつた。その城主は絶望者といふ巨人であつた。その領内に二人は睡つてゐるのであつた。絶望者はその朝早く起き出でて、あちこち見廻つてゐたが、忽ち基督者と有望者がその領内に睡つてゐるのを見付け出した。そこで猛惡な凄い聲を出して、目を醒させて、「お前達は何處から來た。どうしておれの領地へ入つて來たかと問ねた。二人は旅人で、道に迷つた者であることを話した。

そこで巨人は言つた。「お前達は昨夜おれの領地に忍び込んで、睡込むなど、不屈千萬であ

る。曳き立て、行くからさう思へ」

そこで二人は無理やりに連れて行かれた。巨人は二人より強いのだが仕方がない。二人は身の過失を知つてゐるので、別に言ひわけもしなかつた。それ故巨人は二人を追ひ立て、その城砦の中へ入れて、甚だ暗い牢屋に押し込めた。そのむさ苦しく悪臭いのに二人は堪へられなかつた。この牢内に、二人は水曜日朝から土曜日の夜まで置かれた。一片の麵麩も、一滴の水も、燈火も興へられず、又二人がどうしてゐるか問ねる者もなかつた。されば茲に二人は友もなく知人もなく、傷ましき限りを盡した。殊に基督者は獨り合點の無分別から、兄弟をもこんな惱みに連れ込んだので、此處で二重の悲しみに嘆くのであつた。

さて巨人の絶望者には一人の妻があつて、その名を疑念女といつた。巨人は臥床に入つてから、その日の出来事、即ち二人の囚人を捕へたこと、領地を侵したので二人を牢屋に繋いだことを妻に話して、この上どうしたら善からうと問ねた。妻はその二人が何者で、何處から来て、何處へ行くものかと問ねたので、巨人はその事をも話した。そこで妻は翌る朝起き出でたら、用捨なく叩きなさいと巨人に勧めた。それ故巨人は起き出づると、重い野生林檎の樹の棍棒を持つて、牢屋の中へ降りて往つて、まるで犬かなにかのやうに、先づ二人に罵

しりかゝつた。けれども二人は一言も口返答をしなかつた。やがて二人に飛びかゝつて、畏ろしくも打ち叩いたので、二人は身をかはすことも、床の上で寢返りすることも出来ぬほどであつた。かうしてから、巨人は出で去つたので、二人はその不幸を悔み、その惱みを嘆くのであつた。その日一日、唯嘆息と苦い涙にかきくれた。その次の夜、巨人の妻は尙ほ夫と話しをして、二人がまだ生きてゐるのを聞いて、二人に自殺を勧めるやうに忠告した。翌る朝になると、巨人は前のやうに凄まじい姿で出かけて行つて、二人が昨日の打擲で痛く苦しんでゐるのを見て取つてから、お前達は此處を出やうとしても出られぬのだから、短刀で自殺するなり、首を絞るなり、毒藥を呑むなりするほか仕方あるまいと言つた。こんな苦しい想をして生きてゐるがものはなからうと言つた。所で二人はどうぞ赦して下さいと頼んだ。そこで巨人は凄まじい顔をして、攫みかゝつて、あはや息の根を止めやうとしたが、折しも俄に瘧瘵を起して（天氣の麗らかな日に、時々彼は瘧瘵を起した）、一時の間その手が不随になつた。それ故巨人は出で去つたので、二人は又取残されて前のやうにどうしたものか考へ込んだ。やがて囚人はその勸言に従つたものかどうか、互ひに相談して、かう語り合つた。

「兄弟」と基督者が言つた。「どうしたものでせう。かうして生きてゐても悲惨な生命ですな。

私には生きてゐたが可いか、直ぐ死んだが可いか解らなくなりました。わが靈魂は生くるよりも息の閉ぢんことを望む（ヨブ七）のです。墓場はこの牢屋よりも氣樂でせうから。どうです、あの巨人の言ふ通りにしませうか」

有望。「實際今のこの状は身の毛がよだつやうです。かうしていつまで存らへるよりも、死んだ方が遙かに増しでせう。だが、まあ、考へませう。私共のさして行く國の主は、『汝殺すなかれ』（出埃及廿）と言はれたでせう。それは他人を殺すばかりぢやない、他人に勧められて自分を殺すことをも尙ほ厳しく禁じられたのでせう。そればかりか他人を殺すのは、その人の身軀だけを殺すに留まるが、自から殺すのは、身軀も靈魂も一緒に殺すのです。そればかりぢやない、兄弟、墓場の方が氣樂だと言はれましたが、地獄を御忘れですか。人殺しをした者は確にそこへ行かねばなりませんぞ、『凡そ人を殺せる者は限りなき生命なし云云』（ネー書三〇）とありますからな。それから又考へてごらんさい、凡ての律法はあの巨人絶望者の手にあるのぢやございませぬ。私の知る處では、私共のやうにこの巨人に捕はれたもので、その手から逃げ出した者もあるといふことですぞ。世界を造りたまへる神でなければ解らんことが茲にあるです。それは巨人絶望者が死なないとも限らんことです。或はいつか一度彼

がこの牢屋の錠を下すことを忘れるかも知れません。或は又近々の内に、私共の前で例の極擧を起して、手足の自由を失なうかも知れません。若しかさういふ事が起つたら、勇ましく奮起して、あらん限りの力を盡して彼の手を連れやうぢやありませんか、私はさう決心しました。もつと前にさうしなかつたのは馬鹿でした。鬼に角、兄弟、辛抱ませう、もう尠しです。自分で自分を殺すやうなことは止めませう」

かう言つて、有望者は兄弟の心を和めた。そしてその日も暗の中に座つて悲しい憐れな状にあつた。

さて夕暮になると、巨人は四人が自分の勧めに従つたかどうか、見るために、又牢屋へ下つて行つた。所がそこへ来て見ると、二人は生きてゐた。實際生きてゐることは生きてゐるのだが、麵麩と水を缺いてゐるので、又叩られた時に受けた傷のために、僅かに息が通ふばかりであつた。しかし鬼に角生きてゐるので、巨人は見るより凄まじく怒り出して、お前達はおれの言ふことを聴かぬからには、生れなかつたことを悔ゆるほど辛い目に遇はせてやるからさう想へと言つた。

これを聞いて、二人はぶる／＼胴震ひがした。殊に基督者の方は卒倒してしまつた。暫ら

くすると、正氣づいて、再び巨人の勸めに従がつた方が善いかどうか相談した。又も基督者はさうしたいやうであつたが、有望者は再び次のやうに答へた。

「兄弟」と彼は言つた。「貴君はこれまで實に勇ましかつたのに、それをお忘れですか。アポリオンも貴君を取り挫ぐことが出来なかつた。死の蔭の谷で見たり、開いたり、觸れたりしたのも、皆貴君を取り挫ぐことが出来なかつた。いかなる困難も、恐怖も、驚愕も既に貴君は通り越して来たではありませんか。それを今更なに怖れるのですか。これこの通り、私といふ者が貴君と一緒にこの牢屋に居りませう。この私は本来貴君よりもつとゞ弱い人間です。又この巨人は貴君と同じやうに私をも傷付けたのです。私の口からも麴麴と水を断ち切つたのです。そして私も光のない黒闇で嘆いてゐるのです。ですが、もう少し忍耐の修行をしやうぢやありませんか。貴君はあの虚榮の市場で男らしく振舞つたではありませんか。鍵をも、檻をも、血だらけの死をも怖れなかつたではありませんか。だから、尠なくとも基督者たるに耻ざるために、出来るだけ忍耐して身を保たうではありませんか」

やがて又夜になつた。巨人とその妻とは臥床に入ると、囚人はどうしました、お勸めに従ひましたかと妻は問ねた。巨人はそれに答へた。彼奴等は強情な悪者だ。自ら殺るよりは、

どんな困難でも辛抱しやうと言やがる」

そこで妻は言つた。「では、明日お城の庭に二人を曳き出して、貴君が今まで殺しなすつた者共の骨や鬨骨を見せてやつて、それから一週間も経たない内に、彼等も矢張その通り片々に引き裂かれることを知らせておやりなさい」

翌る朝になると、巨人は又二人の所へ往つて、城の庭へ曳出して、妻が言ふ通りそれを二人に見せた。そして言つた。「これはお前達のやうに、一度は旅人で、矢張お前達のやうに、私の領地へ侵入したのだ。私は好い頃に、此奴等を片々に引き裂いたのだが、お前達も十日の内にはさうしやうと思つてゐる。さあ、もう一度牢屋に下つてをれ」かう言つて、途々二人を叩りつけるのであつた。それ故二人は土曜日一日、前のやうに悲しい状で横になつてゐた。やがて又夜になると、疑念夫人とその夫の巨人は臥床に入つて、また囚人のことを相談した。その時老ひたる巨人は、どんなに叩いても、勸めても、二人の息の根を止めることが出来ないのを不審がつた。それを聞いて、妻は答へた。「もしや、誰れか救けに来るのを望んで生きてゐるのではないでせうか。それとも身に開錠器を持つてゐて、それで逃げ出さうとしてゐるのではないでせうか」

「さう言はれれば、成程な」と巨人が言った。「それでは翌の朝、二人の身體を捜して見やう」
 さて二人は土曜日の夜中に祈り出して、夜の明けんとする頃まで、祈りつゝいた。いよいよ日の出の近い頃、性の善い基督者は、吃驚眼を醒した人のやうに、熱情をこめて憊言ふのであつた。「なんといふ莫迦だらう、私は、自由に歩ける時に、こんな息苦しい牢屋に蹲つてゐるなんて。さうだ。私の胸には約束といふ鍵があるのだ。それで疑惑城のいかなる錠でも開けることが出来るぞ教へられてゐたのに」

そこで有望者は言った。「それは善い音づれた。兄弟、それを胸から取り出して、やつてごらんさい」

やがて基督者はその鍵を胸から引き出して、牢屋の戸に當てがつて見ると、鍵の轉ると同時に、門が外れて、戸はやすくと開いたので、基督者と有望者とは外に飛び出した。やがて城の庭に導く外側の戸の所へ来て、又鍵を當てがうと、その戸も開いた。それから鐵の門もそれで開く筈だと思つて、そこまでやつて来た。その錠は極めて嚴重であつたが、矢張其鍵で開いた。やがて二人はその門を押し開けて、逸早くも遁げ出した。所がその門が開く時に、軋る音がしたので、巨人の絶望者は目を醒して、急いで起き出て、囚人を追ひかけや

うとしたが、手足が利かなくなつた。例の癡變が起きたので、どうしても追ひかけることが出来なかつた。そこで二人は落ち延びて、王の街道に出た。最早そこは巨人の領地の外なので、安全であつた。

今や二人はかの踏み段を越えたので、後から来る者が巨人絶望者の手に落ちることのないやうに、その踏み段になんとか工夫をしたものだぞ考へ始めた。やがて二人は申合はせて、そこに一本の柱を建て、その横にかういふ文字を彫り付けた。「この踏み段のあなたは疑惑城への路である。その主は巨人絶望者といつて、天の國の王を輕んじ、聖き旅人を滅さうとする者である」

このため後から来た者は記された此の文字を読んで、その危険を遁れた者も多かつた。かうしてから、二人は次のやうに歌つた。

「路の外にぞ、ゆきぬ我等は。」

禁せられし地、踏みぬ我等は。

後に来る人、ゆめ油断すな。

城の名まへは、疑惑ぞよ。

正 篇
城主の名まへは、絶望ぞ。

これを侵して、囚はるな。

十

やがて二人は尙ほ進んで、遂に歡樂山に來た。その山は前に語つたかの岡の主の有であつた。二人はその山に登つて、花園や果樹園や、葡萄園や噴水などを見た。そこで二人は水を飲んだり、身體を洗つたり、又思ふまゝに葡萄を喰つたりした。その山の頂には、牧羊者が羊の群を牧つてゐたが、折しも路傍に立つてゐた。旅人はその側へ行つて、(疲れた旅人が路傍で誰れかと立ち話をする時に能くさうするやうに)、杖に憑りかゝつて、かう問ねた。

「この歡樂山といふのは何誰の有ですか、それから茲に牧つてゐる羊は何誰のですか」

牧羊者、「この山はイムマヌエルの領地です。その都も茲から見えます。この羊も主の有で、主は彼等のためにその生命を捐てたまふたのです」(ヨハネ十)

基。「これは天の都への路ですか」

牧。「確かにその路でございます」

基。「茲からどれほどありますか」
牧。「是非其處へ達しやうと思ふ者のほか、とても行けないほどあります」

基。「路は安全ですか、危険ですか」
牧。「安全であるべき者にどりては安全です。『されど罪人はこれに躓かん』です」(ホセア十)

基。「此所には、路で疲れて弱つた旅人が救助を求めるところがありますか」
牧。「この山の主から私共は、『旅人を待遇することを忘るゝなかれ』(ヘブライ)と言ひ付けられてゐますので、此處の善いものは何んでも貴君方の心まかせです」

私が又夢の中で見てゐると、牧羊者達は二人が旅の者であることを認めて、種々な事を問ねた。何處から來ましたかの、どうして此の路へ入つて來たかの、又茲へ來やうと思ひ立つても、この山まで登つて顔を見せる者は極く稀だのに、どうして茲まで辛抱が出來ましたかのと言ふので、二人は他の場所でしたやうにそれに答へた。牧羊者達はその答を聞いて、大いに歡んで、いと懐しげに二人を眺めて、「よくこそ、歡樂山にお出でなすつた」と言つた。さてこの牧羊者達はその名を知識者、經驗者、警醒者、至誠者といふ者であつたが、二人の手を執つて、天幕の裡に招いて、折から備へておいた物を配つて二人を待遇した。尙ほ彼

等は言葉をついで、「貴君方は暫らく茲に逗留なすつて、私共とお近親になつて下さい、それからこの歡樂山の善い物でもつと心を慰めなさいまし」

そこで二人は悦んで逗留しますと言つた。それに夜もいたく更けたので、最早休むことにした。

やがて私が夢の中で見てゐると、翌る朝牧羊者達は山の上を散歩するやうに基督者と有望者を呼び起した。そこで二人は一緒に出かけ、四方の楽しい眺望を見ながら、暫らく散歩した。やがて牧羊者達は互ひに「旅の方に不思議な事を見せてあげませうか」と言つた。さうするに定めて、先づ誤謬の岡と呼ぶ小山の頂につれて往つた。その岡の窮まる所は峻しい絶壁になつてゐた。その底を見下すやうに告げられたので、基督者と有望者とは覗き込んだ。その底には頂から落ちて片々になつた人の屍が澤山にあつた。そこで基督者は言つた。「それはどういふわけですか」

牧羊者達は答へた。「御聴きになつたことがございませう。ヒメナヨとビレットが復生は既に過ぎたりと説くのを聴いて、多くの人が謬まられましたことを」(テロア後二〇)

二人は答へた。「えい、聴きました」

牧羊者達は言つた。「御覧の如く、この山の谷底に片々になつてゐるあの亡骸はその人達です。かうして今日まで埋けもしないで置かれるのは、あまり高く登らうとする者やあまり近くこの山の端に近よる者を戒しめるために、他の者の實例にするためです」

私が見てゐると、やがて牧羊者達は他の山の頂に二人を連れて往つた。それは用心の山といつた。そこで二人は遠くを眺めるやうに告げられた。で、さうすると、數多の人がそこにある墓場の中をあちこち歩いてゐるのがぼんやり見えるやうであつた。その人達が時々墓石に躓ぐいたり、又墓場の中から出て來られない所を見ると盲目らしかつた。そこで基督者が言つた。「これはどういふわけですか」

牧羊者達は答へた。「この山の下から一寸離れた所に、この路の左の手にあたつて、草原へ出る踏み段があるのを御覧になりませんでしたか」

二人は答へた。「えい、見ました」

牧羊者達は言つた。「その踏み段から、一筋の小徑があつて、眞直に巨人絶望者の居る疑惑城に通じてゐます。この人達は(と墓場の裡に居る者を指さして)、貴君方のやうに都詣に出かけて、その踏み段の所まで來たのです。右の路は其處にさしかゝると難澁なものだから、

その草原の方へ出る路を選んだのです。そして巨人絶望者に捕らはれて、疑惑城に投げ込まれて、暫らく牢屋に入れられてから、遂に目をくり抜かれて、あの墓場の中へ連れて来られたのです。そして今日までかうしてぞろ／＼してゐるのですが、賢い人の言つた、「悟明の道をはなるゝ者は死にし人の集會の中に居らん」といふ言葉に能く當つてゐます」

そこで基督者と有望者とは互に顔を見合はせて、涙をほら／＼と流したが、それでも牧羊者達には何んにも言はなかつた。

やがて私が夢の中で見てゐると、牧羊者達は麓の或る他の場所へ二人を連れて行つた。そこには山腹を穿てる入口があつた。彼等はその戸を開けて、中を見なさいと言つた。二人が覗いて見ると、その中は眞暗で、黒烟が立つてゐた。又火の燃ゆるやうなごう／＼いふ音につれて、呵責の泣き聲を聴き、又硫黄の香がぶん／＼した。そこで基督者が言つた。「これはどういふわけですか」

牧羊者達は言つた。「これは地獄の間道で、偽善者の通る處です。エサウのやうに長子の權を賣る者や（創世廿五）ユダのやうにその主を賣る者や（マタイ廿六〇）、アレキサンデルのやうに福音を誘ふ者や（テモテ後）アナニヤと其の妻サツピラのやうに伴はり紛らさうとする者

（使徒行五）などは、皆茲を通るのです」

その時有望者は牧羊者達に向つて、「しかしこの人達も、私共のやうに、それ／＼都詣の装ひをしてゐたと思ひますが、さうではありませんか」

牧羊者「さうです、長い間その装ひをしてゐました」

有望者「それにも係はらないで、これほど悲惨な最後を遂げたところを見ると、この人達の進んだ路程はその頃どれほどだつたのですか」

牧羊者「この山を通り越した者もあるし、通り越さない者もありました」

そこで二人の旅人は互に言つた。「私共も強い者に叫んで力を求めなければなりませんな」

牧羊者「さうです。その力を得られたら、又それを用ひなければならんでせう」

この時旅人達は前に進みたいと思ふし、牧羊者達もさうさせたかつた。そこで一緒に山の端の方へ歩いた。やがて牧羊者達は互に言つた。「この旅の方達が私共の望遠鏡を使ふ心得があるなら、天の城門を見せてやりませう」

旅人達は厚くその志を感謝したので、やがて麗朗といふ高い岡の頂に連れて行つて、その眼鏡を渡して眺めさせた。

二人は眺めやうと試みた。けれども牧羊者達に見せてもらつた先程の事などを思ひ出して、手がふる／＼した。それが妨げとなつて、確かに眼鏡を覗いて見ることが出来なかつた。それでも門のやうなものと、又其所の榮光ある状態が見えたやうに想つた。やがて二人は次の歌をうたひながら、立ち去つた。

凡て他の人の知らざる秘事も

牧羊者には現はされけり。

さらば君、深く隠れしその不思議、

來りて見よや、牧羊者のもと。

二人の別れに臨んで、一人の牧羊者は路の畧圖をくれた。他の一人は二人に向つて、阿諛者を慎しみなさいと言つた。第三の者は迷魂の地に睡つてはゐけないと注意した。又第四の者は道中の安全を祈りますと言つた。折しも私は夢から醒めた。

十一

私は又睡つて、再び夢を見た。見ると同じ二個の旅人は山を下つて、都をさして往來を歩

いて往く。さてこの山の下から勘し行つた左手に當つて、己惚國といふがあつた。その國から今旅人の歩いてゐる路に出て來る小さな曲つた横路があつた。それ故二人は茲でその國から出て來たいかにも活潑な少年に出合つた。その名は無學者といつた。そこで基督者は彼に向つて、何處から來て、何處へ行かれるのかと問ねた。

無學。「私ですか。私はこの路の左手を一寸行つた處に國がある。その國に生れた者でして、天の都をさして參るのです」

基。「天の門へ入るのは中々六ヶ敷いといふことだが、貴君はどうしてそこへ入るつもりですか」

無學。「他の善人達のするやうに」

基。「では、その門へ行つたら、どんなものを見せて、門を開けてもらふつもりですか」

無學。「私は主の聖意を知つて、これまで正しい生活をしてゐました。誰の者でもその人に返しましたし、祈りはするし、斷食はするし、所得の十分の一は献げるし、施物はするし、それから都に行かうと思つて、郷里をも棄てました」

基。「しかし貴君はこの路の入口にあつた耳門から來ないで、その曲つた横路から茲へ來た

のでせう。だから、御自分ではどう思はれるか知らないが、呼出の日になると、多分貴君は盗人なり強盗なりと咎められて、都には入れられないかも知れません」

無學。「お二人方は私と赤の他人でせう。私は貴君方を知りません。貴君方はお國の宗教に従ひなさるが可いし、私は又自分の國の宗教に従ひます。それで結構ではありませんか。貴君方の仰やるその耳門といふのは、私の國から遠方なことは誰でも知つてゐます。私の近在では誰もそこへ行く路を知つてゐる者はありません。又知つてゐても知らなくても、そんな事は誰でも願はんです。御覽の通り、立派な愉快な縁の徑があつて、私の國から出て來られますし、又その方が近道ですからな」

基督者はこの人が伶俐さうに己惚てゐるのを見て、有望者に囁いた。「彼よりも却つて愚かなる人に望みあり (無言廿六) ですな。又、愚かなる者は出で、途を行くに當りてその心足らず、おのれの愚なることを凡ての人に告ぐ (傳道者) とありますが、どうでせう、もつこの人と話しませうか、それとも暫らくこの人より先へ歩いて、今まで言つて聽せたことを考へさせて、それから又待ち受けて、段々にこの人の爲めになるやうにしてやりますか」
そこで有望者は歌つて言つた。

「無學の者にいま暫し、

言はれしこと想はしめよ、

善き勸めをば嫌はずに、

守らば、いとも大いなる、

所得を知らで在るべきや、

神は悟性をたまふゆゑ、

それを持ざる者いかで、

神の救ひを受くべきぞ」

有望者はそれに附言して、「一時に皆なあの人に言ふのは善くありませんよ。仰せの通り、尠し先へ行つて、それから「負ふことの出来る」 (民數記十) ほごづ、話してやりませう」

そこで二人は先へ進んだ。無學者は後から來た。二人は彼を離れて尠し行くと、いと暗い小徑へ入つた。そこで一個の人が七つの悪鬼のために七つの強い繩で縛られて、(二〇四五)かの岡の側で見た地獄の入口の方へ曳かれて行かれるのを見た。基督者はそれを見て身を慄はした。同伴の有望者も慄へた。しかし悪鬼がその人を連れ去る時に、基督者は振り向いてそれ

六月十七日

が誰だか眺めた。そしてどうもそれが背教の町に住んでゐる變心者といふ人らしいと想つた。けれども捕まへられた盗人のやうに首をうな垂れてゐるので、顔が能く見えなかつた。しかし通りすぎる時に、有望者はこれを見送つて、その脊中に、「放蕩先生、永罰の背教者」といふ銘を書いた紙が張つてあるのを見た。

そこで基督者は同伴に言つた。「私は今思ひ出したことがあります。それはこの近所の善人の身に起つた事です。その人の名は薄信者といひましたが、しかし善人で、至誠の町に住んでゐました。その事件といふのは慙うです。この通路の入口に當りて、廣道門から出て來る小徑で、死人小路といふのがある。それはいつもそこに人殺があるので、さう呼ばれてゐるさうです。所でその薄信者が私共のやうに、都詣に出かけたのですが、圖らずもそこへ憩んで睡つたのです。恰度その時、廣道門からその小路へ差しかつたのは、三人の力の強い惡者で、小膽者、不信者、有罪者といつて三人兄弟です。彼等は薄信者の睡つてゐるのを窺がつて、まつしぐらに駆け寄つた。折しもかの善人は睡眠から目を醒して、いざ起ち上つて歩き出さうとする所です。で、彼等はこれを取りかこんで、嚇文句で、立つてをれと言つた。それを聽いて、薄信者は布片のやうに蒼白めて、腰を抜して、抵抗するとも逃げ出すことも

出來ない。そこで小膽者は、「財布を出せ」と言つた。が、薄信者は、元よりその金を失したくないので、ぐづぐづしてゐた。すると不信者は飛びかゝつて、懷中に手を入れて、銀の袋を一つ攫み出したので、「泥棒、泥棒」と叫ぶと、有罪者は手に持つてゐた太い棒で、薄信者の頭を叩りつけたものだから、唯その一打で地にへばりついて、だくぐと血が出て死にさうであつた。泥棒共は暫らくその側に立つてゐたが、やがて人の來る足音がしたので、それが篤信の市に住んでゐる大惠者であつては大變だと思つて、踵をめぐらして逃げ出した。取り残された善人は漸く起き上つて、よろめきながらその路を歩いて行つたさうで、まあさういふ話です」

有望。「泥棒はその人の持つてゐた物を皆奪つたのですか」
基。「さうではないです。寶石をいれておいた場所は捜さなかつたさうで、それだけは残つたのでした。でも、話によると、その善人はその追刺のために、路用を大分取られたので、非常に難儀をしたさうです。それでも寶石は取られなかつたのだ、僅かな端錢が残つてゐたので、どうやらかうやら旅を終つたさうです。いや、私が聞き違へをしなければ、寶石を賣るわけにもゆかないので、生命を繋ぐために、乞食をしなければならなかつた。乞食でも何

んでも出来ることをして、大抵空腹を抱へて、残りの路を大分歩いたといふことで「有望」でも、通券を奪はなかつたのは不思議ですな、天の門を通されるにはなくてはならぬものだに」

基。「いかにも不思議です。が、それを奪はれなかつたのは、なにもあの人の機轉ではありません。賊に襲はれると狼狽へてしまつて、抵抗する力もなければ、物を隠す餘裕もなかつたのですから、その善い物を奪られなかつたといふのは、全く神の思召で、あの人の骨折ではありません」

有望。「でも、その寶物を奪られなかつたのは、せめての慰さめでしたな」

基。「それを尋常に用ゐたら、大きな慰さめである筈ですが、私にその話をしてくれた人の言ふところでは、金を奪られたことをあまり落膽してしまつて、残りの道中でその寶物を使ふこともなにも仕なかつたさうです。實際残りの道中で大方その寶物を忘れてゐたのです。時には思ひ出して、それに慰められかゝると、忽ち盜難の心配が新らしく起つて来て、他のことを考へる餘裕もなかつたさうです」

有望。「實に可哀想な人ですな、それでは唯非常に悲しむばかりですな」

基。「悲しむ？ さうです、實際悲しむばかりです。私共でも盜難にあつて傷を受けて、そんな知らぬ土地であの人のやうな目にあつたら、悲ますにはゐられませんからな。悲しみのあまり死なゝかつたのは不思議な位です。又話によると、残りの途すがら唯もう愚痴やら不平やら並べたてゝばかりゐたさうです。途々誰かに追ひつかれたり、追ひついたりすると、直ぐ盜難の話を持ち出して、その場所や、その有様や、盗んだ人達のことや、盗まれた物や、傷を受けたことや、漸く生命だけは救つたことなどを話したさうです」

有望。「でも、それほど困窮つたなら、その寶物を賣るか質入するかして、路用に當てれば可いに、どうしてさうしなかつたでせう、不思議ですな」

基。「そんなことを言ふと頭に殻をつけた黃雞のやうですぞ、どうしてそれを質に入れませう。また誰にそれを賣りませう。その盜難にあつた國では何處へ行つたつて、そんな寶石は一文の價値もないです。又かの人にした處がそれを賣拂つて一時の凌ぎをしやうとはしなかつたのです。その寶石を持たずに天の都の門へ行きますれば、忽ち拒絶けられて副業を受けることが出来ないのは、かの人も能く知つてゐますからな。さうすれば千萬の盜賊に出遇つて、悪事をされるよりも、もつと辛いです」

有望。兄弟、貴君はさうしてさう皮肉ですか。エサウは僅か一杯の美物のために長子の権を賣つたでせう（ヘブライ十）。その長子の権はエサウの最も大ひなる寶物であつたのです。エサウもさうするからには、さうしてあの薄信者もさうすることが出来ないですか」

基。「成程エサウは長子の権を賣りました。その他にも澤山さういふ事をしたものはありませんが、さうして皆なあの卑劣な男のやうに大切な祝福から自ら離れるのです。しかしエサウと薄信者との間には區別を立てねばなりません。その持物の區別も肝要です。エサウの長子の権は模型的だが、薄信者の寶物はさうではありません。エサウはその腹を神のやうに拜んだが、薄信者はその腹をそんなことはしない。エサウの願望は肉體の慾であつたが、薄信者はさうではありません。そればかりかエサウはその慾を満すことに眼眩んで、「我は將に死なんとせるに、この家督の權われに何の益をなさんや」（創世廿五）と言つたさうですが、この薄信者は唯僅かばかりの信仰を持つてゐるだけです。その僅かな信仰に依つて、そんな無關心なことはせず、寶物を大切にしてエサウが家督の權を賣つたやうなことはしなかつたのです。エサウに信仰があつたやうなことは何處にも書いてないでせう。實際僅かな信仰もなかつたのでせう。だから、肉慾の動くがまゝに、（信仰のない者はそれに抵抗することが出来ないか

ら、その家督の權を賣つても、又その靈魂も何にもかも賣つて、地獄の鬼に渡したところで、不思議な事はないです。つまり牝驢馬のやうなもので、「その慾の動く時、誰かこれを止めえんや」（エレミヤ）ですから。その心が肉慾の方へ動く時には、その報ひにはかまはず、それを遂げやうとするですから。然るに薄信者はそれは全く性が違つて、その心は聖い事に向つて居るのです。靈なるもの、上なるものを求めて日を送つてゐるのですから、さういふ性の者がさうして（假令買ふ人があつても）その寶物を賣つて、空しき物で心を満さうとしませうや。いくら腹を満くなるといつて、一文の錢でも馬草を買ふためには誰も出さんでせう。又班鳩をどんなに仕込んでも、鳥のやうに腐肉を喰ひませんでせう。元より信仰のない者は肉の慾のために、持つてる者を質入れもするし、抵當にも入れるし、賣り拂ひもしますし、又自分の身をも即座に渡しますが、信仰ある者はたとへ僅かな信仰でも、そのためにそんな事は出来ません。そこで、兄弟、貴君の間違つてゐるのは「

有望。眞實にさうでしたな。だが、貴君があまり皮肉だから、つい勃としました」

基。「いや、貴君を雛鶏に譬へたのは、頭に殻をのせて何處でも願はず駆け廻るので、いかにも敏捷いからです。併しそんな事はさうでも可いのです。これまで言つた事を考へて見れば、

貴君と私との間に何にも蟻まりはないでせう」

有望。「それは兎に角、基督者さん、その三人の奴等はごうも私には、卑怯な連中だと思はれますがな。さもないければ通りがりの人の足音を聴いて逃げ出すなんてことはない筈です。それから薄信者にした處で、どうしてもつと大膽に振ひ起たないでせう。せめて一度位立ち合つてから、どうしても駄目なら降参するが可いです」

基。「彼奴等が卑怯だと言ふ者は多いですが、いざといふ時に存外それが解らんと見えます。とりわけ薄信者には大膽な處などは一つもないです。それは兄弟、貴君があの人であつたら、降参するまでも、必ず一立合ひしたでせう。それはさうと貴君も盜賊が今側にゐないから腹一杯なことを言つてゐられますが、若し薄信者にしたやうに、貴君の前に現はれたらごうです。別な考を起されるかもしれませぬ」

又考へてごらんさい、彼等は唯旅稼ぎの盗人です。何れも底なし地獄の王の手下だから、必要な場合には、王が親ら出て来て加勢しますが、その聲といつたら、まるで獅々の吼ゆるやうです(ペテロ前)。いつか私もあの薄信者同様な目にあつて、恐ろしい事だと思ひました。あの三人の惡漢に取り圍まれたので、私は基督者らしく抵抗し始めると、惡漢共が一聲擧げ

たと思ふと、もうそこへその首領が現はれてゐました。(諺にもある通り)一文錢で買へる生命とは私の身の上でしたが、神の聖意で、私は堅い甲冑を着けてゐました。そんな身に固めはしてゐても、尙ほ男らしく振舞ふことは中々困難でした。親しくその戦に臨んだ者でないで、その闘がこれほど難儀だか話しが出来ません」

有望。「さうですか、でも、大惠者といふ人がそこへ通りかゝつたと思つて逃げ出したのでせう」

基。「それは實際大惠者が現はれると、あの惡漢共もその首領も、皆逃げ出します。大惠者は王の勇士だから無理もないです。勿論薄信者と王の勇士との間の區別を認めなざるでせう。王の臣民は誰でも王の勇士ではありませんから、いざといふ時に、彼のやうに戦をして手柄を立てることは出来ません。ダビデのやうにゴリアテを取扱ふことが小さい子供に出来ると思ふのは無理でせう。鷄鶉には牛の力はない筈です。強い者もあるし、弱い者もある、信仰の大なる者もあるし、少ない者もある。その人は弱い者の一人だつたので、脆くも敗れたのです」

有望。「大惠者はその代りにゐたらごうでしたらう」

基。「彼の人であつても、手に餘ることがありません。大惠者は武術にかけては達人で、刀で拒ぐ間は、充分敵に當るに足りませんが、若し小膽者でも、懷疑者でも、その他の者でも、手の裡に入つて來たら最後、後を取つて、そのために打ち倒されるやうな事が出来るです。倒ふれるやうなことで、もうどうも出来ませんからな。」

「大惠者の顔を誰でも眺めた者は、その突傷や斬傷に目がつくので、私の言ふことを直ぐ成程と思ふでせう。私は一度あの人(勿論戦闘の最中だが)生命を保たん望みも失なへり(コント後)と言つたのを聞いたことがあります。又ダビデも斯る力強い悪者共のためには、呻めいたり、嘆いたり、唸つたりしたことがあります(下廿四〇十)。それからヘマン(列王四〇)やヒゼキア(列王紀下十八)もそれ／＼當時の勇士で、彼等に襲はれて奮ひ起つて戦つたが、しかも二人とも全くその甲冑を打ち碎かれたのです。かのペテロも時には思ひ切つたことをやる人で、使徒の首領と言はれたこともあるが、矢張彼等に左右されて、賤しい小娘をすら恐れただごもあつたでせう。」

「それに地獄の王はいつも彼等が口笛を吹けば聞える處に居つて、いつでも彼等が危なくなると、出来るだけ早くやつて來て彼等を助けるのです。その王に就ては、「劔をもてこれを撃つごも利かず、鎗も矢も漁叉も用ふる所なし、これは鐵器を見ること藁の如くし、銅を見ること朽木のごとくす、棒もこれには藁屑と見ゆ、鎗の閃めくをこれは笑ふ」(ヨブ四十一)と言はれてゐます。人は斯る者に對してどうすることが出来ませう。それはどうにかしてヨブの馬でも手に入れて、それに乗り廻すほどの熟練と勇氣があるなら、目醒しい事も出来ませう。その馬といふのは、「頸に勇しき鬘を粧ひ、その飛ぶこと蝗蟲のごとく、その嘶なく聲の響は恐るべし。谷をあがきて方に誇り、自ら進みて武者に向ふ。懼るゝことを笑ひて驚ろくところなく、劔に向ふとも退ぞかず、矢筒その上に鳴り、鎗と矛相閃めき、猛り狂ひつ地を一呑みにし、喇叭の聲鳴り渡るも立ち留ることなし。喇叭の鳴る毎にハハハと言ひ、遠方より戦ひをかぎつけ、將帥の大聲および呐喊の聲を聞き知る」(ヨブ廿九〇)といふですからな。

「しかし貴君や私のやうな徒歩の者にとりては、一人の敵に遇ふことも願はしくありませんし、又他人が後れを取つたと聽いても、俺ならば威張もしませんし、それに又いかに自分分で強さうな顔をしてゐる者は、大抵やつて見ると、から駄目です。前にも申しましたが、あのペテロをごらん下さい。威張くさつて、傲慢な心にまかせて高言を吐き、假令凡ての人が主を棄て、飽くまで主のために盡すと言ひながら、いざ惡黨に遇ふと、その敗けて遁

「ける状といつたら有りませんでした」
「だから、大君の往還でかういふ盗難があると聴くからには、二つの事を心かけておればな
んです」

「先づ第一に鎧を着て、忘れずに楯を取つて出かけることです。昔し人ありて蛇レビヤタン
と勇しく戦つて、これを降参させることが出来なかつたのは、全くその用意がなかつたから
です（七〇一）（イザヤ廿） 實際その用意がなければ、私共は妙しも畏がられない筈です。だから、戦に
慣れた者は、「このほか信仰の楯を取るべし。この楯をもて悉く悪しき者の火箭を消すことを
得ん」（エペソ六）と言つたのです。」

「第二には又、私共は王の保護を願つて、私共と一緒に歩いていくことです。ダビデが
死の蔭の谷を歩いた時に、尙ほ悦んだのはそのためです（詩廿）。又モーセは神なしに一步も
行く能はず、寧ろその立てる場所に死なんとした位です（出埃及卅）。あゝ兄弟、神が私共と一
緒に行つて下されば、私共を圍みて立ちかまへた千萬の人をも怖れることはありません（詩
六）。しかし神なしには、いかに力自慢な援助者でも、殺されて倒れてしまふです。」
「私自身は、いづそや格闘したことがあります、かうして生存らへてをりますのは、全く

（いとも善なる神のお蔭で）自分の勇氣を誇ることは出来ません。もうあんな衝突をせずに済
めば、どんなに嬉しいでせう。でも、まだ私共は全く危難を越えたいはいはれますまい。併
し獅子にも熊にも喰はれずに今まで来たのですから、次の割禮なきベリシテ人からも神は私
共をお救け下さるだらうと思ひます。そこで基督者は歌つた。

「あはれ薄信の者よ、

盗人の内に汝はありしや、

盗まれしや、さらば心せよ。

信する人は信をませ、

三人はおろか千萬の、

人にも汝は勝つべきぞ」

十二

かうして二人は進んだ。無學者は隨つて来た。やがてとある場所へ来たが、一筋の路がそ
の路から分れてゐるのを見た。然もそれは今まで歩いて来た路のやうに真直らしい。何れも

眞直に見るので、二つの内どちらに進んでよいやら解らぬので、茲で二人は立ち留つて考へ込んだ。二人が路で考へてゐると、見よ、色の黒い人がいと軽い衣裳を着て、側へやつて来て、どうしてそこに立つてゐるのですかと問ねた。二人はそれに答へて、自分等は天の都へ行くものですが、ごちらの路を取つてよいか解らないですと言つた。するとその人は「私についてお出でなさい。私もそちらへ行く者ですから」と言つた。そこで二人はその後について行くと、その路は次第に曲つてしまつて、二人はその志すところの都から遠ざかつて、僅かの間に全くその方角から顔を背向けてしまつた。けれども二人は尙も随つて行つた。それから次第々々に、二人が氣のつかない前、網の張つてある中に連れ込まれたので、忽ちそれに絡まつてどうすることも出来なくなつた。すると同時に白い衣は黒い人の背から脱け落ちた。そこで二人は初めてその居る處を悟つた。身を遁れることが出来ないで、暫らくそこにとつて泣いてゐた。

やがて基督者はその同伴に言つた。「どんな事をしてしまつた。牧羊者達が諛らふ者を慎しめと言つたやありませんか。賢い人の言葉にも、『その隣人に諛らふ者は彼の脚下に網を張る』(箴言廿)とありますが、今日こそそれを悟りました」

有望。「それに私共は道中の案内記を貰つてゐるのですから、それを見れば確かでしたな。しかるについそれを讀むことを忘れたものですから、滅ぼす者の途を避けられなかつたのです。ダビデは私共よりも餘程賢いのですな。『人の行爲については、われ汝の口唇の言によりて、滅ぼす者の途を避けたり』(詩十七)と言つてゐます」

かう言つて二人は網の中で嘆いてゐた。遂に輝やける者が細い紐の鞭を手に持つて二人の方へやつて来るのを見た。彼は二人の居る處へ来て、何處から来たもので、そこで何にをしてゐますかと問ねた。二人は彼に向つて、私共はシオンをさして行く憐れな旅人ですが、白い衣を着た黒い人が来て、自分も亦そこへ行く者だから、隨つて来いと言はれたものですか、うか／＼と路の外へ誘ひ出されてしまひましたと言つた。そこで鞭を持つてゐる者は「それは追従者といつて、『光明の使に姿を變へた偽りの使徒』(コリント後)です」と言ひながら、網を引き裂いて、二人を出してくれた。そして又二人に向ひ、「私についてお出でなさい、元の路に戻してあげませう」と言つて、二人を案内して、追従者にさそひ出された處まで後戻りした。やがて彼は二人に向つて、「昨夜は何處へ宿りましたか」と問ねた。「歡樂山の牧羊者達の許に宿りました」と言ふ。「それではその牧羊者達から道中の案内記を貰ひませんでしたか」

か」と彼が問ねた。「はい、貰いました」と答ふ。「では、岐路に立つてゐる時に、その案内記を出して読みませんでしたか」と彼が言つた。「はい、読みませんでした」と答ふ。「何故です」と彼が問ねた。「忘れました」と言ふ。「牧羊者達は諛らふ者を慎しめよと言ひませんでしたか」と彼は更に問ねた。「はい、言はれましたが、あの立派な口を利く人がそれだとは想ひ設けませんでした」と答へた。

やがて私が夢の中で見てゐると、彼は二人に横になれと命じた。二人がさうすると、その歩むべき善き路を教へるのだと言つて、厳しく二人を懲しめた。懲しながらも、「凡てわが愛する者はわれこれを責しめ、これを懲す、この故に爾屬みて悔ひ改ためよ」(黙示三)と言つた。かう仕てから、二人を出立させて、牧羊者達から受けた他の指圖を善く守りなさいと言つた。そこで二人は厚くその親切に感謝して、靜かに正しい路を進みながら、かう歌つた。

「路を行く人、茲に来て、

旅人、迷ひし跡を見よ、

善き勸めをば忘れたる、

故に捕はる網の中、

よし救はるれ、されど見よ、

鞭のこらしめ受けたるを、

これを汝がため戒しめぞ」

それから暫らくすると、この往來の向ふから一人靜かに此方をさして來る人を遙に認めた。基督者は同伴に向つて、「あそこにシオンに背を向けて、此方をさして來る人がありますな」

有望。「さうですな、氣を付けませう、又諛らふ者かも知れませんか」

彼は次第々々に近づいて、遂に二人の側まで來た。それは無神者といふ者で、「何處へ行きます」と二人に問ねた。

基、「私共はシオンの山へ參る者です」

すると無神者は唯からくと笑つた。

基、「どうしてお笑ひになるのですか」

無神。「あまり莫迦げてゐますから。そんなに骨を折つて旅をしたつて、まあ疲ひれ儲けですからな」

基。「それでは、貴君、私共は受け入れられないと思ひなされるのですか」

無神。「受け入れられない處ぢやない。貴君が夢に見てゐるやうな場所は何處をさがしてもこの世には有りはしません」

基。「では、來世にあるのですな」

無神。「私が自分の國にゐた時に、貴君が今言はれたやうな事を聞いたことがありません。それを聞いて、行つて見る氣になつて、二十年もその都を探しましたが、出かけた日のやうに今でも見つかりませんや」(傳道十)

基。「私共もそれを聞いたのですが、確にさういふ場所があると信じてゐます」

無神。「私も故郷にゐる時にさう信じなければ、何にもはるく探しには出ません。(それに私は貴君方よりも遠くまで探しに行つたので、さういふ場所が見つかりさうなものだに、見つからないから、かうして戻つて來たのです。それを見たいと思つて何事も捨て、かゝりましたが、どうも仕方がないので、又その捨てた物を取つて安樂に暮らしたいと思つてゐます」

そこで基督者は同伴なる有望者に言つた。「この人の言ふことは眞實でせうか」

有望。「御用心、これも諷らふ者の一人ですぞ。前にもかういふ奴等の言ふことを聞いて、どんな目に遇つたと思召す。それにしても、シオン mountain の山がないですぞ? 歡樂山から都の門

を見たちやありませんか。それに又私共は今信仰に依つて歩いてゐるではないですか(コリン七)。さあ、参りませう。あの鞭を持つる者に又追ひつかれないとも限りません。貴君こそ私を教へて下さるべきなのに、私から論されるとは何事です。「わが子よ、哲言を離れしむる教を聞くことを止めよ」(箴言十九)です。さあ、兄弟、そんな者に聞くことを止めなさい。私共は靈魂の救ひを信じませう」

基。「兄弟、私が貴君に問ひかけたのは、私共の信する眞理を疑がつたからではありません。試みに貴君の心に結んだ正直の果實を引き出して見たいと思つたのです。この人のことは、私も承知してゐます。これはこの世の神を拜んで盲目になつた人です。さあ、参りませう、お互ひに眞理を信じるのですからな。虚偽は眞理からは出ません」(二〇廿一書)や」

有望。「それでこそ神の榮光を望んで悦べるといふものです」

かう言つて、二人はこの人から離れて行つた。この人は笑ひながら立ち去つた。

やがて私か夢の中で見てゐると、二人は進んで、或る土地に入つたが、そこは空氣のかげんで、何にも知らずにそこへ入つて行つた者にはおのづから眠氣を催ふさしめる所であつた。そのため有望者は氣が至つて倦怠くなつて、いかにも眠くなつた。そこで基督者に言つた。

「私はどうも眠くつて、眼を開けてゐることが出来なくなりました。茲へ休んで、一睡しやうちやありませんか」

「それは可けません」と基督者が言った。「眠つたら、もう決して起きられませんから」

有望。「何故です、兄弟、睡眠ほど働らき疲れた者に心地善いことはないでせう。一睡した

ら、それは爽快しますせ」

基。「そら、牧羊者達の一人が迷ひの地を慎しめよと言つたではありませんか。その意味は

睡ることを慎しめと言ふのです。『さらば我等他の人の睡るがごとく、睡ることをせず、醒め

て慎しむべし』(テサロニケ)です」

有望。「やあ、私が過失りました。私一人だつたら、睡つてしまつて危なく死ぬところでした。二人は一人に優る」(傳道四)といふ賢い人の言葉は誠ですな。かうして貴君と道連れなのは私の仕合せですが、貴君もその骨折を必らず善く報はれますよ」

「では」と基督者が言つた。「此處で眠氣さましに、一つ善い談話でもやりませうかな」

「それは何によりです」と有望者が言つた。

基。「何にから始めませう」

「神が始めしめたまふまゝにね。どうぞお先へ」

基。「では、最初歌を一つうたひましてから」

聖き人々、睡き時、

茲に來りて旅しゆく

二人が共に話したる

ことをば聞いて學べかし。

けだるく睡き眼をさまし、

危うき地をば免かるゝ、

仕方はこれよ、いと聖く、

友の交はり保つこと。

やがて基督者はかう言つて談話を始めた。「一つお問ねしませう。貴君は最初どういふ考へから、かういふ境遇になりましたか」

有望。「それでは何んですか、私が最初どうして自分の靈魂の幸福を求めらうになつたかといふのですか」

基。「さうです、さういふ意味です」

有望。「私は永いこと私共の市場の見せものや、賣りものを楽しく思つてゐたのですが、今ではそんな物をもつと永く楽しみにしてゐたら、必らず身を滅亡に沈めたらうと信じてゐます」

基。「その物といふのはどんな類ひですか」

有望。「この世の有らゆる財寶と富です。それから又暴行、暴食、暴飲、暴言、虚はること、不潔なること、安息日を破ることその他靈魂を滅すやうな傾きのある事は何んでも好きでした。然るに遂に、貴君のことや、又あの虚榮の市場で信仰と善き行のためにお死になされた懐しい信仰者のことを聽いて、聖い事を聽いたり考へたりした爲めに、『これらの事の果ては死なり』(ローマ六)、又『これらの事のために神の怒は背逆者に至る』ことを悟りました」

基。「では、直ちにその確信の力の下に身を投げなすつたのですか」

有望。「いや、私は直ちに罪の悪いことや、それを行ふことに伴ふ刑罰などを知らうとは思ひませんでした。それどころか私の心が聖言に感動し出したので、努めてその光に對して眼を閉らうとしました」

基。「しかし、神の祝福の靈が始めて貴君に働くに至つたのを、どういふわけでそんな扱ひをなすつたのですか」

有望。「その理由は種々あります、第一、私はそれが神の働きといふことを知りませんでした。神は先づ罪を知らせることに依つて、罪人を悔改めしめたまふとは想ひませんでした。第二に、罪はまだ私の肉體に甚だ快いので、それを捨てかねたのです。第三に、とても昔し馴染の友達と離れたくなく、共に居つて、共に樂しみたかつたのです。第四に、初めて罪を悟つた時には、堪へがたいほど惱ましく心苦しくつて、それを心に思ひ出すことさへいと堪へがたかつたのです」

基。「時には、その悩みを免かれたやうな事もあつたでせう」

有望。「えい、ありました、それでも又心に浮んで來ましてな。すると前よりも更に／＼悪くなりました」

基。「一體何にがそんなに罪を再び心に思ひ浮ばせますのですか」

有望。「それにも種々あります、第一、途中で善人に遇ひましたりすると。第二、誰か聖書を讀むのを聽きますと。第三、頭が痛くなり出しますと。第四、誰か隣の人でも病氣なこと

を聴きますと。第五、死んだ者のために鐘が鳴るのを聴きますと。第六、自分の死すること
を想ひますと。第七、他人が頓死したことを聴きますと。第八、殊に自分が間もなく審判に
曳ねばならぬことを想ひますと」

基。「何れかさういふ場合が起つた時に、貴君は何時でも安らかに罪の咎めから免かれるこ
とが出来ましたか」

有望。「いや、とても出来ません。私の良心は益々そのために堅く捕へられましたから。そ
れならまた罪に戻つて行けるかといふに、(わが心は勿論罪に向つてはゐないです) それは私
にとりて二倍の苦痛でした」

基。「それからどうなすつた？」

有望。「どうしても私は生活を改めるやうに努めねばならぬと考へました。さもなければ、
確に罰せられると想ひました」

基。「それで改ためるやうに努めましたか」

有望。「努めました。自分の罪ばかりか、罪深い友達からも通れて、祈つたり、讀んだり、
罪に泣いたり、隣人に眞理を語つたり、種々な宗教の義務に耽りました。その他種々やりま

したが、茲には一々申しかねます」

基。「その時は心持が宜しうございましたか」

有望。「えい、暫らくは。それでも遂に私は再び惱みに襲はれました。私が心を革ためたの
で、尙ほ烈しくなりました」

基。「どうして又それが、心を革ためてから来たのでせう」

有望。「それが来るといふには種々な譯があるです。殊に『我等の義はことごとく汚れたる
衣のごとし』(イザヤ六)とか、『律法の行爲によりて義とせらるゝ者なし』(ガラテヤ)とか、『汝等
命せられし事を皆な行したる時も、我等は無益の僕なりと云へ』とかいふやうな言葉を讀ん
だからです。それらの事から私は自分でかやうに道理をつけました。若し私の義が凡て汚れ
た衣のやうならば、又律法の行爲によつては、誰も義しとせられないならば、又凡ての事を
行つても、尙ほ私共が無益の僕であるならば、天に行くために律法を守るのは愚かな次第で
あること。又考ふるに、若しある人が商人から百磅借りたとして、その後は一々現金で拂つ
たとしても、その古い借金が帳消しにならない内は、商人はこれを訴へて、支拂うまで牢屋
に入れることが出来る次第であることなぞです」

基。「成程、そこで貴君の身にそれをどういふやうに適用めたのですか」

有望。「さやうです。私は自分のことをかう想ひました。私は罪のために神の帳面に莫大な額を記入されてをるのだが、現在私が心を革ためたからといつて、到底その負債を拂ひ切れない。だから私は現にどんなに改心しても矢張減ふべきものである。これまでの罪過で永罰を招いたのだから、それからどうして身を免かれることが出来ませうと」

基。「それはいかにも尤もな御着眼です。それからどうです」

有望。「その他、私が悔改めて以來、心を惱ましたことは、私の行つた最も善い事でも至細に眺めて見ると、その裡に矢張罪があることが解つたことです。新しい罪が私の最も善い行の裡に混つてゐたのです。それ故今ではこれまで好んで自分の善くなつたことや、義務をつくすことを自慢したにかゝはらず、假りにこれまでは過失のない生活を送つたとしても、一日の中に行ふ罪だけでも地獄に送られるに充分であると思はなければならぬ様になりました」

基。「それからどう爲さいましたか」

有望。「爲す所ぢやありません。信仰者に心を打明けるまではどうすることも出来ませんでした、あの方と私とは親しい間柄でしたので、あの方の話によると、決して罪を犯したこと

のない人の義を受くるのでなければ、自からの義や、あらゆる世の中の義を受けても、自分を救ふことは出来ないとのことでした」

基。「その言ふ所は眞實だと思ひなすつたか」

有望。「私が自分の悔改めを嬉し悦んでゐる時に、そんな事を言はれたら、そんな心配をするあの方を莫迦者と呼んだでせう。所で私は自分の弱點を知り、最も善き行にも罪がつきまどふことを知りましたので、どうしてもあの方の意見に従はねばなりませんでした」

基。「最初信仰者がその事を言ひ出した時に、貴君は決して罪を犯したことがないと當然言ふことの出来るやうな人があると思ひましたか」

有望。「正直な所、初めその言葉は怪しく響きましたが、暫らくあの方と話したり一緒にゐたりする内に、充分それを信するやうになりました」

基。「その人はどういふ方で、どうしてその人に依つて義とせられねばならぬか(四章)お問ねでしたか」

有望。「えい、あの方の話によると、それはいと高き者の右に坐したまふ主耶穌ださうです。又私が主耶穌に依つて義とせらるゝには、彼が世に在りし時に親しくなしたまひしことや、

十字架に懸つて苦しみたまひしことを信せねばならぬと申されました。その時私はその人の義がどうして神の前に他の人を義とする功德があるのですかと問ねますと、あの方の答へでは、主は大能の神で、その爲すべき所をなして、御自分のためでなく、私のためにその死を遂げなすつたさうです。で、私が彼を信じますならば、その爲されし事も、その行爲の價値も私の身に歸するとのことでした」

基。「それから貴君はさう爲すつたか？」

有望。「私の信する所に異議がありません。それは主が私を悦んで救ひたまふことではないと思ひましたので」

基。「その時信仰者はなんと言ひましたか？」

有望。「あの方は主の許に行きて見よと言はれました。で、私はそれは推測でせうと言ふと、いや、さうではない、私は既に招かれてをる(マタイ十)のことでした。それからあの方は私を勵まして一層自由に主の許に來らしめるやうに、主耶穌が口授された書物を下さいました。その書物といふものは、天地は廢ることも(マタイ五) その一點一畫も壞るゝことはないさうです。そこで私は自分が御許に參つた時にはどうせねばなりませんかと問ねました。するとあ

の方が申されるには、先づ跪つて、(詩五十六) 心を盡し精神を盡して、私に主を現はしたまへと天の父に懇願せねばならぬとのことでした。そこで私は進んで、どういふ風に主に懇願したものでせうと問ねますと、行け、然らば恩寵の座に主を見出すべし(ヘブライ) 主は年中そこに坐つて、來る者の罪を赦したまふとのことでした。で、私はそこへ參つても言ふべきことを存じませんと言ひますと、かういふ様に言へとのことでした。「神よ罪人なる私を憐れみたまへ。私をして耶穌基督を知り、これを信せしめたまへ。彼の義がありませんならば、或は私とその義を信じませんならば、私は全く投げ棄てられる者であります。主よ、私は爾が恵深き神にて在し、御子耶穌基督を世の救主と定めたまひしことを聴きました。そればかりか、爾は私のやうな憐れな罪人にも悦んでその救主を與へたまふさうであります。私は實に罪人であります。主よ、さらばこの機を失はず、恩寵を大きく擴げてわが靈魂を救ひたまへ、御子耶穌基督を通して、アーメン」といふやうに」

基。「そして貴君は言はれた通りになさいましたか？」

有望。「はい、幾度も幾度も」

基。「それで天の父は貴君に御子を現はしなすつたか？」

有望、「いえ、初めにも、二度目にも、三度目にも、四度目にも、五度目にも、六度目にも
現はして下さらなかつたです」

基、「それからどうなすつた？」

有望、「どうするつて。どうしやうもなかつたです」

基、「祈ることを止めやうとは思ひませんでしたか」

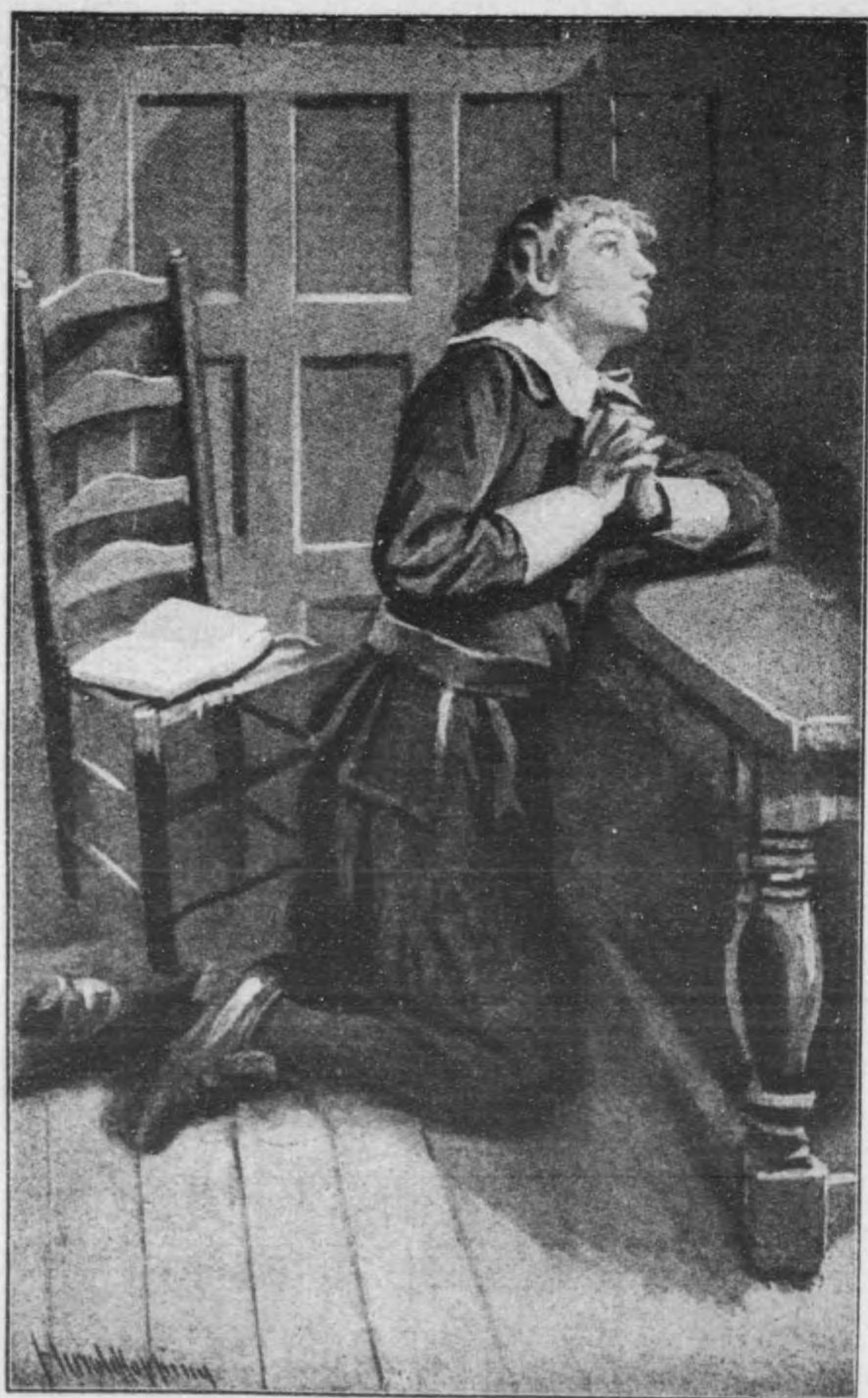
有望、「えい、幾百回となく」

基、「それでも全く止めなさないのはどういふ理ですか」

有望、「話しに聞いた、この基督の義がなければ、全世界も私を救ふことは出来ないといふ
ことを眞實だと信じてゐたからでせう。それ故私は今祈りを止めたら死ぬに極つてゐる。ど
うせ死ぬなら恩寵の座で死にたいと思ひました。それと同時に心に浮んだのは、「若し遅から
ば待つべし。必らず臨むべし、滞りはせじ」(書二〇三)といふことです。そこで天の父が御
子を示して下さるまで、祈りつゞけることにしました」

基、「どういふやうに主が現はれましたか」

有望、「肉眼では見ませんでした、悟道の眼で主を見ました。その次第を申すと、或る日



有望者の悔改

私は非常に悲しくつて、一生にこれほど悲しいことはないと思ひました。その悲しみは自分の大いなる穢れた罪が鮮かに見えるからでありました。地獄のほか何んにも見えないで、唯わが靈魂の永遠に罰せられることばかり想つてゐると、突然主耶穌が天から私を見下したまふのを見ました。そして「主耶穌基督を信せよ、さらば汝救はるべし」(使徒行十六)といふ聲を聴きました。

「しかし私は、それに答へて、『主よ、私は大ひなる、いと大いなる罪人であります』といふと、『わが恩寵汝に足れり』(コリント後)と主は答へられました。そこで私は『されど主よ、信するとはどういふことですか』と言ふと、『我に來る者は餓えず、我を信する者は決して渴くことなし』(ヨハネ六)といふ聲から、信すると來るとは同じことだ。來る者は即ち心を盡し情を盡して基督に救はれんと走る者だから、實際基督を信するのであると解つたので、眼はおのづと涙ぐんで、尙も、『しかし、主よ、私のやうな斯る大いなる罪人も實際爾に受け容れられて救つて下さるのですか』と問ねると、『我に來る者はわれ決してこれを棄てじ』(ヨハネ七)と言はれるのを聴きました。そこで私は、『しかし主よ、爾の御許に來りて、私の信仰を正しく爾の上に置くためには、どういふやうに爾を考へねばなりませんか』と言ふと、『基督耶穌

は罪人を救はんために世に來れり(テモテ前) 彼は凡て信する者の義とせられんために、律法の終りとなれり(ロマ十) 彼は我等の罪の爲に殺され、また我等の義とせられんために甦へらされたり(ロマ四) 彼は我等を愛し、その血を以つて我等の罪を洗ひ潔めたり(黙示二) 彼は神と人との間に立てる中保者なり(テモテ前) 彼は我等のために懇求さんとして恒に生くるなり(ヘライ七) と言はれました。これらの事からして、私は主の人格の裡にある義を眺むべきこと、又主の血によりて十分にわが罪を洗ひ潔めらるべきこと、又主が天父の律法に服つて、刑罰に身を渡されたのは、御自身のためではなくつて、その救ひを受けて感謝する者のためであることを悟りました。それからいふものは私の心は喜悅に滿ち、私の眼は涙に滿ち、私の情は耶穌基督の御名とその民とその路とに憧れるやうになりました。

基。「それこそ貴君の靈魂に基督が現はれたまうたのです。それがために貴君の靈がどんな風になつたか、詳しくお話し下さい」

有望。「それに依つて私はこの世の中は凡てその義しきに係はらず、罪を定められる状態にあることを悟りました。又天の父は自から義しくおなされたまふのだが、罪人の來るを悦び、これを正しくも義しき者とせられることを悟りました。又それに依つてこれまでの生活の卑しき

ことが大いに恥かしくなりました。又自分の無知なることを感じて當惑しました。耶穌基督がそれほど美はしく見えることがあらうとはそれまで想もありませんでした。又そのために聖い生活が好きになつて、主耶穌の名譽と榮光のためならいかなる事をも爲したいと願うに至りました。私の身體に千斛の血があるとしても、今やそれを主耶穌のために濺ぎ盡したいと思ひました」

十三

やがて私が夢の中で見てゐるこ、有望者は後を振向いて、先程後に残した無學者がついて來るのを眺めた。で、彼は基督者に向つて、「あれ、あそこに先刻の若者がぶらぶらとやつて來ますよ」

基。「えい、成程來ますな。しかし私共と連れ立たうとも思はぬやうですな」

有望。「でも、今まで私共と一緒に歩いたら、悪くはなかつたでせうに」

基。「それは實際です。しかし彼はさう想つてゐないでせうよ」

有望。「それはさうでせう。しかし待つてゐてやりませう」

二人は待つてゐた。やがて基督者は若者に向つて、「やあ、早くお出でなさい。どうしてさう送巡してゐるのですか」

無學。「獨り歩きが好きですから。好い連がない以上はこの方が善いです」

そこで基督者は有望者に向つて、「ひそく〜」と云うです。私が言つた通り、彼は私共と一緒に歩くのがいやなんです。しかし兎に角「言葉を次いで「お出でなさい。茲は寂しい所だから、暫らく話しながら行きませう」。やがて無學者に話をむけて、「どうです、その後はお變りありませんか。神と貴君の靈魂との間柄は今どんなです」

無學。「まあ、善いですな。私はいつも善い心持に胸が一杯なので、途を歩きながらも心が愉快です」

基。「どんな善い心持ちですか。お話し下さい」

無學。「神と天のことを想ふからです」

基。「想ふだけなら悪魔も永罰を受けた人もいたします」

無學。「ですが、私はそれを想ひ、又それを慕ふのです」

基。「來ることを好まぬ者でもそれだけのことはします。怠たる者は心に慕へども、得るこ

となし』(箴言十) 三〇四) です」

無學。「ですが、私はこれを知つて、そのために一切を捨てました」

基。「それは疑がはしい。一切を捨てるといふのは六ヶ敷いことです。さやう、想つたよりも六ヶ敷いことです。それは兎に角さういふ譯で、又さうして貴君が神と天のために一切を捨てるやうになつたのですか」

無學。「私の心がさうしろと申しますので」

基。「賢い人は「おのが心を頼る者は愚人なり」と言つてゐますせ」

無學。「それは悪い心と言つたのです。私のは善い心で」

基。「さうしてさう言へますか」

無學。「天のことを望ませて私を楽しめますからです」

基。「それは心の偽りによるかも知れないでせう。人の心といふものは未だ望みをおく土臺もないことを望ませて、人を楽しませるですからな」

無學。「しかし私の心と生活とは善く一致してゐますから、私の希望には確かな土臺があるのです」

基。「貴君の心と生活とが善く一致するとは誰が言ひましたか」

無學。「私の心がさう言ひました」

基。「それも貴君の心が言ふのですか。自分が盗賊でも、自分には解らないから、友達に聴いて見ろといひますせ。さういふことは神の言葉のほかに證據はないです。他の證據は何んの役にも立ちません」

無學。「でも、善い思想を持つのは善い心ぢやないですか。それから神の訓戒を守るのは善い生活でせう」

基。「さやう、善い思想を持つのは善い心で、神の訓戒を守るのは、善い生活ですが、それも實際行ふのと、唯それを考へるのは、全く別な事ですからな」

無學。「貴君はどういふことを善い思想、又神の訓戒を守る生活と思ひなされるのですか」

基。「善い思想にも種々あります。私共自身のこと、神のこと、基督のこと、その他種々のことがありませう」

無學。「私共自身に關する善い思想とはどんなことですか」

基。「神の言葉に適ふやうなことです」

無學。「どういふ時に私共自身のことに関する思想が神の言葉に適ひますか」

基。「私共自身に關する判断が神の言葉で判断する所と變らない時にです。これを説明しますと、神の言葉に生れつきのまゝなる人に對して、『世に義人なし、善をなす者なし』(ロマ三〇十四)といふてありませう。それから『人の心の思念の凡て圖るところは恒に唯惡しきこと

なり』(創世六)とあります。それから『人の心の圖るところは、その幼なき時より惡し』とあります。さて自分のことを考へて、成程その通りだと思へるなら、私共の思想は神の言葉に

合ふたので、善いものといへるのです」

無學。「私の心はそれほど悪いものは、信じられません」

基。「それだからして、貴君は生まれてこの方自分のことについて、一度も善い思想を持たないのです。それは兎に角、神の言葉は私共の心を判断するやうに、私共の行爲をも判断します。私共の心と行爲とに對する思想が、神の言葉で判断する所に一致すれば、その一致する故に兩つとも善いのです」

無學。「といふ譯は」

基。「神の言葉に人の道は曲つた道なので、善くない、戻れるものである(詩百廿五〇五)とか、人

は生れながらにして善き道をしらず、これを離れたりとか、言ふてありますが、さて人が自分の行爲を考へて、謙遜な心を以つて、成程その通りだと言ふなら、それこそ自分の行爲に對して善い思想を持つてをるのです。なせなればその思想は神の言葉の判断と一致しますか
らな

無學。「神に關する善き思想とはどういふことですか」

基。「それも私共自身に關するものと同じやうに、神に對する私共の思想が神の言葉に言ふてある所と一致することです。即ち神の在すことやその性質について、神の言葉に教へてある通りに私共が考ふることです。さういふことは今茲に言ひ盡すことは出来ませんが、唯神と私共の關係について申せば、神は私共が自ら知るよりも一層善く私共を知り又私共が自ら罪なしと思ふ時に又場合に神は私共の罪を知りたまふと考へたり、神は私共の最も深き思想を知り、又私共の心はその奥深き底までも、常に神の眼の前に開け放されてゐると考へたり、又凡て私共の義は神の鼻に着くので、私共がどんな善いことを仕ても、それを依頼にして神の前に立たうとしても、神はそれを見るに堪へたまはぬといふやうなことを考へたりするのは、これ私共が神に對して善き思想を持つからです」

無學。「私だつてそれほど馬鹿ではないから、神が私よりも遙に能く見たまふことや、どんな善いことをしても、それで神に近づくことが出来ぬ位のことば考へてゐます」

基。「それなら、どうしやうと思ひますか」

無學。「手短にいへば、義とせられるためには、基督を信せねばならぬと思ひます」

基。「それは又どうしていす。貴君は基督の必要なことを認めもせず、これを信せねばならぬと思ふのですか。それから貴君は生れつきの缺點も、又現在の缺點も認めてゐないでせう。それから又貴君の言ふことゝ爲さる所を見ると、まるで基督御自身の義によらずとも、神の前に自分を義しうすることが出来るといふ人のやうですな。それでも貴君は基督を信すると言ひますか」

無學。「私は充分に能くそれを信じます」

基。「どういふやうに信じますか」

無學。「私は基督が罪人のために死にたまひしことを信じます。私はその律法を守りますと、主の恩寵を受けますから、それに依つて咒咀を赦されて神の前に義とせらるゝのであります。即ち基督はその功徳に依つて、天父の御旨にかなふやうに、私に宗教の務をして下されたの

で、そのために私は義とせられるのです」

基、「貴君のその信仰の告白に對して、私に答へさせて下さい。」

第一、貴君の信する處は空想の信仰です。そんな信仰は神の言葉の何處にも記されてゐません。

第二、貴君の信する所は偽りの信仰です。何故なれば基督御自身の義によりて潔いものとせらるゝことを探りて、自分の義にそれを適用めるからです。

第三、さういふ信仰では、基督は貴君の人格を義とするのでなくつて、貴君の行爲を義とせられるのです。貴君の行爲のために貴君の人格が義とせられるといふのは偽りです。

第四、それ故さういふ信仰は欺偽的のもので、審判の日に貴君は神の怒を免れることは出来ません。真正に義とせらるゝ信仰は、人の靈魂が律法に依つて失はれたる境遇にあることを感じて、基督の義に避難所を求めることなのです。(その基督の義といふものは、人の行爲が神の御旨に適つたので、義としてやらうといふ恩寵の働きではなくつて、基督御自身が律法に従ひなされて、私共の身代りになつて、私共の爲すべき筈のことをなし、又受くべき筈の苦しみを受けなされたのです)。この義こそ、真正の信仰の承認する所ですから、その

裾の下に、人の靈魂は蔽はれて、初めて神の前に汚れなきものとして現はれることが出来るのです。赦されて刑罰から脱かれるとの出来るのはさういふ次第です」

無學、「何んですと。基督御自身は別に私共のために爲された譯でないでせうに、それに頼らうとなさるのですか。そんな己惚から、私共の煩惱の手綱は弛んで、勝手氣儘な生活をするやうになるのです。信じさへすれば、基督御自身の義に依つて全く赦されるとすれば、どんな生活をしても願はないことになるでせう？」

基、「無學といふのは貴君の名前ですが、成程貴君は名前のやうな方ですな。私の言つたことに對する貴君の答を見ても解ります。貴君は罪を赦す義とはどんなものか知らないです。又その信仰に依つて神の重い怒を免かれて、貴君の靈魂を安全にすることも知らないです。それから又貴君は基督のこの義を信することの真正の功驗を知らないです。それは基督に在る神に全く心を傾け盡して、その御名とその言葉とその道とその民とを愛することであつて、貴君のやうな何も知らぬものが想像するやうなことではないです」

有望、「基督がいつかこの人に現はれたことがあるかどうか尋ねてごらん下さい」

無學、「何んです、神が人に現はれるですと。貴君方でも誰でも、そんな事を言はれるのは、

頭の狂つてゐる結果だと信じますな」

有望。「驚きますな。基督は神の裡に隠れてゐますので、普通のことでは肉の眼には留らないです。誰でも基督を充分に知らうとすれば、父なる神が基督を現はして下さるのを待たねばならんです」

無學。「それは貴君の信仰でせうが、私の信仰ではありません。私の信仰も勿論貴君方の信仰のやうに善いものではあるが、唯私の頭には貴君方のやうに澤山な妄想がないだけです」

基。「私に一言させて下さい、この事はさう軽く言ふてはいけません。(私の同伴も言はれたやうに) いかなる人でも、天父の示現がなければ耶穌基督を知ること能はざることを私は斷言して憚りませぬ。いやそればかりか、靈魂を確と基督に委ねる信仰も、(それが正しければ) 矢張それは神の大なる力が働いたからです。その信仰の働きのについても、氣の毒にも無學なる貴君は知らないのです。だから、目を醒して、自分の淺ましい事を悟つて、耶穌基督の許に飛んで行きなさい。基督の義は即ち神の義ですから (基督御自身が神なので、それに依つて貴君は刑罰から救はれるのです) 無學。「貴君方はあまり足が早いので、私は一緒に歩けません。どうぞお先きへお出で下さ

い。私は暫らく後に留まります」

そこで二人は歌つた。

「無學の者よ、十度まで、

善き勧めをば輕んせよ。

汝は愚かといふべけれ。

汝はそれをば拒むとも、

久しき前にかくなせる、

その惡しきをば悟らなん。

人よ早くも、思ひ出で、

身を屈するも、怖るゝな。

善き勧めをば守れかし、

なをもこれをば輕んせば、

滅ぶる者とならんこと、

鏡にかけて見るごとし」

やがて基督者は同伴に向つて憊う言つた。

基、「さて、有望者さん、貴君と私は又二人で歩かなければなりません」

私が夢の中で見てゐると、二人は先へ急いで行つた。無學者は後からぶらぶらとやつて來

る。基督者は同伴に向つて、「いかにも可哀想な男ですな。やがてこんでもない事になるに相

違ない」

有望、「あゝ、私共の町にさへ、こんな有様で居る者は澤山ですから。一家族全體、街全

體どころか、都詣での旅人にもありますから。私共の方にさへそれですから、あの人の生

れた所にはどれだけあるか解らんでせう」

基、「主彼等の見ざらんがために、その目を盲くせり云云(二〇四十一) といふ言葉は實際です

な。さてこれから二人切りで話させよう。貴君はかういふ人達についてどう思ひますか。貴

君のお考へでは、かういふ人達が罪を悟り、又それに依つてその状態が危ういことを怖れる

時機があると思ひますか」

有望、「いや、お先きにその答を聽せて下さい。貴君の方が年上ですから」

基、「それなら申しますが、時にはさういふこともあると思ひます。彼等は生れながらの無

學で、罪を悟ることがつまりその益をなすことを知らないです。だから無暗にそれを打ち消
さうとしたり、憚るところもなく絶えず自分の心の欲するまゝに我ごわが身に諂つてゐる
のです」

有望、「仰せの如く、私もさういふ恐怖はつまりあの人達の益をなすと信じます。又それに

依つて都詣での門出を正しくすべきでせう」

基、「その恐怖が正しいものなら、それに相違ありません。『神を畏るゝは智慧の始めなり』

(ヨブ廿八) といふ言葉もありますからな」

有望、「正しい恐怖については、どう御思ひですか」

基、「眞正の恐怖或ひは正しい恐怖といふものは、次の三つの事で知られます。

第一、その起源に依つて知られます。即ちその恐怖は罪を悟ることに依つて起るのです。

第二、その恐怖は人の靈魂を基督に追やりて、これに堅く把握つて救を求めさすのです。

第三、その恐怖は神とその言葉とその路とを大に尊敬する念を人の心に生じて、これを繼

續せしめます。人の心はそのために柔しくなつて、その路を離れて、右や左に向つて、神の

御名を汚したり、その平和を破つたり、聖靈を悲しませたり、或は敵の悪口を言つたりする

ことを恐れ慎しむやうになります」

有望「成程、仰やる所は眞理です。それはさうと私共はもう迷魂の地を越えましたらうか」

基「どうしていす？ この談話に飽きましたか」

有望「いや、さうぢやないですが、私共が今何處に居るのか知りたいものですから」

基「さやう、茲を越えるにはもう二哩とありませぬ。まあ、談話に返りませう。今言ふやうな譯ですのに、あの無學者はかやうに罪を悟ることを怖れるばかりで、それが身の益になることを知らないから、打ち消さうと努めるのです」

有望「どうしてこれを打ち消さうと努めますか」

基「第一、彼等はさういふ恐怖が（實は神の仕業であるのに）悪魔の仕業だと思ふので、自分等を直接滅びに導くものとしてこれを拒むのです。第二、彼等は又さういふ恐怖が自分等の信仰を損ふものと思ふのです。所で彼等は憐れむべきかな、その信仰を全く持つてゐないので、却つてその恐怖を拒むので心が頑なになるのです。第三、彼等は恐れる必要などないと早合點するものだから、恐れることがあつても、無遠慮に自分を頼んで何氣ない振をします。第四、その恐怖は自分達の憐れな古い己惚心を取り去られる傾きがあるので、

張さうでしたからな」

有らん限りの力を盡してこれに抗ふのです」

有望「それに就て尠しは私にも身に覺へがあります。自分のことを知らぬ前には、私も矢張さうでしたからな」

基「もうこれで、あの無學者のことは切りあげて、他の有益な問題を話させよう」

有望「それは何によりです。どうぞお始め下さい」

基「それなら、御存じですか。十年ばかり前に、貴君の地方に、一時者といつて、宗教に熱心な人がありましたのを」

有望「えい、知つてゐます。正直の町から二哩はなれた悖徳町の者で、復歸某の隣家に住んでゐました」

基「それです。復歸者とは同じ屋根の下に住つてゐました。そこであの男は一時餘程心が醒めてゐまして、自分の罪とその報ひをも認めてゐたやうでした」

有望「私もさう思ひました。（私の家はあの人の許から三哩とは離れてゐなかつたですが、折々私の許へ来ては、はらく涙を流してゐました。實際私も氣の毒に思ひまして、幾らか望みをかけてゐましたのですが、それでも、主よ、主よと叫ぶ者、悉く望みがあるわけでも

ありませんからな」

基。「一度彼は私共が今仕てゐるやうに、都詣でに行くつもりでしたが、不圖惜身某といふ者と知合になつてから、私とは全く遠ざかつてしまひました」

有望。「あの人のことを語る序に、あのやうな人達が突然後戻りする理由を尠しばかり研究しませう」

基。「それは大變有益ですな。先づおさきへ」

有望。「私の見る所では、それに四つの理由があると思ひます。

第一、さういふ人達の良心は醒めてゐても、意は未だ改たまつてゐないので。だから、罪を悟る力が次第に薄らぐに従つて、信仰を勵ます力も止むので、自然と元の通りになつてしまふのです。食傷した犬を見てゐると、苦しい間だけは、喰つた物を皆な吐き出して棄てませう。しかしそれは（若し犬に心があるなら、心に好いてさうするのでなくつて、唯胃が苦しいからです。だから病氣が癒つて、胃が樂になると、元より吐いた物に未練があるので、やがて身をめぐらして、皆な舐めてしまひます。『犬かへり來りて、その吐きたる物を喰ふ』（マテ後廿二）といふのは眞實のことですな。私が慫う申すのは、さういふ人達が天國のために熱

心なのは、唯地獄の呵責を感じて怖れるからなので、若しその地獄の感じと刑罰の恐れが寒めて冷たくなると、それと同時に天國と救拯とに憧れる心も冷たくなつてしまふからです。つまり、罪と怖とが消え去ると、天國とその幸福に憧れることも無くなるので、遂に舊の路に還るのですな。

第二の理由といふは、彼等が卑屈な恐怖に壓服されてゐることです。それは何にかといふに人を怖れることです。『人を恐るゝ者は罫に落ち入る』（箴言廿九）とある通りです。それだから地獄の焔が耳の側でぼつ／＼と燃えてゐる間は、天國のことに熱心のやうですが、やがてその恐怖が尠し薄らぐと、忽ち想ひ直しをします。即ち一切を捨てるといふやうな危険（それがどういふ譯か解らぬものだから）を胃かさぬ方が賢くあるまいか、いや尠なくとも避けられない無益な難儀に遇はぬやうにする方が賢いのだと思つて、又舊の俗人に歸るのです。

第三、宗教に伴なふ耻しめも、彼等の路の躓きとなるのです。彼等は高慢で生意氣なものですから、宗教もその眼には低く卑しく見えます。だから地獄と來るべき怒の感じを失なうと、又舊の路に歸つてしまふのです。

第四。罪有ること及び恐怖を深く考へることは、彼等の禁物です。自分の不幸でもその来ない内は、そのために慮んばかることを好まないです。假令初めの内だけは行末の不幸を見て、義しき人のやうにそれから遁れやうとするので、安全なこともありますが、今も言ひましたやうに、それは罪と恐怖の想ひを避けたいからで、一度その恐怖と神の怒に目醒めた心かなくなると、歡んでその心を頑くして、又嗜き好んで、ますます頑くなるやうな路に行つてしまふのです。

基。「いかにもさうです。つまるところ、その意と志とが改たまらないのが缺點です。恰度彼等は裁判官の前に立つ重罪人のやうですな。ふる／＼震へて、心から改心してゐるやうに見えるが、つまるところ絞首索を恐れてゐるので、聊かもその犯した罪を憎んでゐるのではないのです。それ故この人を赦して自由にして御らんない。矢張盜賊であり、悪者であるのです。しかし其の意が改まれば、決してそんな事はありません」

有望。「私は彼等が後戻するわけを申しましたから、貴君はどうぞその仕方を聽せて下さい」
 基。「悦んで申しませう。先づ第一に、彼等は出来るだけ神のこと、死のこと、來るべき審判のことを忘れて考へないやうにしますので。第二に、密室の祈りや、肉慾を制することや、

用心することや、罪を悲しむこと其他の私かなる勤行を次第にやらなくなるのです。第三に、活々した温情な基督者との交際を止めるやうになるのです。第四に、それから説教を聴くこと、聖書を讀むこと、聖い會衆に連なること其他の公けの勤行に冷淡になるのです。第五、それから信者の身の上について穴探しを始めて、しかも（見つけ出した他人の弱點を擧げて、自分が宗教を投げすてる口實に色をつけるやうな悪魔らしいことをやります。第六、それから肉肉的ならしない放蕩者などを慕つて、これと交はるやうになるのです。第七、それから肉に肉な猥褻な談話などやり出して、正直だと思はれてゐる人にさういふ話をする者でも見つけると嬉し歡んで彼の人だつてと言つて、尙ほ憚からずその例に倣うに至るのです。第八。その後は小さな罪は公然犯すやうになるのです。第九。やがて頑くなになつて、その本性を表はすのです。かうして再び災禍の灣に船卸しをやるのですから、奇すしき恩寵に救はれなければ、自分を欺むいて、永久に滅びてしまふのです」

十四

今や私が夢の中で見てゐると、この時旅人達は迷魂の地を通り過ぎて、ベウラ（配偶）の

地(イザヤ六)に入つた。その空気がいとも快く愉快であつた。路も真直にその中を通じてゐたので、二人は暫らくそこに憩んで楽しんでた。げに茲には絶えず諸鳥の歌ふ聲が聴えて、もろ／＼の花が日毎に地に咲き出づるのを見た。班鳩の聲もこの地に聴えた(○十二)この國には夜も晝も日が輝やいた。茲は死の蔭の谷から遠く離れて、巨人絶望者の手の届かぬ所であつた。此所から疑惑城などはとても見えなかつた。又茲から二人の指して行く都が鮮然と見えた。又茲で二人はその都の住民の幾人かに遇つた。この地は天國の境界なので、輝やける者共が絶えず往來してゐるのであつた。又この地で新婦と新郎の約束が新たにせらるゝのであつた。「新郎の新婦を悦ぶ如く、汝の神なんちを喜びたまふべし」(イザヤ六)とあるは此處である。茲に二人は穀物と酒とに乏しくなかつた。道中で求めた物は皆な此所に充分あるのであつた。茲で彼等は都の方から來る聲を聴いた。それは高い聲で、「汝らシオンの女に言へ。視よ、汝の救ひ來る。視よ、主の御手にその恩賜あり」(イザヤ六十)といふのであつた。又この人民は、「聖き民よ、主にあがなはれたる者」(イザヤ六十)などと互ひに呼ぶのであつた。

さて二人はこの地に歩み入ると、この國に憧がれながら、遠く離れた所に居つた時よりも、

その喜びは一層であつた。猶ほ次第に近づくこと、都の全景が益々ますます明らかになつて來た。眞珠と寶石で建てた都である。街道には黄金が鋪いてあつた。いかにも自然に出來上つてゐる。都の榮光が日の光にきら／＼と反射するのを見て、基督者は懐かしさに氣病みした。有望者も同じ煩らひに心をなやました。二人は暫らく路傍に横たはつて、苦しさに聲を放つて、「若しわが愛する者に逢はじ、われ愛によりて疾み煩らふと告げよ」(雅歌五)と叫んだ。

やがて少し元氣づいて、煩はしき想ひが稍堪へられるやうになつたので、二人はその路を進んで、尙ほ益々近づくこと、そこには果樹園があるし、葡萄園があるし、花園があつて、その入口は皆往來に向つて開け放してあつた。今しも二人が其處へやつて來ると、見よ、園丁が路に立つてゐた。旅人は園丁に向つて、「この立派な葡萄園と花園は何誰の所有ですか」と問ねた。

園丁は答へた。「これは大君の所有で、御自分の楽しみに又旅人の慰めになるやうに茲に培養なさるのです」

かう言つて、園丁は二人を葡萄園に案内して、美味い果實を馳走した。それから大君の楽しみにせられる遊歩場や小亭などを見せてくれた。そして二人は茲に足を留めて眠つた。

さて私が夢の中で見てゐると、この時二人はこれまで道中で仕なかつた程、寝ながら話をするのであつた。それを訝かしく想ふと、園丁はやがて私に向つて、「この事を不思議に思ふのですか。これはこの葡萄園の葡萄の味がいかにも美味いので、「睡れる者の口を動かさしめ」(雅歌七)るのです」

やがて私が見てゐると、二人は目を醒して、都をさして出かけませうと互ひに言つた。ところで前にも言つたやうに、この都は純金なので(黙示廿二)日の光がそれに映つていかにも華やかにきら／＼するので、日遮の道具でも用ひなければ、中々面を向けて見てゐられなかつた。私が見てゐると、二人はやがて進んで行くと、二個の人に出遇つたが、その衣は黄金のごとく輝やき、又その顔は光のごとく輝やいてゐた。

この人々は二人に向つて、何處から來ましたかと問ねたので、二人はそのことを話した。彼等は又何處へ宿つて、道中ではどんな困難や危険に遭ひ、又どんな慰安や愉快に遇つたかと問ねたので、そのことを話した。やがてその人々は言つた。「貴君方はこれからまだ二つの困難に出遇ひませう。それから都へ入れます」

そこで基督者とその同伴とはその人々に一緒に行つて下さるまいかと頼んだ。すると彼等はさうしませうと言つたが、「しかし貴君方は自分の信仰でそこに達せねばなりません」と附言した。そこで私が夢の中で見てゐると、彼等は連れ立つて、門の見える所まで一緒に行つた。

更に私が見てゐると、彼等とその門との間には、一つの河があつた。けれども渡るべき橋がない。そして河は甚だ深かつた。で、この河のあるのを見て、旅人達は大いに困却した。所が一緒に來た人々はおう言つた。「貴君方はこの河を渡らなければなりません。さもなければあの門へ行くことは出來ないです」

そこで旅人達は「あの門へは他に路がありませんか」と問ねた。彼等はそれに答へた。「無いでもありませんが、世の基の置かれて以來、その路を踏むことを許されたのは、たゞエノクとエリヤの二人だけです。その他の者は終りの喇叭の鳴る時まで、そこを通ることを許されません」

そこで旅人達、殊に基督者は落膽してしまつて、彼此と眺めて見たが、この河を通れることの出來る途はとも見つかかりさうでもなかつた。そこで二人は人々に向つて、「この河は何處も水が深いでせうか」と問ねた。すると彼等は「いやさうでもありませんが、兎に角この

場合貴君方に力を貸すことは出来ません」と言つて、尙ほ言葉をついで、「この河の深いも浅いも、つまり此所の大君に對する貴君方の信仰次第です」

そこで二人は身仕度をして、水に入つたが、直ぐに基督者は沈みさうになつたので、大聲を擧げて、善き友である有望者に向つて、「私は深い水に落ちました。浪が私の頭の上を越しました。主の波が私の上を走ります」(詩六十九〇七)と言つた。

有望者は言つた。「確然なさい、兄弟、川底に足が着きます。大丈夫です」

基督者は言つた。「あゝ、もう、死の悲しみに圍まれたので、私はとても乳と蜜の流れる地を見られません」(出埃及三〇八)。

時しも大いなる暗黒と恐怖が基督者の上に落ちかゝつたので、前を見ることも出来なかつた。その上非常に氣が遠くなつて、これまで道中で出遇つた種々元氣を興へられた經驗を思ひ出すことも出来ず、順序立つて話すことも出来なかつた。けれどもその口走る所によると、この河で死すべきこと、到底天國の門へ達することが出来ないことを心に怖れて痛く心配してゐるのがありくと知れるのであつた。側に立つてゐる人々が認めたやうに、彼は旅に出てからと、その前に、自分が犯した罪を想ひ出して惱みに惱むのであつた。又その仕切なしに

喋舌ちらす言葉に依つて察すると、化物や惡靈が現はれて彼を惱ますのであつた。

それ故有望者は非常に苦心して兄弟の頭を水に沈まぬやうに支へてゐた。それでも幾度も全く沈んでしまつて、暫らくして浮き上つたが、もう半ば死んでゐるやうであつた。有望者は心を盡して彼を撫はつて慰言つた。「兄弟、門が見えますぞ。多勢の側に立つて私共を出迎へてゐますぞ。けれども基督者は答へた。「貴君を、貴君を出迎へてゐるのです。貴君の望み有ることは前から解つてゐます。貴君も同然ですぞ」と有望者が基督者に言つた。「あゝ、兄弟」と基督者は言葉をついで、「私が義しかつたら、確然主は今起つて、助けて下さるでせうが、私の罪のためにこんな係蹄に陥られて、見棄てなされるのです。そこで有望者は言つた。「兄弟、貴君は惡人に對して言はれた聖語を全く忘れなすたか。彼等は死ぬるに苦しみなく、その力は却つて堅し。彼等は人のごとく憂にをらず、人のごとく患難に遇ふことなし」(詩七十三〇四一五)とありませう。だから此の水の中で貴君の苦しみ惱みなされるのは、神から棄てられた徴候ではありませんで、貴君がこれまで受けなすつた御恵みを心に思ひ出しなされるか、又惱みの中にも主にありて生きなされるかどうか、試みるために送られたのですぞ」

で、「確然なさい。耶穌基督は貴君を安全にしたまひますぞ」
 すると基督者は忽ち大聲をあげて、「おう、再び主が見えた。汝水の中を過ぐる時、われ共に居らん。河の中を過ぐる時、水汝の上に溢ふれじ」(イザヤ四)と主は私に言はれた
 そこで二人は勇氣を出したので、それからは水の敵も彼等が渡つてしまふまで、石の如く静かになつた。で、基督者は直ちに足の立ち場を見出した。やがて河も次第に淺くなつた。かくして二人は河を渡つた。

河の向ふ岸には、兩個の輝やける人が現はれて、彼等を出迎へてゐた。彼等が河から上ると、挨拶して憊う言つた。「私共は案内の天使でございまして、救ひの世嗣となられる方々を案内するために遣はされました。かうして二人は門の方へ案内された。

茲に注意すべきは、都が大なる岡の上に立つてゐることである。けれども旅人達は兩個の人の腕に扶けられてゐるので、安々とその岡へ登つた。又その朽つべき衣は河の中へ脱ぎ棄てた。河へ入る時は着てゐたが、出る時には着てゐなかつた。それ故二人はいかにも身輕に足早に、雲よりも高い所に築かれた都の敷地へと登つて行つた。まるで空中をさして行くのだが、途々楽しいに語り合つた。無事に河を渡つたことや、かやうに榮えある人々と連

れ立つことがいかにも嬉しいのであつた。

二人が輝やける人達と話した所はその場所の榮光についてであつた。かの人達はその美しくさと榮光とは口に言ひ盡すことは出来ないと言つた。「あれこそ、シオンの山、天のエルサレムで、千萬の天の使の在るところ、また成全せられたる義人の靈魂の在るところです(ヘブライ十二廿三)。貴君方は今神の淨樂園へ行つて、生命の樹を見、決して凋みざる果實を喰べなされるでせう(黙示二)。又そこに御出でになると、白き衣を着せられて、(黙示三)大君と日毎に往來し。又話をして世々限りなき日に至るでせう。(黙示廿)そこでは地上の下界にある時に見たやうな、悲しみ、嘆き、痛み、死といふ物を再び見ることはありません。前の事は既に過ぎ去つたからです(黙示廿四)。貴君方は今アブラハム、イサク、ヤコブその他の預言者の許に行きなされるのです。それは神が來るべき惡から除外された人達で、今はその寢床に休んで、各々その義しきを行つてゐるのです」

そこで二人は問ねた。「私共はかの聖い場所で何にをいたすべきでせうか」
 かの人々はそれに答へた。「貴君方は彼方でこれまでの凡ての辛苦に代る慰めを受けなされる。又これまでの凡ての悲哀に代る歡びを受けなされます。凡ての祈りでも、涙でも、途上で大

君のために受けた苦しみでも、貴君方の播いたものは、その實を穫らねばなりません（ガラテヤ八）。彼處では黄金の冠を被り、聖く在す者の窮りなき姿と面影を喜んで、その眞の状を見るでありませう（ヨハネ二）。又彼處では讚美と関の聲と感謝を以つて絶えず主に仕へられます。貴君方が世にある時には仕へたいと思つても、肉の弱さがために中々六ヶ敷かつたですが、もうそんな事はありませぬ。彼處では貴君方の眼は全能者の姿を見て喜び、又貴君の耳はその樂しき聲を聴いて喜びなされませう。彼處で貴君方は先きに世を逝つた友達に再び合つて悦び、又貴君方よりも後にその聖い場所に来たる人々を悦んで迎へられるでせう。彼處で貴君方は榮光と威嚴とに装はれ、又榮光の王と一緒に乘るに應はしい装具をなさしめられませう。主が雲間の喇叭の鳴ると共に風の翼に乗りて來たまふ時、貴君方は主と一緒に來たるでせう（テサロニケ前四）。又主が審判の座に座りたまふ時、貴君方はその側に座れませう。又天の使でも人間でも、惡事をなした者に主が宣告をなさる時に、その者共は主の敵であると同時に、貴君方の敵である故に、貴君方もその審判に口出しが出来ませう。又主が再び都に還らるゝ時は、貴君方も亦喇叭の音と共に往いて、いつまでも主と偕に住めませう。

さてかやうに語りながら、門の方へ近づくと、見よ、一群の天軍が現はれて彼等を迎へた。

かの二人の輝やける者はこれに向つて言つた。これは世に在りし時に、わが主を愛して、聖名のために一切を捨てた人達であります。主はこの人達を連れて來るやうに私共を送られさせたので、遙々その道連れになつて一緒に參りました。これから内へ案内して贖主に御拜調させてその欣喜に入りたいと存じます。そこで天軍は大きな聲を擧げて、「羔の婚姻の筈に招かれたる者は幸ひなるかな」（黙示十）と叫んだ。又その時白い輝やける衣を着た王の樂人が數多現はれてこれを迎へ、妙なる樂の音を天にも應へるほどに高く掻き鳴らした。これらの樂人は基督者とその同伴とに挨拶して、世を離れて來たことを幾千度となく歡び祝うた。さうして又聲を擧げたり、喇叭を鳴らしたりした。

かうして、二人は四方から取り圍まれた。前に行く者もあるし、後に行く者もあるし、右に行く者もあるし、左に行く者もあつた。（宛かも天つ通路に二人を警護するやうであつた）。途々絶え間なく妙なる樂の音は調いと高く掻き鳴らされた。その光景がいかに樂しきやうで、宛かも天も下つて來て彼等を迎へるやうに見えた。かうして一同共に歩いた。歩きながら樂人達はいよゝゝ歡ばしき音を掻きならしたが、その音樂につれる顔色と身振を見ても、いかに基督者とその兄弟とがその仲間に歡んで迎へられたか解つた。今やこの二人は天國に入

らざる先きに、見渡すかぎり天の使の群に圍まれて、その妙なる調べを聴いたので、もはやその中にある心地した。それに此處からは都も一目に見えた。都では凡ての鐘が鳴り響いて彼等を迎ふるやうに想はれた。いや、別けても自分等もこの人達と一緒にいつまでも限りなくそこに住へるのだと想へば、温かな嬉しい想を身にひしくと覺ゆるのであつた。舌にも筆にもそのこよなき歡喜を現はすことは出来ない。かうして彼等は門に到着した。

さて門に着いて見ると、その上には金文字でかう記してあつた。

「その衣を洗ひし者は幸ひなり。彼等は生命の樹の實を受くるの權を有し、又門より城に入ることを得べし」

私が夢の中で見てゐると、輝やける人達がその門におどづれるやうに二人に告げた。二人がさうすると、直ちに或る人達が門の上から此方を眺めた。それはエノク、モーセ、エリヤといふやうな人達である。案内の人々はこれに言つた。「この旅人達は此處の大君を愛する所から、滅亡の市より來た者であります」

すると旅人達は初めに受け取つた證狀の卷物を差し出した。それが王の御前に運ばれると、王はそれを讀んで、「この人達は何處に居りますか」と言はれた。

「門の外に立つて居ります」と人々は答へた。

王はやがて門を開けるやうに命じて、「眞理を保てる義しき國民を入らしめよ」(イザヤ廿)と言はれた。

今や私が夢の中で見てゐると、この二人は門に入つて行つた。視よ、その入ると同時に、二人の姿が變つた。その着たる衣物は黄金のやうに輝やいた。縦琴と冠を持てる者が亦二人を迎へて、それを與へた。その縦琴は讚美するため、その冠は榮譽の表象である。やがて私が夢の中で聴いてゐると、都中の鐘が悉く喜びに鳴り響いた。又「わが主の歡樂に入れよ」

(マタイ廿一)と言はれた。かの二人も大きな聲を擧げて、かう歌つた。「願はくは、讚美と尊敬と榮光と權位と、實位に坐する者および羔の上に歸して、世々限りなからんことを」(黙示五)

さて門が開いて二人を入れやうとする時、恰度私は後から眺めてゐた。視よ、都は日輪のごとく輝やいてゐた。街道には黄金が舗きつめられた。そこを往來する人達は皆な頭に冠を被つて、手に棕櫚の葉と黄金の縦琴を持つて、讚美を歌つてゐた。

又そこには翼のある者も居つて、絶間なく互ひに呼び合つて、「聖なる、聖なる、聖なるかな、主よ」(黙示四)と言つた。やがて間もなく門は閉められた。私はそれを見ると、自分もそ

正 篇
の内に入りたかつた。

さて私はすべて此等の事を眺めてから、頭をめぐらして後を眺めた。すると無學者が河の側までやつて來たのが目についた。やがて彼はそこを渡つたが、前の二人が出遇つたやうな難儀を半分もしなかつた。實は其處に空望者といふ船頭があつて、その小舟で彼を渡したのであつた。そして彼は前の人達のやうに、岡を登つて、門に達しやうとした。けれども彼は唯一人である。誰ありて彼を迎へて尠しでも勵ましてくれなかつた。彼は門までやつて來て、その上に記してある文字を見上げた。そして直ちに入れるものと想つて、叩き始めた。然るに門の上から人々が見おろして、「何處から來ましたか、どうしたいのですか」と問ねた。「私は王の前にて飲み食ひしたことがあります。又王はわが街道で救へられたことがあります」(ルカ十三)と彼は答へた。やがて人々は王の許へ行つて見せる證狀がありますかと問ねた。そこで彼は懐中を探したが、何にも見つかるわけがない。「何にもないのですか」と人々が言つたが、彼は一言も答へなかつた。やがてこの事を王に申し上げると、王は元より彼に會ふとは言はれない。唯基督者と有望者を都に案内した二人の輝やける者に命じて、行つてその無

學者を捕へて、その手足を縛つて、曳き立てよと言はれた。そこで彼等は彼を捕へて、空中を運んで、私が前に岡の傍で見た戸口の所へ來て、その中に彼を入れた、それは天の門からも、滅亡の市からと同様に、地獄への路であつた。かくて私は目を醒して、それが夢であることを見た。

結 辭

讀者よ、わが語りしこの夢を、

われと汝が身と隣人にも、

解き明かし見よ。されどゆめ、

あやまり解きて、益もなく、

身の害ひとなすなかれ。

あやまり解かば惡の素因。

また心せよ、わが夢の、

外觀にあまり興がるな。

われの形容と比喩をば、

笑ひの草となすことは、

欠

天路歷程

正篇終

正篇

子供と莫迦にまかせおき、

なれば眺めよ、物の相

幕をのけて内を見よ、

譬喩を返して過まつな。

索ねばそこに誠心の、

助けとなるべきものあらん。

そこに見出す鐵滓を、

投ぐれば下に黄金あり。

粗金それを巻くとも、

核は林檎につきものぞ。

空しく凡てを棄て去らば、

われ夢見んか、なほ一度。

汝、死ニ知レ、汝ハ死ニおシル

何ガコト、本リ積リカ

百十一頁ノ終リ頃カ、百十七頁ノ初

汝ノ内ヲ鏡ニ照シテ見ユ

ア、恐ロシキ哉、其ノ功女

汝、附リ取リテ、終ニ其長カカラ

何ヲ得ル、僕ハニン奴ニモ、

困窮、館ニ入ル、

又(部)

欠

天路歷程

パンヤン著
松本雲舟譯

續篇

一
感謝なる友達よ。

何時ぞや、私が夢に見た基督者といふ旅人とその天つ御國への危険な旅行のお話しをしたが、それは私にも愉快であり、又貴君方にも有益であつた。私は又彼の妻子のことや、彼等が彼と一緒に旅立つことを好まなかつたことや、彼が餘義なく妻子を残して出かけたことについて、見たところを貴君方にお話しした。彼は妻子と一緒に滅亡の市に留まりては、來らんとする破滅の危難に走らねばならぬので、その怖ろしさに、私が貴君方に示したやうに、妻子を捨て、出立したのである。

續篇

さて私は繁雜ない世事に礙げられて、かの人が出立した地方には、私の例の旅から遠ざかつたので、今まで彼が後に残した妻子の身の上を更に尋ねる機会がなかつた。それ故貴君方にお知らせすることも出来なかつた。ところで近頃ある用事があつて、再び彼處に下つて往つた。さて其處から一哩ばかりの森の中に宿を定めて、睡ると、また夢を見た。

私が夢の中で見てゐると、一人の年老つた紳士が私の臥てゐる側へ來た。老人の行く先きは、幾分私が旅する路筋なので、私は起ち上つて、一緒に出かけたやうに想つた。二人は歩きながら、旅人が常に爲すやうに、互ひに談話を始めたが、いつしか基督者と其の旅のことに話が及んだ。私は老人に向つて、

「貴下、この路の左手で、あそこの下にあるのは何町ですか」

すると聰明氏（老人はかういふ名であつた）が言つた。「あれは滅亡の市といつて、繁華な地ですが、人民の狀態がいかに悪くつて、怠け者の寄合です」

「矢張彼の町でしたか」と私が言つた。「私も一度あの町に行つたことがあります、いかにも仰やる通りですな」

聰。「いかにも左様です。ならうことなら、實際そこに住んでゐる者のことをもつと善く言

ひたいですがな」

「いや、貴下は」と私が言つた。「見受けますところ、心掛の善い方ですな。善い事を聞いたり、話したりなさるのがお好きでございませう。それにつけ一寸と伺がひますが、何時ぞやこの町から（基督者といふ）一個の人が天國の方へ旅立つたさうですが、お聞きになつたことはありませんか」

聰。「それは聴きましたとも。そして私はあの人の道中で出遇つた苦心艱難、戦かつたこと、虜になつたこと、泣き叫んだこと、呻いたこと、嚇されたこと、恐れたことをも聴きました。それから又貴君に申し上げたいとは、私の國中その噂さが廣まつたことです。彼の身の上やその爲したことが、家毎に傳はつて、その道中記を求めて手に入れたといふ次第です。まあ、その危なかしい旅はその路を慕ふ者を多く出したと言つて可いでせう。彼が茲に居た時には、皆なから馬鹿者だと言はれたのですが、彼が行つた今では、大いに持囃されてゐるのです。今では立派に暮してゐるといふことですのでな。だから、決してそんな無鐵砲な眞似はしないと頭張つた者でも、今ではその所得を羨やんで口に垂涎でさ」

「それは」と私が言つた。「あの人が立派に暮してゐることは人々の想つてゐる通りです。彼

は今生命の泉の邊りに又その裡に住んで、骨折も悲しみもなしに、必需物を得て居ります。彼處にはなんの憂ひもありませんからな。それで人々は彼の人のことをどんな噂さをして居りますか」

聰。「噂さですか。それは妙な噂さをして居ります。彼は今白い衣を着(黙示二)、頭には金の鎖をかけ、頭には眞珠を鑲めた金の冠を被つてゐるさうだと言ふ者もありますし、又彼の道中で時々姿を現はした輝やける者がその友達になつて、隣り同士のやうに親しくしてゐるさうだと言ふ者もあります。それから又彼が居る其處の主からその大庭の邊に甚だ豊かな樂しい住居をたまはつて(ルカ十四五)、毎日主と偕に飲み食ひし、又散歩したり、話しを仕たりして、萬の審判者なる主に莞爾と迎へられ、その寵愛を受けるさうであると確かに信せられてゐるのです。尙ほまた、その國の主なる大君は間もなくこの地に來たりたまふて(ユダ書)、彼の人々が旅立たうとした時に、隣人等はそれを見て尠しも同情しないばかりか、非常にこれを嘲けたのはどういふ理由かそれを聞きなされるだらうと待ち設けてゐる者もあるのです。

「今や基督者がますます主の愛情を受けるに從がひまして、先きに彼が旅人となる時に受けた凌辱を、主自からお受けになつたやうに心に懸けたまふであります。基督者は主を愛し

て、あれほど苦しい想をしたのですから、主がそれほどに思召の不思議ぢやありませんか
らな」

「さうですか」と私が言つた。「それは嬉しいです。あの可憐な人のために、喜ぶことは、今その骨折から休んで、涙ながら播いた種を歡びを以つて刈り取る(詩百廿六)からです。

「又今では敵の鐵砲玉の達かぬ所にをらし、又彼を憎む者から遠ざかつてをることです。又さういふ事の風評がこの國中に擴がつたといふのは嬉しいですな。それは必らず後に殘された者に善い影響を與へますからな。それから、貴下、思ひ出しついでに伺がひますが、あの人の細君や子供達のことについて何にかお聴きになりましたか。可哀さうに、どう爲つたでせう、心配です」

聰。「誰ですか。基督女とその息子達のことですか。それなら基督者のやうに立派な振舞をしました。初めは馬鹿なことをして、基督者の涙にも懇願にも服しなかつたでしたが、不思議にもつくづく考へ直したのでせう。旅の仕度をして、彼の後を慕つて行きました」

「それは、まあ、結構至極です」と私が言つた。「それで、何んですか、細君も子供達も皆なですか」

聰「左様です。私は恰度其處に居合はせましたので、その一部始終を悉皆知つてゐますから、その事なら委しいお話しが出来ます」

「それなら」と私が言った。「その評判は眞實なんですか」

聰「眞實ですとも。皆な都詣でに出かけたのです。その善い細君と四人の子供達と揃ひましてな。ところで私は暫らく貴君と連れ立って行けるでせうから、その一部始終をお話ししませう。

この基督女は（これはその婦人が子供達を連れて、旅に出たその日から憊う名乗つたので）、その良人が河を渡つてしまつて、最早何んの消息も聴けなくなつたので、獨りつく／＼物想ひをするやうになつたのです。第一、良人を失なつて、二人の間の愛の縁といふものは全たく断れてしまつたでせう。御承知の如く、彼の人も私に向つて、「愛する者の失くなつたことを思ひ出して、深き物想ひに沈むのは、生ける者の自然の情で、どうも仕方がありません」と言つたことがあるのです。ですから、良人のことを思へば、涙の止め度もなかつたでせう。唯そればかりぢやない、基督女は自分のことを深く考へて、良人を情なく待遇したことが、最早彼を見ることが出来ない一つの原因となつたのではあるまいか、そのために良人は自分か

ら取り去られたのではあるまいかと思ひ惑つた。そこで愛する良人に對して不親切であつたことや、道ならぬ仕打をしたことや、無情な素振をしたことなどが、心にむら／＼と浮んで來ましたので、良心はそのため苦しくなるし、自分の罪も解つて來たのです。それから良人が絶えず呻いて、辛い涙を流して、悲嘆にくれたことなどを思ひ出すにつけて、良人が自分や子供達と一緒に行きなさいと切りと頼んだり、柔しく勸めて下さつた時に、どうしてあんなに強情を張つたであらうと思へば、尙も腸が千切れるやうであつた。又良人が重荷を脊中に負つてゐながら、自分に言つたことや、自分の前で仕たことが、稻妻のひらめくやうに心に浮んで來て、心の網を片々に裂いたのです。殊に「私は救はれるためにどうしたら可からう」といふ良人の苦しげな叫び聲が、いかにも悲しげにその耳に響いた。

そこで家内は子供達に向つてかう言つた。「子供達よ、私共はもうどうも仕方がありません。私はお父さんに悪いことをしたので、お父さんは行つておしまひになつた。お父さんは私共も一緒に連れて行きなさいたかつたのです。私は自分も行かうとせず、お前さん達にも生命を獲る妨たげをしました。これを聴いて、子供達は皆な涙を流して、お父さんの後を行かうと泣き叫んだ。そこで基督女は「あ、良人と一緒に連れ立って行くのが私共の運命でし

た。さうしたらこんな辛い目に遇はずに、どんなに善かつたでせう。これまで私は愚かにも、お父さんの惱苦を、馬鹿げた想ひ過ぎか、あまり氣が沈み過ぎたので起つたとばかり想つてゐましたが、今ではそれが別な原因からであつたことが解りました。それは全たくお父さんが生命の光(ヨハネ八)を與へられなすつたからで、そのお助けに依つて、死の係蹄を免かれなすつた(箴言十四)のでせう。

そこで子供達は又皆んな泣いて、「あゝ悲しい日でしたな」と叫んだ。

その翌る夜に基督女は一つの夢を見た。見よ、一つの廣い羊皮紙がその前に開かれた。それには彼女の行狀が全體記されてゐた。これまでの罪が墨黒々とその上に眺められた。そこで彼女は睡てゐながら高い聲で、「主よ、罪人なる私をあはれみたまへ」(ルカ十八)と叫んだ。小さい子供達はその聲を聞いた。

その内に今度は二個の悪鬼が寢床の側に立つて、「この女をどうしてやらう。睡ても醒めても、あはれみを乞ひ求めるぢやないか。この儘にしておかうものなら、この良人を取り遁したやうに、この女をも遁がしてしまふ。今の内になんとか工夫して、この女の思想を中途で止めておかないと、又旅に出かけてどうしやうもなくなる」と語つてゐるのを見たやうに想つた。

さて、彼女はびつしより汗をかいて目を醒して、ぶる／＼慄へてゐたが、やがて暫らくすると又眠りに落ちた。今度は良人の基督者が多くの天人に圍まれて祝福の場所に居つて、手に縦琴を持つて、頭に虹を戴いて玉座に座つてゐる者の前に立つて、それを弾いてゐるのを見た。又彼が王の足下にある敷石に平伏して額づきながら、「私を此處にお連れ下さいましたことを心よりわが主なる王に感謝いたします」と言ふのを見た。すると周りに立つてゐる人達が一聲に呼ばはつて、その縦琴を弾いた。けれども基督者と其の仲間のほか、人間には誰もその言ふ所のことを話すことが出来ない。

翌る朝基督女は起き出で、神に祈つて、子供達と暫らく話しをしてゐると、門の戸をほとほと叩く者があつた。基督女はその人に言つた。

「神の御名でお出でになりましたなら、お入り下さい」

その人は「アーメン」と言つて、戸を開けて、「御家の平和ならんことを」と挨拶した。さうして彼はかう言つた。「基督女さん、私が何故参りましたか、御存知ですか」

そこで彼女は顔を赧めて、身を震はせた。この人は何處から來たのか、又どんな用事がある

るのか、知りたさに胸が熱くなつた。

やがてその人が言つた。「私は名を秘密者といつて、高い處に住んでゐる者の一人でございます。私の住んでゐます處の噂によると、貴女は其處へお出でになる御志がありますさうですな。又そこでの評判によると、貴女は以前良人に逆らつて、その旅立ちの時に心を頑なにしましたことや、お子さん達に何にも教へずに置きなされることを、あゝ悪かつたとお氣が付かれたさうですな。基督女さん、恵み深き主が私を遣はされましたのは、主はいつでも罪を赦す神でゐますこと、それから幾度でも咎を赦すことを歎こびたまふことを貴女にお話するためですぞ。主は又御前に貴女をお招きになつて、その食卓に座らせ、その家の肥えたるものを馳走し、貴女の父ヤコブの産業を興へやうとしてをられます。

「そこには貴女の良人の友人であつた基督者も多く、の友達と一緒に、仰ぎ見る者には、生命を興へ賜ふ者の御顔を常に眺めてをります。若し貴女の足音が天父の家の園に歩み入つたことが聴えたら、あの人達はどんなに歡ぶか知れませんか」

基督女はこれを聴いて大いに耻かしく思つて、首をうな垂れてゐた。この客人は尙ほ進んで言つた。「基督女さん、こゝに貴女の良人の王様から貴女へ下すつた手紙があります」

基督女はそれを手に取つて、封を抜くと、いみじき香膏のやうな薫がした(雅詩二)。又それは金文字で記してあつた。その手紙の文面には、王が良人の基督者にして下すつたやうに彼女にもして下さるつもりである。王の都に来て、限りない喜悅を以つてその御前に住はうと思へば、唯この路のほかにないと認めてあつた。これを讀んで、性の善い女は全たく耐へ切れなくなつて、客人に向つて泣きながら、「貴下、どうぞ私と子供達を御一緒に連れて行つて下さい。そこへ參つて、王様を拜まして下さい」

そこで客人は言つた。「基督女さん、苦は樂の種です。先きにお出でになつた基督者さんのやうに、貴女も天の都に入るまでには、種々苦しい目にお遇ひにならねばなりません。貴女の良人の爲されたやうに、私も貴女にお勧めします。この原を越して向ふにある耳門へお出でなさい。それは貴女がこれからお出でならねばならない路の入口に立つてゐるのです。出来るだけ速くなさい。それからこの手紙を懐へ入れておいて、心の底に根ざすまで、自分でも讀み、又子供達にも讀んでおやりなさい。これは旅の家で必らず歌ひなさらねばならない歌の一つですし、又彼處の門に達した時これを渡しにならねばなりませんから」

さて私が夢で見ると、この聰明翁は茲まで話をして来て、いかにも感動したらしかつ

たが 尙ほ進んで、話を續けた。

やがて基督女は息子達を呼んで、口を開いて恚う言つた。「さて、息子達よ、見らるゝ通り、私は近頃お父さんの亡くなられたことを大變心苦しく想つてをります、それは何にも私がお父さんの幸福を全たく疑がうからではありません。お父さんが幸福なことを、私、今では安心してゐます。私は又自分の有様やお前さん達の有様が生れつき悲惨なことを想ふと、大變心苦しいです。又お父さんが悩んでおゐでなされる時にした自分の仕打を想ふと、良心に大きな重壓を着けられたやうです。私は自分の心とお前さん達の心を頑なににして、お父さんに逆らつて、一緒に参りませんでしたからね。

「この事を想ふと、全たく私は死にさうですが、昨夜夢を見ましたし、今朝このお客様がお出でなすつたので、勵まされました。さあ、子供達、仕度をして天つ御國に導く門へ参つて、お父さんにお目にかゝつて、その國の律法に従がつて、お父さんやそのお友達と御一緒に平和に暮りませう」

すると子供達はお母さんの心の傾むける處を知つて、涙を流して嬉しさに泣いた。やがて客人は暇を告げた。母子は旅の仕度に取り懸つた。



哀憐女と臆病夫人

やがて出立しやうとしてゐると、基督女の隣人である二人の女がこの家に来て、戸を叩いた。基督女は前にも言つたやうに、この女達に向つて、「神の御名でお出でになりましたなら、お入り下さい」と言つた。

これを聞いて、女達は呆れ返つた。かういふやうな言葉は聞き慣れてゐなかつたし、又それが基督女の唇から出やうとは想ひもよらなかつた。併し二人は入つて来た。然るに見よ、性の善い基督女は今しも家出をしようとする仕度中であつた。

そこで二人はかう言つた。「お隣りの奥様、これは、まあ、なんですかよ」

基督女は、臆病夫人といふ年長な女に向つて、「私は旅の仕度をしてゐるところですの」と言つた。

（この臆病夫人といふは、基督者が困難の岡の上で遇つた、かの獅子を恐れさせて彼をも歸らしめやうとした者の娘である）

臆。「何んの旅にお出かけなの」

基督女。「良人の後を慕ひましてね。慙う言つてさめくくと泣いた。

臆。「まあ、そんなことを、奥様、お子さま方が可哀想ぢやありませんの。そんな女らしく

ないことをするのは身を滅ぼす基ですわ」

基女。「いえ、子供達も一緒に参りますの。一人も後へ残らうとしませんからね」

臆。「まあ、驚ろきました。どうして又誰に勧められて、そんな心におなりですか」

基女。「あ、奥様、貴女だつて私ほどに解れば、必然御一緒にお出でになりませうに」

臆。「まあ、どうしてそんな新知識を得なすつたの。貴女の心を友達から離らせて、誰も何處だか知らないところに出かけさせるやうな」

そこで基督女が答へた。「私は良人に行かれてから以來、殊に良人があの河を渡りましてから以來、大層心苦しうございましてね。良人が惱んで居ります時に、どうしてあんなに情なく待遇しましたかと思ふと一番苦しいですの。今だつてその頃と同じことに、良人の跡を慕つて行くほか仕方がないと思つてゐました矢先きに、昨夜夢の中で良人を見ましてね。私の心はもう良人の側に行つてしまひました。良人はその國の王様の御前に暮してをりましてね。王様の食卓で王様と御一緒に座つて食事をして居ります。そして天人の仲間入りをして、與へられた家に住んでをりますが、その家に較べますと、此世の最も善い御殿などはまるで賤が舎のやうでございました。其處の大君は又私に使者を下すつて、私がそこへ参りますと、

嬰應にお招き下さる約束をなさいました。その御使ひの方が今茲におゐで下さつて、お招きの御手紙をいたゞきましたところですよ」憊う言つて、その手紙を取り出して、それを讀んでから、又女達に向つて、「これについてどうお考へなさいますか」

臆。「まあ、狂氣の沙汰ですね。貴女でも御良人でも自ら好んでそんな困難を冒しなされるのは。貴女も確かお聴きでしたせう、御良人がお出かけなすつて早々にお遇ひなすつたことをね。お隣人の強情さんも一緒にいらしたので、能く御存じのとですし、それから柔弱さんも御同様ですが、あの方達は御利口だから遠くまでお出でなさらなかつたせう。それから風評によると、御良人は獅子だの、アポリオンだの、死の蔭だの、その他種々な物にお遇ひになりましたつてね。それから虚榮の市場でお遇ひになつた危難などは、よもや、貴女、お忘れなさいませんでせう。御良人は男でさへ、そんな難儀を受けなすつたに、貴女は繊弱い女でございませんか、さうしたら、まあ、どうでせう。それから、能く考へてごらんないまし、この四人の美しい小さな方々は貴女のお子さまでせう、貴女の肉、貴女の骨ではございませんか。それは貴女の御身だけならごんな向ふ見すなことをしても可でせうが、この可愛い方々のためを思ふて、家にお留まりなさいましな」

けれども基督女は言つた。「私を誘惑なさいませぬ、お隣りの奥様。私は今手の裡にある一つの價格で所得を獲たいと思つてゐますの。この好い機會に心を勵ましませんでしたら、それこそ大馬鹿でございます。貴女は私が種々路で出あひさうな難儀などを仰やいましたが、それは却つて私が正しい路に居る記標ですから、なにも失望しやしません。苦は樂の種ですし、さうすれば樂はもつと大きな樂の種になりますからね。貴女が神の御名で私の家にお出で下すたのでなければ、どうぞ、お歸り下さい。この私を心配させて下さいませぬ」

これを聞いて、臆病夫人は立腹して、同伴の女に言つた。「參りませう、さあ、哀憐女さん、勝手にさせませう。私共の勸言も、交際も馬鹿にしてゐらつしやるのですから」

けれども、哀憐女は黙つて立つてゐて、容易にその隣りの婦人に従がはなかつた。それは二つの理由がある。第一、その心に基督女を憐れに想つた。で、秘かにこの方が是非行きなざるなら、尠しの間一緒に行つて、その手助けをしてあげたいと想つた。第二、その心に自分の靈魂が憐れになつた。基督女が言つたことに、その心は動かされたからである。で、又秘に、もつとこの基督女さんとお話しをして見たい。さうして仰やることに眞理と生命があるなら、自分も心を決めて一緒に行きたいと想つた。そこで哀憐女は臆病夫人にかう答へた。

哀。「ねい、奥様。私、かうして御一緒に今朝基督女さんをお訪ねしましたでせう。それなのに基督女さんはもう二度と歸らぬ旅にお出かけたさうですから、暫らく御見送りして途中の手助けをしてあげたいと思ひますわ、こんなに天氣の好い朝ですしね」

恚う言つたが、もう一つの理由の方は言はないで、心の裡に隠しておいた。

臆。「まあ、あなたも馬鹿な真似がして見たいのですね。兎に角、御用心して、御利巧に願ひます。險呑な所にさへゆかなければ險呑ぢやなし、險呑な所へゆけば、險呑ですからね」

臆病夫人はかう言つて、自分の家に歸つた。基督女はやがて旅路に出で立つた。ところで臆病夫人はその家に歸ると、隣近所の女達を呼び集めた。それは蝙蝠眼夫人、無分別夫人、輕薄夫人、没分曉夫人などである。この女達はその家に集まると、直ぐさま基督女の身の上と、その思ひ立てる旅のことをかう言つて話し始めた。

臆。「皆さん、今朝何にもすることがなかつたものですから、基督女さんをお訪ねしたんですよ。いつものやうに、門口で戸を叩きますとね、「神の御名でお出でになりましたなら、お入り下さい」とのお返事です。別段變つたこともないでせうと想つて、私は家へ入りましたが、入つて見ると、まあ、どうでせう。この町を立ち去る仕度をしてゐるのですよ、御自

分ばかりか、その子供達までね。どうなさいましたのと聴くと、一寸とどうせう。良人の跡を慕つて、旅に出るつもりですつて。それから又夢を見なすつたり、その御良人の居られる國の王様が其處に来るやうにつて、招待の手紙を下すつたのですとさ」

その時没分曉夫人は言つた。「それで何んですか、ほんどうに行くのでせうか」

廳。「えい、どんな事があつても、行くんでせうさ。なせかと言ふに、私は是非家に留まりなさいと大變勸めて見たのですがね。(途中で種々な難儀に遇ひなさるからなど言つてね)さうすると却つてそれが、あの女の旅立ちを大變に勸めたやうになつてしまつたの。やれ、樂は苦の種だの、さうすれば樂しみは更に樂しみになるのだのと、それは種んな言を廳面もなく喋舌るのよ」

蝙蝠眼夫人。「まあ、目先の見えない馬鹿な女ねえ。あの良人の苦しみでも懲りさうなものですのに。良人の方だつてもう一度茲に居るなら、無事息災なことを悦んで、そんな向ふ見すの險なことをするものですかね」

無分別夫人は又かう言つた。「そんな氣違ひちみた馬鹿はこの町から行つてしまふ方が可いですわ。そんな女がゐない方が肩が軽くなりますわね。そんな女がこゝに住んでゐて、そん

な氣でゐられて御覽なさい。誰も安心してその側に住んで居られませんわ。氣がじめくして、近所交際もせず、そんな事はかり話されては、どんな賢い人でも遁げ出しますわ。だから、私はあの女が行つてしまつたつて、一寸も悲しかありません。まあ行つてしまつて、その代りに誰かもつと善い人に來てもらうですわね。そんな氣の狂つた馬鹿な女が居ればこそ、世の中は面白くないですわね」

輕薄夫人も次のやうに言つた。「さあ、そんな話は止めませう。私は昨日淫蕩者の奥様のお宅に何がひまして、年の若い娘達のやうに樂しく遊びましたのよ。そこに落ち合つた人達はね、私に、それから肉戀夫人、その他三四人と、好色夫人と猥褻夫人とその他の人達でしたかね。彈いたり踊つたり、有らんかぎりの快樂をしましたわ。あの淫亂者の奥様も感心に程の好い女ですが、好色者さんと來たら、ほんとに美しい男ですわね」

二

この時基督女は出立した。哀憐女もこれと一緒に行つた。子供達も連れて行かれた。基督女は恚う言つて談話を始めた。

基女。「哀憐女さん、これは、まあ、思ひがけませんお厚情ですのね。かうしてあなたが少しの間でもお見送り下さいますのは」

そこで年の若い哀憐女（この女は若かつた）が言つた。「私はあなたと御一緒に行くだけのことがあると思へば、もう町には歸りませんわ」

「それなら哀憐女さん」と基女が言つた。「私と御一緒に行らしやいませ。私共の旅路の終りは能く解つてをります。私の良人は、西班牙の鑛山の有らゆる黄金にも代へ難い處に居りますのよ。あなたが私の御案内だけでお出でになつても、よもや拒まれはしませんまい。私と子供達をお招き下された王様は哀憐を好みたまふ方ですからね。それに、御宜しければ、あなたをお雇ひして、私の侍女にしてお連れ申しますわ。さうすれば何んでもあなたと私と共同に用ゐることが出来るでせう。だから、唯私と御一緒に行らつしやいな」

哀。「でも、どうして私が確に待遇を受るといふことが解りませう。確かな人からその希望を與へられましたら、何にもぐづぐづしないで、参りますけれど、路がどれほど煩はしくつても、能力ある御手に助けられましてね」

基女。「それなら、愛する哀憐女さん、かうなすつたらどうでせう。耳門まで御一緒に行ら

しやいね。そこで又お尋ねしますからね。そこで御氣が進まぬやうでしたら、お心まかせにお返しませうし、それから御一緒にお出で下さつて、私と子供達に御親切にして下さつたお禮もいたしませう」

哀。「それなら其處まで参りませう。後のことは成り行きにまかせるとしましてね。天つ大君の御心にかないますやうに、私の行末はなりませんから」

そこで基女は心に歡んだ。道連れを得たばかりでなく、この憐れな娘を説き勸めて、その身の救ひを慕はせるやうにしたからである。やがて彼等は一緒に行つた。すると哀憐女は泣き出した。基女は言つた。「どうして。あなた、泣きなされるの」

哀。「私の憐れな親族はあの罪深い町に居りますでせう。その有様、境遇をつくつく考へますと、あゝ、ほんごに悲しくなりますわ。あの人達を導いてくれる人もなく、來たるべきことを話してやる人もないのかと思ふと、尙更悲しくつて仕方がございません」

基女。「旅には情と申します。あなたが友達のために泣きなさいますやうに、私の良人基督者も別れる時に私のために泣きました。私が良人に氣をつけなかつたこと、思はなかつたことを悲しみましたのです。ですが、良人の主にてゐまし、又私共の主にてゐます神さま

は、良人の涙を集めて、この塚の裏に置きたまひました。ですから、今私と貴女とこの可愛
 い子供達はその涙の果實と功德とを刈り集めるのであります。ねい、哀憐女さん、あなたの
 その涙を失はないやうに仕たう御座います。「涙と共に播く者は、歡び歌ふて刈り取らん」
 (詩百廿)ともありますし、「その人は貴とき種を携さへ、涙を流して出で行けど、禾束を携さへ
 喜びて歸り來たらん」(詩百廿)といふ言葉もありますからね」
 そこで哀憐女は歌つた。

「いとも深き、恵みの主よ、

みこゝろならば、われを導き、

その門までも、その羊欄までも、

聖岡の上にも行かしたまへ。

主のめぐみと、聖けき路を、

側にそれてぞ、踏み迷ふをば、

主よ、われに許したまはされ、

よしやわが身に、事起るとも。

主をしてわが、後に残せる。

わが同胞を集めしめてよ、

主よ人々が、眞心をもて、

汝がものなるを、祈らしめたまへ」

さてわが聰明翁は尙も話を進めた。やがて基督女は落膽の沼までやつて來たが、暫らくそ
 こに立ち止つた。そして、「私の良人が泥に溺れて死にさうになつたのは、此處ですわ」と言
 つた。此處は大君の命令に依つて、旅人のために修繕をされたのであるが、前よりも一層惡
 くなつてゐるのが、基督女の目に着いた。で、私はそれは眞實ですかと老人に問ねると、聰
 明翁は言つた。「さやう、それは眞實ですとも。主の勞働者だと言つてゐる者の中でも偽者が
 多いですからな。大君の往還を直すと言ひながら、石の代りに塵埃を運ぶのですから、直す
 のでなくつて壞すのです」

それ故基督女は子供達を連れて、茲で暫らく立ち留つてゐた。そこで哀憐女は言つた。「さ
 あ、試しにやつて見ませう。用心だけはしまして」やがて彼等は踏み石に能く眼をつけて、
 よろめきながら渡り始めた。

しかし基督女は一度ならず二度までも、滑り落ちんとした。さて漸く渡り終はらんとする頃、「主の言を信せし者は福ひなり。そは主の語りたまひし如く必ず成るべければなり」(カル十五)と自分達に向つて言はれる聲を聞いたやうに想つた。

やがて彼等は又進んだ。哀憐女は基督女に言つた。「あなたのやうに私も耳門に就んで受け容れられます望みが確かにありますなら、落膽の沼など、私、何んとも思ひませぬわ」

「さうですね」と基督女が言つた。「あなたは御自分の痛み處を御存じですし、私も自分の痛み處を存じてをります。ねい、哀憐女さん、私共は旅路を終るまでには、種々澤山な辛い事に遇ひますでせう。私共のやうに立派な榮光に達したいと思ふたり、私共のやうな幸福を羨やむ者は多くありますが、さういふ人々でも恐怖や、係蹄や、惱みや、苦しみに遇ひたかないのです。だから、私共を憎む者と一緒になつて、出来るだけ私共を攻撃しますからね」さて今や聰明氏は私共から夢を見るやうにして立ち去つた。そこで私は基督女と哀憐女と子供達と一緒に連れ立つて門の方へ行くのを見た。歩きながら、どうしてその門におどづればきであらうか、又自分達のために門を開けて下さる方になんと言つたら可からうかと、暫らく互ひに話し合つた。そして基督女は年上なので、入口の戸を叩いて、一同のために、そ

こを開ける人に話しをすることに定めた。そこで基督女は叩き初めた。その憐れな良人のやうに、再三叩きに叩いた。けれども更に應へる者もなく、唯一匹の犬が自分達を吠えながら出て來るのが聽えるやうであつた。一匹の犬、しかも大きな犬である。女と子供達はびくびくした。暫らくはその猛犬が飛びかゝりさうなので、怖くつてその上戸を叩く氣がしなかつた。それ故非常に當惑して心が上つたり下つたりして、爲すべき所を知らなかつた。犬が恐いので、叩くにも叩かれず。さうかといつて、引返へすにも引返へされぬ。若し還らうものなら、門の主に見付かつて、怒られるかも知れない。遂にもう一度叩いて見やうと想つて、初めよりも激しく叩いた。やがて門の主は言つた。「何誰ですか。すると犬も吠えることを止めた。そして門は彼等のために開かれた。

その時基督女は鄭重にお辭儀をして、かう言つた。「主よ、何卒御免下さいまし。この侍女は主の御門を叩きました」

そこで門の主が言つた。「あなた方は何處からお出でなさいましたか。又どういふ御用ですか」

基督女は答へた。「私共はいつぞや基督者の來ました處から參りましたのでございまして、

用向も同じでございます。天の都へ参りたいのでございますから、何卒この御門を通るお許しを受けたう存じます。それから貴方様、私は今天國に居ります基督者の妻の基督女と申すものでございます」

すると、門の主は怪しんで、「何んです、旅人になつた、永年さういふ生活を嫌つた人が」そこで基督女は首をうな垂れて、「はい、御尤もでございます。私の可愛い子供達も旅人になりました」

やがて門の主は基督女の手を取つて、門内に引き入れた。そして「幼児を我に來たらせよ（ルカ十八）とありますからな」と言つた。そして門を閉ぢて、門の向ふの上にある喇叭手を呼んで、歡びの聲を挙げ、喇叭を鳴らして、基督女を待遇すやうに命じた。喇叭手はその命令に従つて、喇叭を鳴らすと、妙なる音は空中に充ち渡つた。

さてその間哀憐女は門外に立つてゐて、拒まれはしないだらうかと心配して、慄へて泣いてゐた。けれども基督女は先づ自分と子供達のために許容を受けてから、やがて哀憐女のために取りなしを始めた。

基督女は慙う言つた。「貴方様、まだ御門の外に私の一人の伴侶が立つて居ります。その方



耳門の哀憐女

も私と同じ考へで茲へ参りましたのでございますが、大變心配してゐられますのです。私が良人の王様からお招きを受けたのと違つて、其方はお招きを受けずに参つたからでございます。

「今や哀憐女はいと堪へがたくなつて、一分間は一時間ほどに長かつた。で、基督女がもつと充分に取りなさうとしてゐると、哀憐女は自ら門を叩いてその邪魔をしてしまつた。あまり激しく叩くので、基督女は吃驚した。すると門の主は「誰ですか、あれは」と言つた。基督女は「あれが私のお友達でございます」と言つた。

やがて門の主は門を開けて、外を眺めた。哀憐女は卒倒して門の外に倒れてゐた。自分のために門を開かれることはあるまいと思つて、心配のあまり氣絶したのであつた。

そこで門の主は哀憐女の手を取つて、「娘よ、起きなさい」と言つた。

「あ、貴方様」と哀憐女が言つた。「私は氣を失ひました。生も絶えくゞでございます」門の主はそれに答へた。「或る人の言葉に『わが靈魂裏に弱りし時、われエホバを思へり。しかして我が祈、汝に至り汝の聖き殿に及べりといふことがあります。だから、心配なさらず、起き上つて、あなたのお出でになつたわけを私にお話しなさい』」

哀。「私はお友達達の基督女さんのやうに、お招きにあづかつて参つたものではございません。基督女さんは王様のお招きをお受けになつたのですが、私は唯基督女さんのお招きを受けましたばかりで、それですから、心配いたしましたのでございます」

門の主。「この婦人が此所へあなたと連れ立つやうに望んだのですか」

哀。「さやうでございます。ですから、御覽の通り、私は参りました。どうぞ、御恩恵と罪のお赦しがございますなら、この憐れな侍女にもお分ち下さいまし」

そこで門の主は再び、哀憐女の手を取つて、静かに内へ導いてから、言つた。「どんな手段で私のところへ來ても、私を信する者のために、私は祈ります」それから側にゐた人達に向ひ、「なにか持つて來て、この哀憐女さんに嗅してやりなさい、元氣の着くやうに」と言つた。すると人々は没藥の袋(雅歌一〇十三)を持つて來てやつたので、哀憐女はやがて氣力を回復した。かうして基督女と子供達と哀憐女とは旅路の初めに主に迎へられて、親切な言葉に預かつた。基督女達は尙ほ進んで憐う言つた。「私共は罪を悲しむものでございますから、主のお赦しを願ひたう存じます。それから、どうぞ私共の爲すべき事をお教へ下さいまし」

「私が赦しを與へるのは」と門の主が言つた。「言葉と行爲とによるのです。言葉によるのは、

罪の赦しの約束です。行爲によるのは、私がそれを獲た方法です。接吻(雅歌一)をもて、私の唇からその言葉を取りなさい。さうすれば第二の行爲の方も顯はされます」

私が夢の中で見てゐると、門の主は澤山な善き言葉を彼等に語つたので、彼等は大ひに歡こんだ。主は又門の頂上に彼等を導いて、どんな行爲に依つて(主の十字架)彼等が救はれたかを示した。そして途々その十字架の光景を想ふては、感さめを受けるやうにと話した。

やがて主は暫らく彼等を下の夏座敷に導ひかれたので、彼等は互ひに語り合つた。基督女は憐う言つた。「私共が茲に入れたのは、どんなに嬉しいか知れませんか」

哀。「あなたもさうでせうが、私は殊に飛び立つほど嬉しうございます」

基督女。「私は門の側に立つてゐました時に一寸と憐う想ひました。幾ら叩いても、返事がありませんので、これまでの骨折は全然無駄のやうにね。殊にあの醜い犬があんなに激しく私共を吠えるんですもの」

哀。「私は又あなたが厚く迎へ入れられて、私ばかり後に残されたので、非常に氣をもちました、私のはあの二人の婦磨ひき居らんに、一人は取られ、一人は遣さるべし(マタイ廿四)といふ言葉通りになるのかと想ひましたので、ですから、大變苦しくつて、困つた、困つたと

叫ばないでは居られませんでした。もうその上門を叩く氣にもなりませんでしたが、不圖門の上に書いてある文字を見上げて、勇氣が出ました。そしてもつと叩かなければ、死ぬよりほかないと想ひましたので、私はどうしてか、無我夢中に叩きました。私の心は生きるか死ぬるかといふ境に徨よみましたのですね」

基女。「そんなに夢中にお叩きになつたのですか。お叩きになるのがあまり熱心なものですから、その音に私は吃驚しました。私の一生の間にあれほどの叩く音を聞いたことがありません。『人々勵みて天國を取らんとす』(マタイ十二)とあるやうに、腕力でお入りになるつもりかと思ひました」

哀。「だつて、可哀想でせう。私のやうな場合になりますとね、誰でもさうせずにはゐられません。私だけ閉め出されていますし、大きな猛々しい犬がその邊に居るのですもの。ですから、私のやうに氣の弱い者は誰でも死物狂ひに叩くでせう。で、いかゞでございます。主は私の無作法をなんと仰せられましたか。お怒りにふれましたでせうか」

基女。「主はあなたが激しくお叩きになるのを聴いて、いかにも邪氣なくお笑ひになりました。ですから、あなたは充分主の御意に適ひましたでせう。お怒りになつた御様子は見受け

ません。でも、どうしてあんな犬をお飼ひなのか、私は心の裡で變に想ひますの。前から犬のことなど知つてゐましたら、私だつてそれ相應の心組でゐますけれど。でも、かうして私共は門の内に入りましたのね。門の内に入るのですから、心一杯嬉しうございます」

哀。「主が今度お出でになつたら、どうして御庭にあんな穢れた犬をお飼ひなさるのか、お尋ねして見ませうか。よもや御機嫌を損じなさりはしないでせう」

子供達はそれを聞いて、「あゝ、さうなさいね。それからあの犬を絞殺すやうに頼んでね。茲から行く時に噛まれるといけないから」

やがて主は再び彼等の許に來られた。哀憐女はその前に平伏して拜んで、かう言つた。「主よ、私の唇の言葉で献げます讚美の献げ物をお受け下さいまし」

すると主は哀憐女に向つて、「お起ちなさい。平和御身にありますやうに」と言はれた。けれども彼女は尙ほ顔を地につけて、「あゝ主よ、私が主と争ふ時には、主は義しくゐます。唯主の審判についてお伺ひし度うございます(エレミヤ)あの強さうな犬はどうしてお庭に居

りますのですか。私共のやうな女子供はあの犬を見ますと、その恐さに御門から逃げ出すほごですのに」

彼はそれに答へて言つた。「あの犬には他に持主がある。その人の地所に閉ぢ込められてゐるのだから、わが旅人達は唯その吠える聲を聴くだけです。あれはあそこに遠く見える城に飼はれてゐるのだが、この壁の側までは來ることが出来るやうになつてゐます。その吠える聲が大きいので、多くの正直な旅人を驚ろかすが、却つて悪い方から善い方へ追ひやるのです。實際その飼主は私にも、私の有にも少しも好意を持つてゐないので、旅人が私の所に來るのを邪魔をしたり、又旅人にこの門を叩くの怖がらせやうとしてゐるのです。又ある時には、あの犬が鎖を破つて來て、私の愛する者を惱ますこともあるのです。だが、私はこれまでそれを忍んでゐた。又旅人達には適宜な助けを與へてゐるので、犬の手にかゝつて、噛み着かれるやうなことはないです。だから、あなたもかねてさういふ事を知つてをれば、あの犬を怖れはしないでせう。人の軒に立つて物乞ふ者をごらんさない。貰ひ物を受けやうと思つて、犬に鳴かれたり、吠えられたり、噛まれたりする位、平氣なものです。だから一匹の犬、他人の庭の犬、その吠えるので旅人の益になるやうな犬なら、誰でも私の許に來やうとする者を妨たげはしない。『われ我が愛する者を獅子の口より救ひ、その生命を犬の力より脱れしむ』(詩廿二〇)です」

そこで哀憐女は言つた。「私はさやうな事とは存じませんでした。何にも解らずに、こんな事を申しました。主は何事をも善くしたまふことを悟りました」
 その時基督女はその旅路のことに話を向けて、その路筋を尋ねた。さうすると彼は前にその良人を待遇したやうに、彼等にその食物を與へ、その足を洗つて、主の足跡なる路に立させた。

三

私が夢の中で見てゐると、彼等はその路を進んで行つた。天氣はいかにも心地よかつた。そこで基督女は悠ういつて歌つた。

「旅人どわがなれる、

その日ぞ嬉しき、

旅にわれを動かせる、

その人ぞ嬉しき、

永遠の生、求めぬる、

前こそ永けれ、

今ぞわれ、早く走る、

暁きは爲さぬに優るらん、

わが涙、よろこびになりぬ、

わが恐怖、信仰に變りぬ、

始めぞ (人の言ふごとく)

物の終りを示しなん

さて基督女とその仲間が歩める路を仕切れる石垣の向ふ側には、一つの庭園があつた。その庭園は前に記した吠える犬の飼主の所有であつた。その庭園に生えてゐる果樹から石垣の此方に枝が飛び出して、果實が熟つてゐるので、旅人の中にはそれを挽いで食つて、身を害なふものもあつた。基督女の子供達は幼なき者の慣ひとして、忽ちその樹と吊下つてゐる果實に心を引れて、それを挽いで食ひ始めた。母親はそんな事をしては可けないと禁めて見たが、子供達は肯かなかつた。

「子供達よ」と母親は言つた。「その果實は私共のではありませんから、取つてはいけません」

けれども母親もそれが敵のものとは知らなかつた。知つてゐたなら、死ぬほど怖れたに違ひない。兎に角そこを通り越して、路を進んだ。やがてそこから五六町行くと、いかにも醜い二個の人が向ふからやつて来た。そこで基督女と哀憐女とは面帕に顔を隠して、子供達を先きに立たせて、その人達とすれ違はうとした。遂に彼等と出遇つた。するとその二人は側へ寄つて来て、彼等を抱かうとした。基督女は「お退きなさい。さつさとお出でなさい」と言つたが、この二人は尊者のやうに、基督女の言葉を聞かばこそ、これを手ごめにしやうとした。そこで基督女は非常に怒つて、足を擧げて二人を蹴つた。哀憐女も亦出来るだけ二人を追ひ退けやうとした。基督女は又二人に言つた。「お退きなさい、さあ、お出でなさい。金など持つてはゐません。御覽のやうな旅人です。他人様の慈善で生きてゐる者ですもの」

するとその一人が言つた。「俺達は何にも金が欲しいわけぢやない。一寸お願ひがあつて来たのだ。小いごばかり言ふことを聴いてくれれば、何時までも姉御にするがな」

基督女はほいその意味を察して、「そんな事は耳の汚れです、御意に従ふことは出来ません。私共は急ぎます。貴君方のお相手はしてゐられません。私共は生きるか死ぬるかといふ大事の用を控へてゐるのですから」

かう言つて基督女と其の伴侶とは又行き過ぎやうとすると、かの二人はその路を遮切つて言つた。

「お前さん達の生命を貰はうとは言はない。別な用事があるのだ」

「それなら、何んでせう」と基督女が言つた。「私共の身も靈も自由にしやうとなさるんでせう。そのためにお出でになつたと思ひますが、そんな目にあつて、行末の幸福を無にするよりは、此の場で私共は死にます」

それから二人の女は聲を張り擧げて、「人殺し、人殺し」と叫んだ。そして婦人を保護する律法に従つて身を處した（申命記廿二〇）。けれども尙ほかの者共はその慾を遂げんと強迫した。で、女達は又叫び續けた。

さて女達の居る所は、今しがた通つて来た門から遠くなかつたので、その聲は彼處へ聴えた。で、その家の人達は出て来て、基督女の聲であることを知つて、救けるために急いだ。勢し來ると、女達がいかに危うい状態にあるのが、手に取るやうに見える。子供達は側に立つて泣いてゐる。そこで救けに來た人は大きな聲で惡漢共に言つた。「これあ、何をするか。お前達はわが主の民を犯すつもりか」恚う言ひながら、取捕まへやうとすると、二人は

逸早く石垣を飛び越して、かの大きな犬を飼つてゐる人の庭園へと逃げ込んだ。そして犬に護られて姿を隠した。救けに來た人は女達の側へ寄つて、別にお怪我もありませんかと問ねた。女達はそれに答へた。「有難うございます。主のお蔭で、別に怪我はございません、唯少し驚ろきましたけれど、よくお救けに來て下さいました。さもないと、こんな目に遇ふ所でした」

この救助者は尙ほ二言三言慰さめてから、次のやうに言つた。「あなた方があその門で待遇しを受けなすつた時に、纖弱い女と知りながら、どうして主に道案内者をお願ひなさらなかつたですか。さうしたらこんな災難も危険も避けなすつたに。主は必つと一人の道案内者を遣はしなさいますからな」

「さうでしたね」と基督女が言つた。「私共は目の前の御祝福に氣を奪られて、危険の來るのを忘れてしまいました。それに、王様の御殿の近所に、あんな惡者が潜んでをらうとは、誰れも想ひませんですもの。眞實に道案内の方を一人、主にお願ひすれば宜しうございました。でも、主は私共の益になることを御存じでゐながら、どうして道案内の方を一人お附け下さらなかつたでせう」

救「求められもせず物を興るといふのは、必らずしも必要ぢやありませんからな。さうすると、その物の價値が尠なくなつてしまひます。然るに物の必要が感じられた時に、その物を授かつたらどうです。その必要を感じた人の眼に、その適當な價値が解つて、従つてその後の役にも立ちませう。わが主が先きに道案内者を授けられたら、あなた方はこんな場合に遭遇つても、それを求めなかつた手ぬかりを歎かずに済んでしまつたでせう。何事も善い方に働らくので、あなた方を一層用心深くするやうになります」

基女「主の御許にもう一度戻りまして、愚かな振舞を申上げまして、それから道案内の方をお願ひいたしましたら善うございませうか」

救「あなた方が愚かであつたのを悔んでおられますことは、私から主にお取次ぎいたしておきますから、お戻りになるには及びませまい。あなた方が何處にお出でになつても、尠しも乏しいことはありません。わが主が旅人を待遇するために備へたまふ宿には何れも、充分に仕度して、どんな計畫でも拒げるやうになつて居ります。彼等のために爲さんことを我に求むべきなり」(エセキイル 卅六〇卅七) と主は言ひたまうです。そして求める値のないものなら拙らん物ですからな」

愆う言つてから、彼は元の場所へ歸り、旅人達はその路を進んだ。

やがて哀憐女は言つた。「なんだか氣が抜けて茫然しましたのね。これでもう危ない所は通り越したのでせうか、もう悲しい事はございませんでせうね」

「あなたは無邪氣な方ね」と基督女は哀憐女に言つた。「でも、あなたには答はありません。

私は出かける前から、かういふ危難があらうと思ひながら、なんの備へもしませんでしたのが、大變な過失でした。ですから、私はどんなお答めでも受けませう」

哀憐女は言つた。「家をお出なさる前から、どうして御存じでしたのですか。どうぞその譯を聞せて下さいな」

基女「それではお話しませう。私は家を出る前に、或る晩寢床の中で、かういふ夢を見ました。世にもあるまじき様子をした二人の男が私の寢床の側に立つて、どうしたら私の救ひを妨げることが出来ようかと相談してゐるのです。その言つた語もよく覺へてゐますがね。その當時私は心を悩ましてゐた時ですので、その二人は、此の女をどうしてやらう。睡ても起きて罪の赦しを叫び求めてゐる。この儘に仕ておかうものなら、この良人の方を取り通したやうに、この女も取り通してしまふなぞと言ひました。それだけでも私は用心して、

備へをしなければなりませんでしたのに」

「さうでしたのね」と哀憐女が言った。「でも、そんな意憤があつたので、私共は自分の足りない所を知る折を興へられましたのね。それから主のお恵みの豊かなことも明らかにになりました。ほんとうに主は私共の求めぬ親切を盡して下さいますし、唯御自分のお心の樂しみから、私共を強い敵の手からお救ひ下さいましたのね」

暫らく悠う言ふことを話しながら、進んで行く道、路の側にある一つの家に近づいた。その家は「天路歷程」の記録の初めの部分に精しく記してあるやうに、旅人を救うために建てられたものである。そこで彼等はその家（註釋者の家）の方へ近づいた。その門口に行く道、家の中から高い話し声が聴えた。彼等は耳を聳だて、聴いてゐると、基督女の名も語られた。基督女がその子供を連れて旅に出かけたといふ風評は廣まつてゐたのである。これは人々にとりて大ひに興味あることであつた。彼女は基督者の妻で、此間まで旅に行くなどいふことは聞くのも嫌ひな女である。耳にしてゐたからである。それ故彼等は尙ほ立つんで、その門口に居るとは知らずに、基督女のことを讀めてゐる善き人々の談話を聴いた。遂に基督女は前に門を叩いたやうに、その戸を叩いた。すると戸口から無垢子といふ一人の少女が

出て来て、戸を開けて、眺めた。そこには二人の女が立つてゐる。

そこで少女が二女に言った。「ごなたをお訪ねなさいますか」

基督女は答へた。「此家は旅の者のために御便宜を謀つて下さる所と伺がひました。私共は御覽の通り旅の者でございますから、どうぞお厚情にあづかりたいと存じて参りました。もう日暮れ方ですし、夜行きも嫌でございますから」

少女。「お名前はなんと仰しやいますか。主人に申し上げて見ますから」

基督女。「私は基督女と申しまして、數年前に此の路を旅しました者の妻でございます。これはその四人の子供でございます。この娘も私の道連れでして、矢張都へ参るのでございます」

これを聞いて、無垢子は内に駆け込んで、人々に言った。「門口に居るのは誰だと思ひなさいますか？ 基督女さんとその子供達とその連の女がお待遇にあづかりたいと言つて待つてをりますの」

そこで人々は嬉しさに飛び立つて、行つて、その主人に話した。やがて主人は戸口に現はれて、基督女を眺めて言った。「あなたが基督女さんですか。あの人の善い基督者さんが旅人の生活を始めた時に後に残して来たといふ方ですな」

基女。私は良人の惱みを余所に見て、獨り旅出たせましたほどの強情な女でございます。これはその四人の子供でございます。私もかうして参りましたのは、このほかに正しい路はないと信じたからでございます。」

註。「それなら、或る人がその息子に向つて、今日わが葡萄酒に往きて働らけといふと、息子はその父に否ですと言つたが、後悔して行つた（マタイ廿一〇）と記してあることに應ひますな。」

基女は言つた。「左様でございます。アーメン。神さまよ、それが私にとりて眞正の言葉にてあらしめたまへ。そして汚れなく、咎なきものとなりて、平和に神さまの御前に出づることを得しめたまへ。」

註。「どうしてそんなに戸口に立つてゐますか。さあお入りなさい。あなたはアブラハムの娘ですもの。私共は今まであなたの事を話してゐたのです。あなたがどうして旅人になられたか、その消息があつたものですからな。さあ、子供達もお入りなさい。さあ、娘さんもお入りなさい。」

かう言つて、彼は一同を家内に案内した。さて彼等が内に入ると。座つてお休みなさいと

言はれた。さうしてゐる内に、この家で旅人の接待掛りの人達はその室にやつて来た。一人が笑へば、他の一人も笑ひ、かくて一同に笑つて、基女が旅人になつたことを悦こんだ。又子供達を眺めて、その顔を手で撫で、やつて、親切に迎へる意を表はした。又やさしく哀憐女をも待遇して、主人の家に能く来て下さいましたと言つた。

暫らくは晚餐の間があるので、註釋者は彼等を示現の間に連れて往つて、基女の良人である基督者が何時か見たところの事を示した。檻の中の人や、恐ろしい夢を見た人や、敵の中を路を切り開いた人や、人々の中で最も大ひなる者の肖像や、その他基督者に有益であつたものを皆見せられたのである。

かくして此等の事が基女とその伴侶に稍々會得されてから、註釋者は再び彼等を伴なつて、先づ一つの室に來た。そこには手に芥搔きの熊手を持つた一人の男が居た。彼は下の方を見るだけで、その他は見る事が出来なかつた。又そこには彼の頭の上の方に一個の人立つてゐて、手に天上の冕を持つて、芥搔きの熊手を棄て、その冕を受けよと差し出してゐるのであつた。けれどもその男は上の方を見ない、又上に眼を着けもしないで、唯藁や小さい木屑や床の塵埃を掻き集めるのであつた。

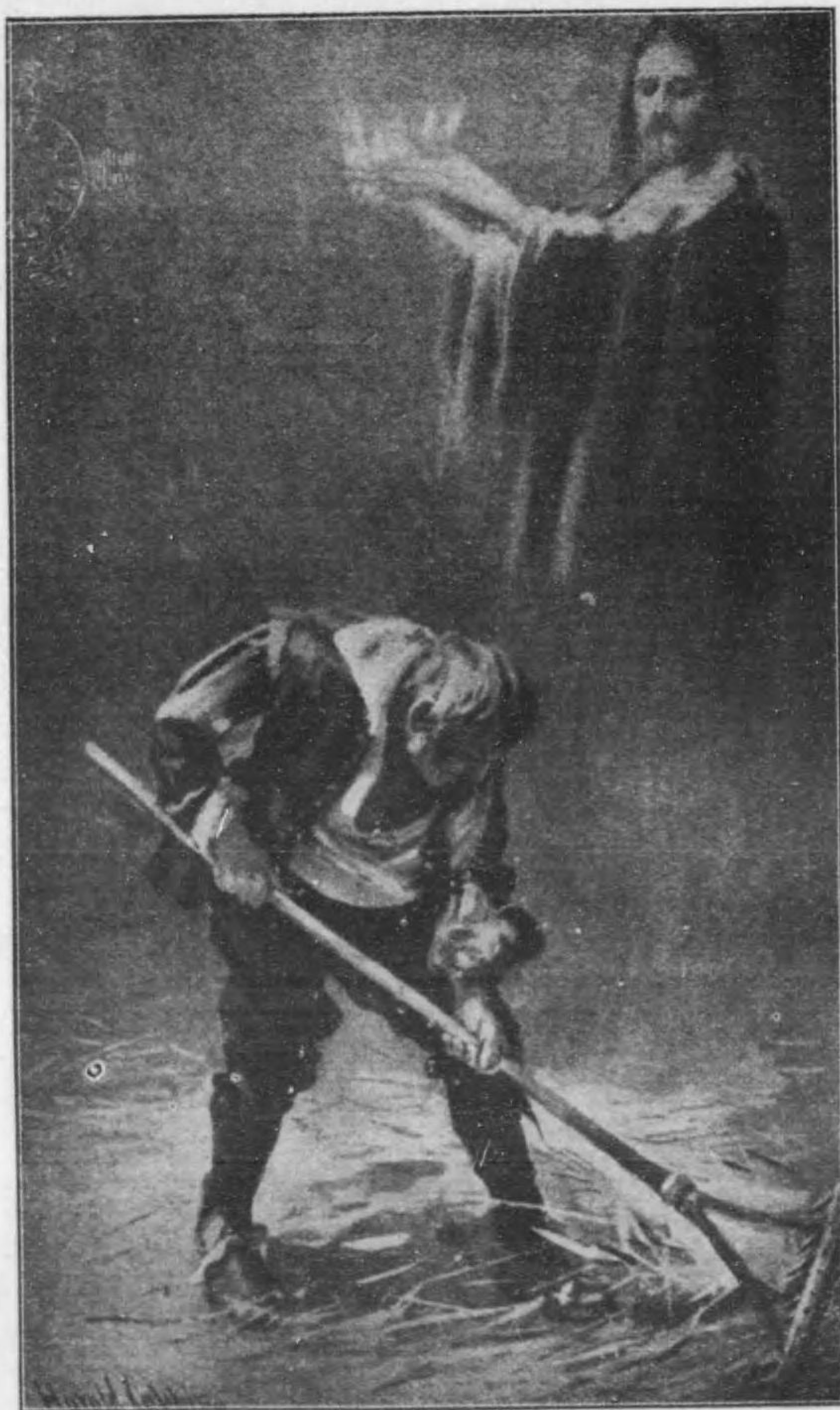
そこで基督女が言った。「私にもこの意味が少しは解るやうでございます。これはこの世の人の形貌ではありませんか、いかゞでせう」

「能く言ひ當てなすつた」と註釋者が言った。「その芥搔きの熊手は人の肉情を示してゐます。あれ、御覽なさい、この人は藁や木屑や床の塵埃を掻き集めることに氣を取られてゐるので、手に天上の冕を持つて、上から自分を呼んでゐる者の言ふ事を聞きません。これは天國のことを一つの作話として、此世の事ばかり確實なやうに想ふ人の心を示したのです。それからこの人は下の方ばかり見て、その他の所を見ることが出来ないうでせう。これは世の中の事が人の心に入つて勢を得ると、全たく神から遠ざかつてしまふことを示してゐるのです」

そこで基督女は言った。「あゝ、この芥搔きの熊手より私を救ひたまへ」

「さういふ祈禱は」と註釋者が言った。「使はれないから、今では錆つてゐます。『我をして富ざらしめたまへ』(箴言卅)と祈る者は千人に一人もありません。藁や木屑や塵埃などをいかに大切さうに慕ひ求める者が多いですからな」

これ聞いて、哀憐女と基督女は泣いて、「ほんとうに、その通りでございます」と言った。註釋者はこれを示してから、今度はこの家の中で最も善い室に連れて往つた。それは最も



熊手を持つてゐる人

立派な室であつた。その室中を見廻して、何にか益になるものを見つけてみなさいと彼は言つた。で、彼等は室中をぐる／＼見廻したが、何にも目に留らない。そこには壁の上に、甚だ大きな蜘蛛が一匹居るのだが、それは見落した。

そこで哀憐女が言つた。「貴方様、何にも目に留りません」けれども基督女は黙つてゐた。註釋者は言つた。「もう一度御覽なさい」

基督女はもう一度見廻してから、言つた。「一匹の醜い蜘蛛が手で壁に吊下つてゐますが、その外には何にも居りません」

そこで註釋者は言つた。「この廣い室に居るのは、唯一匹の蜘蛛だけですか」

基督女は了解の速い女なので、眼に涙を浮べて言つた。「はい、茲には一匹どころか、澤山居ります。しかもその毒はこの蜘蛛の毒よりも一層害がございます」

これを聞いて、註釋者はさも満足さうに基督女を眺めて、「お言葉の通りです」と言つた。そのために哀憐女は顔を赧らめ、子供達は顔を隠した。皆なその謎の意が解り始めたからである。

やがて註釋者は又言つた。「御覽のやうに、この蜘蛛は『手をもて握まりて、王の家に居

る」(○廿八)のです。さう記してあるのは、あなた方がいかに罪の毒に充ちてゐても、信仰の手に依つて、王の家に属する最も善い室に握まつて、そこに住めることを示したのです」

基督女は言つた。「さういふ事とは想ひましたが、全くそれを悟つたわけではありませんでした。兎に角私共は蜘蛛のやうだと想ひました。どんな立派な室にゐても、私共は蜘蛛のやうに醜く見えるでせう。この毒のある醜い蜘蛛を見て、信仰の働らきを學ぼうとは思ひもありませんでした。あれ、あゝして蜘蛛は手で握まつて、此の家の最も善い室に住んでゐますからね。ほんとうに神さまは何んな物でも無駄には造りたまひませんのね」

彼等は皆な嬉しさに、眼に涙を浮べた。互ひに顔を見合はせ、又註釋者の前に首を下げた。

註釋者はやがて他の部屋に彼等連れて行つた。そこには一羽の牝鶏と數羽の雛鶏がゐた。暫らくこれを見てゐなさいと彼は言つた。やがて一羽の雛鳥が水槽のそばに来て、水を飲まうとした。飲みながら、一口ごとに、頭を擡げて、眼を天の方へ向けた。そこで註釋者は言つた。「この小さい雛鳥のする所を見て、あなた方が恩恵を受ける時に、仰ぎ見て、その來たる所を認めるやうになさるが可いのです。」彼は尙ほ言葉を繼いで、「あれ、御覽なさい」

と言つた。そこで彼等は氣をつけて見ると、牝鶏が雛に對する振舞に四つの方法があるのを認めた。(一)一日中分け隔てなく凡ての雛を呼ぶと。(二)時々その二三の雛を特別に呼ぶと。(三)雛を翼の下に集めるために優しき聲を立てると。(四)消たゝましい聲を立てるとである。

註釋者は言つた。「この牝鶏をあなた方の王様に比らへ、又この雛鶏をその臣下達に較べてごらんなさい。王様がその人民に對してお採りになる處置はいかにもこの牝鶏に似てゐます。一般に分け隔てなくお呼びの時には、何も格別に與へられません。特別にお呼びの時は、常に何物かを與へられます。又翼の下にある者には、優しい聲を立てられます。又敵の來たるを見ると、烈しく叫んで、これを警しめられます。あなた方は女子ですから、恚ういふことは解り易いだらうと思つて、特にこの部屋にお連れしたのです」

「左様でございますか、貴方様」と基督女が言つた。「どうぞもつとお見せ下さい」

やがて註釋者は屠獸場に彼等を案内した。そこには一人の屠手が一匹の羊を殺さうとする所であつた。見よ、羊は靜かに忍んで死に就いた。そこで註釋者は言つた。「あなた方はこの羊から忍ぶことをお學びなさい。咄やきもせず、不平も言はず、不正な事を忍ぶことをです。御覽の如く、羊はいかにも靜かに死に就きましたな。耳の所から皮を剝れても、抗

らひもせず。忍んだでせう。そこです。王様はあなた方をその羊と呼んでおられますからな
 それから、彼はその庭園に彼等を案内した。そこには種々の花が澤山にあつた。「どうです、
 この花を御覧ですか」と註釋者が言ふと、「はい」と基督教女が言つた。そこで註釋者は語を
 繼いで、「御覧なさい、花はその丈も、その性質も、その色も香も趣きも、千差萬別でせう。又
 優り劣りもあります。又園丁が置く所に安んじて、互ひに争そふといふことはありません」
 次に註釋者はその畑に彼等を案内した。そこには小麦や穀物が播いてあつた。能く見る
 と、その穂は皆な切り取れて、唯麥藁だけが残つてゐた。註釋者が言つた。「この地は肥し
 をされ、耕やされ、又種を播いたのである。併し憊う坊主にされてはどうしたものでせう」
 そこで基督教女は言つた。「その残つてゐます物を焼くか、肥料になさいますのですね」
 註釋者は更に言葉を繼いで、「それです、私共の求める所はその果です。それが無ければ、
 火にて焼れるか、人の足に踏みつけられるだけです。あなた方もそんな事にならぬやうにお
 氣をつけなさい」

やがて戶外から家へ歸らうとする時、一羽の小さい駒鳥が一匹の大きな蜘蛛を口に啄へて
 ゐるのに目が着いた。そこで註釋者は「これを御覧なさい」と言つた。一同はそれを眺め
 た。殊に哀憐女は驚ろいてゐた。基督教女は言つた。「駒鳥のやうなこんな小さい奇麗な鳥が、
 あんな餌を口にするといふのは、いかにも見下げはてたこと、存じます。駒鳥は他の多くの
 鳥よりも、人懐こくつて、パンの屑か、その他害にならぬ物を食つて生きてゐるものと思ひ
 ましたに、これでは何んだか氣味が悪うございます」

註釋者はそれに答へた。「この駒鳥は或る信者達に能くあてはまる表號です。彼等は唯見
 た處では、この駒鳥のやうに、聲音も色合も動作も綺麗です。それから又眞面目な信者を非
 常に愛するやうに見えます。又他の人の及ばぬほど、眞面目な信者と交はり、その友となる
 ことを欲しますので、恰度善い人のパン屑で生きてゐると思ふやうに見えます。ですから、
 事にかこつけては、信者の家に入りしたり、主の任命を受けたりするのです。ところで自
 分獨りの時には、駒鳥のやうに、蜘蛛を捕まへて、これを一口に喰つてしまつたりするので
 す。食物を變へ、不義を飲み、水のやうに罪を呑み下すのですからな」

彼等が家に戻つても、未だその時には晚餐の仕度が整のはなかつたのだ、基督教女は又註
 釋者に向つて、もつと他の有益な事を見せて下さるか、話して下さいと願つた。
 そこで註釋者は説き出して憊う言つた。「牝豚が肥えて来るに従つて、泥に落ちやうとし

ます。牡牛が肥えて来るに従がつて、好んで屠所に進みます。それと同じやうに、肉慾の人は健かなるに従がつて、悪に傾むくものです。奇麗にしたい、立派にしたいといふのは、婦人の願ふ所ですが、優しく奥ゆかしいのは、神の眼に最も價高く見ゆるもので、身を飾るごです。一晩や二晩目を醒してゐるのは易しいが、一年中になると六ヶ敷い。それと同じやうに、信者となる始めは易しいが、終りを全たうすることは六ヶ敷いのです。船長なる者は暴風に遇ふと、甘んじて最も價の少ない荷物から投げ棄てますが、誰だつて始めに最も善い物を棄てはしない。然るに神を畏れぬ者にはさうではありません。一つ破損した所があると、船が沈んでしまふ。それと同じやうに、一つ罪があると、罪人を滅ぼしてしまひます。友を忘れる者はその恩を忘れるのです。然るに救主を忘れる者はわが身に無慈悲なものです。罪に任せて、來世の幸福を望む者は、むぎなでしこを蒔いて、小麦が大麥で穀倉を満さうとする人のやうなものです。人若し善く生きやうと思ふならば、その最後の日を目の前に置いて、これを常に身の警護となすべきです。囁くごと、想の定まらざるとは、罪が世にある證據です。神が光を置きたまへるこの世が、人間にとりて大切なものなら、神の稱美したまふ天國はどんなものでせう。多くの惱みの伴ふこの人生の過ぎ行くのがそれほど嫌なら、天上の

生命はどんなものでせう。誰でも人間の善を讃め立てるのであるが、神の善に心を寄せる者は誰でありませう。私共は時に食事をなすのであるが、食して尙ほ餘すところがありませう。それと同じやうに、耶穌基督の功德と義とは全世界の需要を充して尙ほ餘りあるです。

註釋者はかう言つてしまつて、再び庭園に彼等連れて行つて、一本の樹を示した。それは内部は全たく枯れて死んでゐるのだが、尙ほ生長して葉が茂つてゐた。哀憐女はこれを見て言つた。「これはどうしたのでせう」。註釋者は言つた。「この樹の外部は立派ですが、内部は枯れてゐませう。神の庭園にある多くの者はこれに比べられるのです。その者共は口でこそ神を讃め立てるが、實際神のために何んにも仕てゐないのです。即ち葉は立派でも、その心は悪魔の火絨箱の火絨になるほか仕方がありません」。

今や晩餐の仕度が出来て食卓は廣げられ、御馳走は皆な並べ立てられた。一同席に着いて、一人が感謝してから、食事を始めた。註釋者は家に宿めた者には食事の時に音楽を奏して待遇するのが常であつた。で、樂人達は樂器を鳴らした。又一個人が歌つたが、その聲はいかにも美しくかつた。その歌は次のやうである。

「主こそわれを、支へたまふ。

主こそわれを、養ひたまふ。

なくてならぬもの、われ求む時、

いかで乏しき、ことぞあるべき」

歌と音楽が終へた時に、註釋者は基督女に問ねた。「最初どんな事に心を動かして、旅人の生涯を送るやうになりましたか」

基督女は答へた。「初め良人を失くしましたことを思ひ出しますと、心から悲しうございました。でも、それは唯自然の人情でございます。それから良人の橋みと旅路のことを思ひ出しまして、自分の情ない仕打をつくく覺りました。あゝ悪かつたと思ふにつけ、池にでも身を投げやうかと存じましたが、仕合せにも良人が今幸福であります所を夢に見ますし、それから又良人が住つてゐる國の王様から私に參るやうにといふお手紙をいただきました。その夢とその御手紙で私の心は動きまして、遂に旅立つやうにされたのでございます」

註「門出の前になにか妨げは起りませんでしたか」

基督女。「はい、私の隣人に臆病夫人といふ方がございました。その方は私の良人に獅子を怖がらせて歸らしめやうとした人の親族でございます。その方は私を馬鹿にしまして、そんな

事をするのは身の程を知らぬ冒險だと申しました。又私の良人が道中で遇ひました難儀や困難を數へあげて、私の心を挫かうとございました。でも、私はそんな事には可なりに打勝ちました。ですが、夢に二人の醜い男が旅の道中で私を誤ませやうと相談しましたには、大變心を惱ました。それは今でも私の心に往來しまして、遇ふ人は誰でも怖ふございます。若しや辛い目を見せられはしないかと思つたり、この路の外へ向けられてはしないかと考へたりしますものですか。何誰にもお話しいたさないつもりでしたが、貴方様だけにはお話しいたします。この路に入る御門と御家との間で、私共はえらい目に遇ひましたので、人殺しと叫びました位でございます。私共を襲ひましたその二人の男はどうも私が夢に見ました二人らしいございました」

そこで註釋者は言つた。「あなたのその始めも善いが、終りは益々善いでせう。それから今度は哀憐女に向つて、「あなたは何んに心を動かして茲に來ましたか、嬢さん」と言つた。

哀憐女はそれを聞いて、顔を赧めて、ぶる／＼して、暫らく黙つてゐた。

そこで註釋者は言つた。「恐るゝことはありません、唯信じて、心の裡にあることをお話しなさい」

やがて哀憐女は憊う言つた。「ほんとうに私は経験に乏しいものですから、わざと黙つてをりました。それに又行末どうなるものか心配でなりませんものだから。私は基督女さまのやうに、異象のことも、夢のこともお話しが出来ません。それから善い親族の者の勧めを拒みましたことを悲しむといふやうなことも存じませんものですから」

註。「それでは嬢さん、どういふ譯でかう爲さるやうになりましたか」

哀憐。「それは何んです、基督女さまが町をお出かけなさる仕度をしてゐなさいました時に、私ともう一人の方で偶然基督女さまをお訪ねいたしましたして、戸を叩いて、内へ入りました。内へ入つて、基督女さまの仕てお出でなさいましたことを見まして、どうなさるのですかとお問ねいたしました。すると基督女さまは御良人の許にお出でなさる所だと仰しやるでせう。それから起ち上つて、夢の中で御良人にお遇ひになつた話をして下さいました。御良人は不思議な場所に、天人達と一緒にお住居になつて、冠を被り、琴を弾き、大君の食卓で飲食ひし、彼處に連れて行かれたことを感謝して讚美を歌ふてゐなさいましたさうです。基督女さまがさういふ話をなさいますと、私は心の裡が熱くなりました。で、私はそれが眞實なら、父母や生れた土地を棄て、基督女さまと一緒にに行けるものなら、行きませうと密かに想ひま

した。それから基督女さまにそれは確かな事實でせうか、とお問ねしたり、私も御一緒に連れて行つて下さいますかとお願ひしたりいたしました。私共の町はいつ滅びるか解りませんから、とても住つてゐられないと悟りましたので、それでも私は沈んだ心で参りました。でも、参るのが嫌ではございませんが、後には私の親族が澤山残つてゐるからでございませう。でも、憊うして参るのは、私の心の底よりの願ひでございます。基督女さまと御一緒にその御良人の王様の許に参れるものなら、参りたう存じます」

註。「あなたの御出立の由來も善いですが、眞理に信用を置きなすつたのだから。あなたはルツです。ルツはナオミを愛し、主なる神を愛するために、その父母と生れた國を離れて、見ず知らずの民の中に来たので、ねがはくはエホバ汝の行爲に報ひたまへ。ねがはくはイスラエルの神エホバ、即ち汝がその翼の下に身を寄せんとて來たれる者、汝に充分の報ひをたまはらんことを」(ヤコブ二十)

やがて晚餐が終つて、寢床の仕度がされた。女達は一人々々寝かされ、子供達は一緒に寝かされた。哀憐女は寢床に入つたが、嬉しくつて眠られなかつた。今や遂には失なはれるだらうといふ疑惑がこれまでよりも遠く離れ去つたからである。で、哀憐女はかゝる恵みを興

へたまふた神を祝福し又讚美した。

翌る朝、彼等は日の出と共に起き出で、出發の仕度をした。けれども註釋者は「茲からは順序を正して行かなければいけません」と言つて、暫らく一同を留まらせた。そして初め彼等を出迎へた少女に向つて、「この方達をお連れして、庭園の浴場に御案内なさい。そこで沐浴して、旅路の垢を洗ひ潔めなさいますやうにね」と言つた。やがて無垢子といふ少女は彼等連れて庭園に行つて、浴場に案内した。そして旅の途中で御招待申し上げた此家の御主人があなた方にお勧めなさいますことですから、御身體を洗つて、御奇麗にあそばせと言つた。で、浴場に入つて、女達も子供達も皆な身體を洗つた。それ故浴場から出て來ると、麗はしく潔くなつたばかりか、いかにも元氣づいて、關節も力強くなつてゐた。家の内に來て見ると、沐浴に行く前よりも、更に美はしくなつてゐた。

彼等が庭園の浴場から戻ると、註釋者は側に引き寄せて、つくづく眺めて、「月のやうに美はしいですな」と言つた。やがて彼の浴場で沐浴した者には記號をつける慣はしなので、その記號を取り寄せさせた。その記號が持參されると、彼等にそれを捺して、その志せる場所へ行つても知れるやうにした。その記號といふのは、イスラエルの子等が埃及の國から出

て來た時に喰つたといふ酔入れぬパンに因めるものであつた。その記號は彼等の眼の間に捺された（出埃及十三）。この記號は顔の飾りともなつて、大いにその美しくしさを増した。又その品格をも増したので、その容貌は天の使のやうになつた。

やがて註釋者は再びこの女達に待つてゐるかの少女に言つた。「衣服室に行つて、この方達のために衣物を持つてお出でなさい」。そこで少女は行つて、白い衣を持參して、主人の前に置いた。すると彼はそれをお着なさいと一同に命じた。それは白く潔い立派な麻の衣物であつた。女達かそれを着返へると、互ひに怖ろしいほどに見えた。他人のとは見えるが、自分がどれほど美はしい姿になつたか、見ることが出来ないからである。で、彼等は互ひに他人のことを讚めそやした。「あなたは私よりも奇麗なのね」と一人が言へば、「いえ、あなたこそ私よりも雅しく見えますわ」と言つた。子供達も亦吃驚して、これはどうした事であらうと茫然立つてゐた。

四

やがて註釋者は大勇者といふ一人の臣僕を呼んで、劍と兜と楯を授けてから、「この娘達

を送つて、次の宿所である優美殿まで案内しなさいと言つた。そこで彼は武器を取つて、彼等の先きに立つて出掛けやうとした。註釋者は「道中御無事で」と言つた。家の人々は皆な彼等を見送つて、御機嫌やうと言つた。やがて彼等は悠々歌ひながら、路を進んだ。

「こゝはわが第二の宿所、

われら茲にて、幾千代も、

他の人には隠されし、

善き物見たり、聴きもしぬ。

芥搔き人や蜘蛛と鶏、

雛鶏も亦教訓をば、

われに教へぬ、さらばその、

教訓にわれを合はしめよ。

屠牛と庭園と畑と、

駒鳥とその餌と、

枯れたる樹とは力ある、

勸言にわれを従がへぬ。

さればわれ醒めてぞ祈り、

心つくして眞面目に

日毎に十字架負ひつゝ、

主にぞ仕へん、畏敬もて」

私が夢の中で見てゐると、彼等は進んだ。大勇者は先に立つて歩いた。進み行く内に、やがて基督者の脊に負つた重荷が落ちて、墓の中にころげ込んだ場所に来た。茲に彼等は暫らく足を停めた。茲で又神を祝福した。基督女は言つた。「私は今一寸その御門の側で言はれました事を思ひ出しました。それは私共が言葉と行爲に依つて赦罪されるといふことです。言葉といふは、約束に依ることでありまして、行爲といふのは、赦罪を獲た仕方ださうでございます。約束といふことに就きましたは、私にも幾らか解つて居りますが、行爲に依つて赦罪されるとか、それを獲た仕方ださうで赦罪されるといふ方は、どういふことで御座いませう。大勇者さまは御存じのことと思ひますが、どうぞ御高説をお聽せ下さいまし」

大勇。「行爲に依つて赦罪されるといふのは、罪の赦しを獲ねばならぬ人のために、或る人

が身代りとなつたことです。言ひ換えれば、その人が自分で赦されたのではなく、他の人が身代りになつたといふその仕方では赦罪を獲るのです。その問題を一層大きくして言へば、貴女や哀憐女さんやお子さん達が獲なすつたその赦罪は他の人の身代りに依つて獲られたのであります。他の人といふのは、貴女方をあの門へ導いて下さつた彼の君です。かの君が赦罪を獲なされるには、二つの仕方があります。自から義しきを行つて、貴女方の罪を蔽ひたまひしこと、又その血を流して、貴女方の罪を洗ひたまへることです。

基女。「かの君が御自分の義しきを私共にお配け下さるとすれば、御自分はどうかさいませう」

大勇。「いや、かの君は貴女方の求めに應じて、又御自分にお用ひになつても、尙ほ餘りある義しきを有したまふのであります」

基女。「どうぞ、そのことを御説明下さいまし」

大勇。「心より歎んで致しませう。それに就て先づ第一に定めて置かなければならぬことは、私が今お話しする彼の君は世に比ぶべき者がないことです。かの君は一人で二つの性質を持つておられます。その二つの性質は見分けるのは易いが、分つことは出来ません。その何れ

の性質にも、各備はれる義がありまして、その各の義はその性質に缺くべからざる要素となつて居ります。若し容易く、その性質を滅ぼさうと思へば、その正しきこと、即ちその義を取り去るにありといへる程です。ですから、私共がその義を配けてもらつて、自から義しく生活しやうとしても、それは出来ない。そればかりか、かの君の人格の内には尙ほ一つの義があります。それは此の二つの性質が一つに結合するからであります。それは人たる性質から見分けられる、神たる性質の義でもなく、又神たる性質から見分けられる、人たる性質の義でもない。その二つの性質の統一せる所に立てる義であります。即ちこれこそ神がかの君に委ねられた仲保の任務を果すために、その人格の裡に缺くべからざるものとして神の備へたまふ所の義であると申せませう。若しかの君が第一の義を分たば、その神たる性質から分れるのです。若し第二の義を分たば、人たる性質の純潔から分れるのです。若し第三の義を分たば、かの君に仲保の任務を果さしめるその完全より分れるのです。ですからその第三の義は、かの君がそれに依つて神の現はされた聖旨を成遂げ、或ひはそれに服従なされたり、又それに依つて、罪人を救ふて、その罪を掩ふてやりなされるのです。それは「一人の逆に由りて多く罪人とせられし如く、一人の順によりて多く義とせらるべし」と言ふである通

りです」

基女。「では、他の二つの義は私共には役に立ちませんのでせうか」

大勇。「さうです。その二つはかの君の性質と任務には缺くべからざる要素であります。第三のものは混同することが出来ませんから。併し第三の義がその目的とする所を果すのはこの二つの義があるからです。神たる性質の義はかの君に順の徳を與へます、又その人たる性質の義はその順を以つて義しきを行なふ力を與へます。又この二つの性質の統一せる所に立てる義はその定められたる業を爲すべき權威を與へるのです。

ですから、神としての基督にとりては不十分な義が一つあるわけです。基督はそれが無くつても神ですから。又人としての基督にとりて御自分には不十分な義が一つあるわけです。基督はそれが無くつても完全な人ですから。又神人としての基督にとりて不十分な義が一つあるわけです。基督はそれが無くつても完全なる神人ですから。それだから、基督にとりては、神として、人として、神人として、御自分のためには不十分な義が一つあるわけです。それを與ふることを惜しみたまはぬのです。それは即ち罪を赦す義であつて、基督が御自分には不十分なので、これを他の者に配ちたまふのです。で、それは義の賜物と呼ばれてゐま

す(ロマ五)。主なる耶穌基督は御自分を律法の下に置きたまふたので、この義を與へなければならぬのです。律法はその下にある基督を束縛して、義しきを爲さしめるのみならず、愛の行ひをなさしめるからです。つまり律法に依つて、二つの上衣を持つならば、何んにも持たないものにその一つを與へねばならぬのです。わが主は實は二つの上衣を持ちたまふので、その一つは御自分のために用ゐ、その一つは惜しみたまはず、快くそれを持たぬ者に與へられるのです。ですから、基督女さんや、哀憐女さんや、又お子さん達の罪の赦しは、他の人の行爲に依り、業に依つて獲られたのです、あなた方の主基督はその業をなしたまふ者で、これを求める憐れな罪人に出遇へば、いつでもその業の賜物を與へたまふのです。

それから又基督の業に依つて罪を赦されるためには、私共の罪を庇ふために備へられたものに相當した値段を神に拂はなければならぬのです。罪は我共を義しき律法の正當な呪咀に渡しました。その呪咀から義とせられるには、贖罪の道に依つて、私共が爲した害に相當する價を拂はなければならぬのです。その價はあなた方の主の血です。主はあなた方の位置に立ち、身代りとなつて、あなた方の罪過のために、その死を遂げたまふのです。ですから主はその血に依つて罪過からあなた方を贖ひ、あなた方の穢れた醜ひ靈魂を義にて庇ひた

まふのです(○卅四)。それ故に神來たりて世を審かれる時に、あなた方の順番になつても、あなた方を害したまふことはないです」

基女。「立派な御高説でございます。言葉と行爲に依つて赦罪されるといふことに就て種々學ぶ所がございました。ねい、哀憐女さん、この事をつとめて心に留めておきませうね。子供達、お前さんも覺へておきなさい。それでは、貴君、私の良人基督者の重荷を肩から落して、嬉しさに三度躍らせましたのも、そのためではございませんか」

大勇。「さうです。他の手段では斷ち切ることの出来ないその重荷の紐を切つたのは、その信仰です。又御良人が十字架の下に至るまで、忍んでその重荷を運ばされたのは、この信仰の徳を明らかに解らせるためです」

基女。「さうでございますね。私でさへ、これまで心が軽く嬉しうございましたのが、今ではその十倍も軽く嬉しくなりましたのですもの。ですから、私、自分の感ずる所は假令僅かでございますしても、それから推して慙う想ひます。世にも最も重い荷を負つた人があることしまして、今私のなすやうに、見もし信じもしたすれば、その心情はどんなに楽しく悦ばしいでせうとね」

大勇。「此等のことを眼にて見、心に想へば、私共の重荷を取り去られて、慰めと安心を受けるばかりか、愛慕の情を心の裡に生じます。かやうに罪の赦しが約束の語に依つてのみ來たのでないことに一度想ひ至らば、誰でもその贖罪の仕方と手段に感動して、自分のために身代りになりたまふたその人を愛慕するであります」

基女。「さやうでございます。私のために血を流して下さつたかと思へば、私の心からも血が出るやうに想ひます。あゝ愛の主、あゝ祝福の主。主は私を持つたことを欲して、私を購ふて下さいました。主は私を持つたことを欲して、私に相當な償よりも萬倍も高く私の身の代を拂つて下さいました。ですから、私の良人が眼に涙を浮べて、早くも苦しき旅に出で立つたのも不思議はございません。良人は私をも一緒に連れ立たうとしましたに、その頃私は穢れた悪い女でございましたので、良人獨りを遣りました。あゝ哀憐女さん、あなたのお父さんとお母さんも茲にお出でになりましたらね。それからあの臆病夫人もね、殊にあの淫亂の奥様がお出でになつたらと、私、心より思ひますわ。さうしたら、必らずその心情は感動するに違ひありません。臆病夫人の恐怖も淫亂の奥様の盛んな色慾も、これを見なすつたら、あの方達を再び家に戻したり、善き旅人となるのを嫌はせたりすることは出来ませんわ」

大勇。「あなたは今温たかな愛情で話しをされますが、いつでもその通りであることが出来ると思ひますか。それからこの事は誰にでも顯はされはしません。耶穌の血を流したまふことを見た人には誰にでも顯はされるといふのではありません。實際十字架の側に立つて、耶穌の胸から血しほが地に滴たるのを見てゐた者は澤山にありますが、それを見て悲しむ所か、これを笑ひました。その弟子となる所か、耶穌に對して心を頑くなにいたしました。ですから今あなた方が私の談を聴いて特に感動なすつたのは、深くその事を想ひめぐらされたからです。あの牝鶏が分け隔てなく一般に呼ぶ時には、雛鳥に餌を與へないといふ話を憶ひ出してごらん下さい。だから、これはあなた方に對する特別の恩寵です」

さて尙ほ私が夢の中で見てゐると、彼等が進んでゆくと、基督者がその道中で、淺薄者と怠惰者と我儘者とが横になつて睡つてゐるのを見た處に來た。すると見よ、その三人の者は路傍から抄し離れた處に鎖で縊り殺されてゐた。

そこで哀憐女はその案内者で又指導者である人に言つた。「この三人はどういふ方ですか。どうして縊り殺されたのですか」

大勇。「この三人は甚だ善くない性のもので、自分達が旅人たる心がないばかりか、出来るだけ他人の邪魔をしました。自分達が怠惰で愚かであるばかりか、出来るだけ他人にもさうさせやうとするし、又行末の幸福を獨斷めすることを教へたりしました。基督者さんが通られた時には、睡つてゐたのでしたが、今あなた方の通る時には、縊れ死んで居ります」

哀憐。「では、この人達に説き伏せられた者もあるのですか」

大勇。「さやう、數名の者に路を誤らせました。説き伏せられた者の中には、徐歩者といふ男もありました。また息切者、肺拔者、未練者、眠氣者、それから間拔子といふ若い女などは、説き伏せられて、路を迷ひ出て、この人達のやうになりました。それから又主のことを悪く言つて、主は殘刻な監督者だなど、人々に言ひ觸したので。又善き御國のことを悪く言つて、善い所だなどいふ者もあるが、その半分も善くないと言ひ觸したので。又主の僕達を罵しつて、その最も善い人達をも、物好きで、厄介な、世話焼きたと言つてゐました。それから神の麵麩を殺と呼び、神の子供の慰安を空想と呼び、旅人の勞苦を當のない事と呼んでゐたのです」

「まあ」と基督女が言つた。「そんな人達なら、ちつとも可哀想なことはありません。こんな最後が相當ですわ。こんな往來の側で縊死てをるのは、他人の見せしめになつて宜しう御

坐いませう。この人達の罪状を鐵か眞餘の板にでも刻んでその惡事をなした此處へ立て、おいたら、他の悪い人達の戒しめになつて宜しくはないでせうか」

大勇「それはさうしてあります。もう少し石垣の方へ寄つて御覽なさい」

哀憐「いえ、いえ、見ますまい。この人達が殺されて、その名は朽ち果ても、その罪はいつまでも滅びないで居りませう。それでも私共が茲へ來ません前に殺されたのは、誠に仕合せでした。さもないと纖弱い女の私共にごんな事をしたか知れませんが」それから歌つて、憐言つた。

三人はこゝに殺されて、

眞理に逆らふ者共の、

見せしめこそなりにけれ。

旅人の友にあらざる、

人よ、怖れよこの最後。

わが魂よ、油断すな、

聖きに反く人々に。

彼等はそれから進んで、困難の岡の麓まで來た。その善き友なる大勇者はまた先きに基督者が茲を通行した時に起つたことを話す折を得た。そこで先づ第一に彼等を泉の側へ連れて行つて、憐言つた。「御覽なさい。これは基督者さんがこの岡を登る前に水を飲んだ泉です。その時は綺麗な善い水でしたが、今ではこんなに穢なくなつてゐます。それは旅人が茲へ來てその濁いた喉を濕すことを猜む者が足で濁したのです」(エセキイル三十)

そこで哀憐女は言つた。「どうしてさう猜むのでせう」

「それは兎に角」と案内者が言つた。「この水を汲んで、綺麗な善い器に入れると、用ゆることが出來ます。泥は底に沈んで、水は自然に澄んで來ますからな」

憐言はれたので、基督女とその同伴とはさうせねばならなかつた。水を汲んで、土器に入れて、泥が底に沈んでしまふまで置いて、それから皆なして飲んだ。

次に案内者は先きに虚禮者と偽善者が見失なはれた岡の麓にある二つの横路を見せ、言つた。「これは危険な路です。先きに基督者さんが通行された時に、二個人が茲で失なはれました。御覽のやうに、今では鎖や杖や溝で通行止めがしてあるのですが、それでも尙ほこの岡を登る苦しみを避けやうと想つて、此路を行つて見やうとする者があるのです」

基女。「悍戾者の路は艱難でございませう(〇十五三)。この路に進み行く者が頸の骨を折らなければ不思議な位です」

大勇。「實に向ふ見ずな者共です。王の僕達が圖らずその者共に遇ふことがあつて、呼び留めて、その邪まな路であることを話して、その危険なことを注意してやるとしませう。さうすると嘲笑つて口返答をして、いくら王の名で私共に話して下すつても、そんな言は聽きたくありません。私共は自分の口から出た言を行へばそれで可いです(エレミヤ四十四)といふやうなことを申します。いや、もう少し能く御覽なさい。この二つの路には、杙や溝や鎖で止めてあるばかりか、籬さへ結つて、充分に警戒してあるのです。それなのに、尙ほその方へ行きたがるのですからな」

基女。「さういふ人達は怠け者で、苦しいことをするのを好まないのです。だから、登り路は嫌なのです。憎たる者の道は棘の籬に似たり」と記してある通りですのね。ですから、その人達はこの岡を登つて、都まで残りの路を續けるよりも、係蹄に歩み込みたがるのでせう

やがて彼等は前に進んで、愈々岡にさしかゝつた。一同その岡へ登つたが、頂上まで進ま

ぬ内に基督女は喘ぎ出した。さうして言つた。「これは息苦しい岡で御坐いますのね。これでは安逸を好む人達が靈魂のことをそつち除けにして、もつと易い路を行きたがるのも無理ではありません」

哀憐女も言つた。「私も休みたう御坐います」

子供達の中で小さい者は泣き出した。けれども大勇者は言つた。「さあ、参りませう。茲で休みなさいませう。もう少し上に行く、主の小亭がありますから」。憊う言つて、小さい子供を手に抱へて、先きに立つて案内した。

彼等は小亭に着いて、大變歎んで腰をかけた。皆な汗でびつしよりになつてゐた。哀憐女は言つた。「勞れた者にとりて休むほど嬉しいことはありませんのね。旅人のためにこんな休息所を備へて下すつた主はなんといふ善い方でせうね。この小亭のことは、種々伺がつてゐましたが、かうして見るのは初めてでございます。でも眠らないやうに用心しませうね。基督者さんはお睡りになつたばかりで、そんな目にお遇ひでしたさうですから」

やがて大勇者は小さい子供達に向つて、「さて、好い子供さん達、どうです、變りもありませんか。道中を續けることが出来さうですか」

「一番小さい子供が言った。「私は気が遠くなつてましたが、叔父さんが手を貸して下すつたので、どうも有難う。今私はお母さんから伺がつたことを想ひ出しました。天国へ行く路は梯子を昇るやうで、地獄へ行く路は坂を下るやうだと。でも、私は坂を下つて死に行くよりか、梯子を昇つて生命に行きたい」

そこで哀憐女は言った。「でも、諺に下り坂は易しといふではありませんか」

けれどもヤコブ（その子の名）は言った。「いえ、下り坂も卑下るといふとは一番六ヶ敷いさうですからね」

「うん、善い子供だ、立派な返事が出来た」とその先生である大勇者が言った。

それを聞いて、哀憐女は微笑んだが、小さい子供は顔を赧めた。

「さあ、あなた方は」と基督女が言った。「少し御食事をなさい。かうして腰をかけて足休めをしてゐる間に、少し美味しいものでもね。註釋者さまがあの御家をお暇します時に下すつた柘榴が一つございます。それからまた蜂の巣を一つと興奮劑の飲料の小さい瓶を一つ頂戴しました」

「あの方があなたを側にお呼びになつたので、何にか下すつたのだらうと思つてをりました」

と哀憐女が言った。

「さうでしたのね」と基督女が言った。「でも、哀憐女さん、私は初め家を出ます時に申した通りに今でもするつもりです。あなたが飲んで私の道連れになつて下すつたのですから、私の持つてゐます善いものはなんでもお配けいたします」

かう言つて、それを皆に配けた。哀憐女も子供達もそれを食べた。基督女は又大勇者に向つて、「あなたも私共の仲間にお入りになりませんか」と言つた。けれども彼は答へた。「あなた方は旅に行きなさるのですし、私はやがて歸るのですから。あなたの持つてをられる物は大きいあなた方の益となるやうに望みます。私は家で毎日食べてをりますから」

五

かうして彼等は食ひ且つ飲んで、暫らく喋舌つてゐた。やがて案内者は言つた。「日暮れになりさうですから、宜しければ、もう出かけませう」そこで一同立ち上つた。小さい子供達は先きに立つて進んだ。然るに基督女は飲料の壺を置き忘れたので、子供の一人をやつてそれを取つて來らせた。そこで哀憐女は言つた。「茲は物忘れする場所ですのね。基督者さんは

茲で巻物をお忘れなすつたさうですし、基督女さんは茲で壘をお忘れになりました。これには、貴君様、なにか原因がございますのでせうか」

案内者はそれに答へた。「その原因は睡ること、物忘れすることです。目醒めてをるべき時に睡る者もあるし、記憶へてをるべき時に忘れる者もあるからです。唯さういふ原因で、休息場で旅人が物を失すことが度々あります。ですから旅人はどんなに嬉しい時でも、既に受取つたものに氣をつけて、記憶へて居らなければなりません。さうしないから、幾度も歎びが涙になつたり、照る日に雲が懸つたりするのです。此所で起つた基督者さんの話でも能く解りませう」

やがて疑惑者と臆病者とが基督者に遇つて、獅子の怖ろしさを説いて還らしめやうとした處に来て見ると、そこに仕置臺があつた。その臺の前に、路に向つて、一つの廣い板金に、數行の歌と、その下に此所へ仕置臺を立てた由來が記してあつた。その歌は恚うである。

「この仕置臺を見る人、

心と舌に氣をつけよ、

さらすば茲に滅びなん、

先に失せたる者のごと」

歌の下の言葉は恚うである。「この仕置臺は臆病若しくは疑惑に依つて、旅路を進むことを怖れる者を罰するために設けられたのである。又かの疑惑者と臆病者の兩人は基督者の道中を妨げんとした爲めに、燃ゆる鐵の焔の舌にて焼殺された」

哀憐女はこれを読んで言つた。「懐かしき方の御言葉の通りでございますのね。『あざむきの舌よ、汝に何を與へられ何を加へらるべきか。ますらをの利き箭と金雀花の熱き炭となり』

(詩百二十四)とございませう」

やがて獅子の見える所まで進んで行つた。元より大勇者は強い人なので、獅子を怖れなかつた。けれども獅子の居る所まで來ると、先きに立つた子供達はこれを見てびく／＼し出した。尻込みして後へ戻つて來た。これを見て案内者は微笑んで言つた。「どうしました。お子さん達、あなた方は危ない時には先へ立つて進むのが好きだが、獅子でも見ると、後から來るのが好きなんですな」

さて進み行くほごに、大勇者は劔を抜いて、獅子の居るのを物ともせず旅人達のために路を明けてやらうとした。折しもそこに獅子の後援しをする者が一人現はれて、旅人の案内

者に向つて、「お前達はどうして茲へ來ましたか」と言つた。この男の名は犂猛者、又旅人を殺す故に血塗者と云つて、巨人の種族に屬した。

旅人の案内者は言つた。「この女達と子供達とは都詣に行くので、茲は是非通らねばならぬ路です。お前さんや獅子が居つても、兎に角こゝを通らねばならぬ」

犂、「こゝは彼等の路ではないから、通すわけには參らん。私は邪魔をしてやらうと思つて來たのだ。獅子の後援をしてな」

實際のところ、獅子共の猛惡なものと、その後援しをする者の犂猛な態度のために、この路は近頃往來も大かた打ち絶えて、蓬草が生ひ繁つて路を塞ぐほどであつた。

その時基督女は言つた。「大路を通る者がなくつても、途行く人は暫らく徑を歩みましても、私が起つた以上はさうはさせません。私は起つてイスラエルの母となるのです」(六、七〇)

犂猛者は獅子に依つて誓つて、誰が起つても、さうはさせない。茲を通行させぬから、還つて行けど命じた。

道案内の大勇者は忽ち犂猛者に近づいたと見る間に、劔を揮つて、したゝかに斬り付けたので、犂猛者は後に退らなければならなかつた。

そこで獅子の後援をしようとした者は言つた。「お前は私の領内で私を殺さうとするのか」

大勇、「私共は王の往還に居るのだ。その路にお前は獅子を置いたのだ。この女達、この子供達は、繊弱い身でも、お前や獅子などのためにこの路を捨てるものではないぞ」

かう言つて、又一太刀斬り下げて、これを倒ふした。この一打で、その兜を打ち碎き、次の打で、片腕を斬り落した。その時巨人は凄まじい聲で唸つたので、女達は吃驚した。しかしそのぐつたりと地に腹這ひになつたのを見て喜んだ。獅子は鎖に繋いであるので、どうも仕なかつた。今や獅子の後援をしようとした年老ひた犂猛者が死んだので、大勇者は旅人達に言つた。「さあ、私に随つてお出でなさい。獅子はさうも仕やしません」そこで一同は進んだが、女達は獅子の側を通る時に、ぶる／＼と慄へた。子供達は死にさうに色着さめてゐた。けれども何んの害も受けずに通り越した。

やがて門番の小舎の見える所に來た。彼等は直ちにそれを目ざした。この邊は夜行が危険なので、そこに着くまで急ぎ足になつた。さてその門へ着くと、案内者はこれを叩いた。門番は「どなたですか」と叫んだ。案内者が「私です」と言ふと、門番は早くもその聲を知つて、出て來た。案内者は前にも幾度か旅人を導いて茲に來たことがあるからである。門番は

おりて来て、門を開けた。案内者が恰度その前に立つてゐるのを見て、(女達はその後にわたので見えなかつた)、慙う言つた。「やあ、大勇者さん、こんなに晩く何に用ですか」

大勇者は言つた。「旅人達を連れて参りましたが、主人の指圖で、今夜茲へ宿めていたゝかなければなりません。もつと早く茲へ着くはずでしたが、途中で獅子の後援しをしようとした巨人に邪魔立てをされました。でも、暫らく激しく戦つて、それを斬つて捨てまして、まあ、かうして無事に旅人達を連れて來ましたのでさ」

門番。「貴君も内へ入つて、今夜はお宿りなさらんか」

大勇。「いや、今夜の内に主人の許へ歸りませんとさ」

基女。「あ、貴君にお別れするのはどんなに辛ふございますか知れませんか。これまで私共を愛して、親切に下さりましたのに。それから私共のためにあんなに激しく戦つて下さるし、誠心から私共を勵まして下さりました御恩は決して忘れません」

哀憐女は言つた。「あ、私共の旅の終りまで、貴君に御一緒に行つていたゞけましたらね。私共のやうな繊弱い女の身で、こんな艱難の多い路を、友もなく、保護者もなかつてどうして参れませう」

子供達の中で最も小さいヤコブも言つた。「ごうぞ、叔父さん、一緒に行つて私共を助けて下さいな。私共は弱いし、路がこんなに危ないですから」

大勇。「私は主人の指圖のまゝです。主人が最後まで貴女方を御案内するやうに許してくれませう。悦んでお供します。兎に角あなた方は初めにやり損なつたですな。主人が私に茲まで御一緒に來るやうに言ひ付けた時に、旅を終るまで一緒にやつて下さいとお願ひになると、主人はそのお頼みを許しましたらうにな。兎に角私は一と先づ歸らなければなりません。それでは基督女さん、哀憐女さん、勇ましいお子さん達、左様なら」

やがて門番の警護者は基督女に向つて、その生國や親族のことを問ねた。で、基督女は答へた。「私は滅亡の市から参りました者で、寡婦でございます。良人は亡くなりました。良人は旅人の基督者と申しました」

「え、何に」と門番は驚いて、「あの人があなたの良人ですか」

「はい」と基督女が言つた。「これはその子供達でございます。それからこの方は」と哀憐女を指さして、「私と同じ町の婦人でございます」

やがて門番はかういふ時の慣例に従つて、鐘を鳴した。すると戸口に卑下子といふ一人の

處女が現はれた。門番はこの處女に向つて、「基督者さんの奥様の基督女さんとお子さん達が都詣での途中でお寄りになつたと取次いで下さい」

處女は内へ引込んで、その事を話した。處女がその口からその知らせを洩すやいなや、内では歡ばしさにいかにも賑はつた。

やがて人々は急いで門番の許へ來た。基督女はまだ戸口に立つてゐた。その中にもいと眞面目な人達が側へ寄つて、「さあ、基督女さん、お入りなさい。あなたはあの善い人の奥様ですつてね。さあ、お入りなさい、あなたは祝福な方です。さあ、お連れの方達もお入りなさい」そこで基督女は内に入つた。その子供達も同伴もその後について行つた。内へ通ると、いとも大きな部屋があつて、そこにお座りなさいと言はれたので、一同座つてゐた。家の長も來客に面會して、歡迎しやうとのことであつた。やがて長は入つて來て、旅人達の身の上が聽いて一人／＼に挨拶の接吻をして、慇う言つた。「やあ、善くお出でになりました。あなた方は神の恩寵の器です。善くお出でになりました。あなた方は私共のお友達です」さて餘程夜も更けたし、旅人達も旅疲れがしてゐるし、それに戦闘や恐ろしい獅子を眼の當りに見て弱つてゐるので、出來るだけ早く寝させて下さいと願つた。けれども此家の人々

は、「先づ少しばかり食事をして元氣をおつけなさい」と言つた。それは門番が前にこの人達の來るのを聽いて、内の人達に知らせておいたので、羔(出埃及十二〇廿一)と、それに當時つきものである醬油とを仕度しておいたからである。やがてその夕餐を濟せて、祈禱をなし、詩を歌つて、又休ませて下さいませんかと願つた。

基督女はその時言つた。「誠に厚顔しいお願ひでございますが、私の良人が此家に參りました時に休みました部屋に、私共を寝かせていたいくことは出来ませんでせうか」

で、そこに案内されて、皆一つ室に寝んだ。やがて横になつてから、基督女と哀憐女とは適當な寢物語を始めた。

基督女。「良人が旅立ちます時に、かうして後を慕つて行かうとは、少しも思ひませんでした」

哀憐。「それから慇うして、御主人のお休みになつた床や部屋にお休みにならうとは、お想

ひにならなかつたでせうね」

基督女。「それから良人の顔を見て、慰さめられたり、良人と一緒に主なる大君を拜まうとは尙更想ひませんでした。今ではさういふ事になると信じてゐます」

哀憐。「まあ、お聞きなさい。あの音は何んでせう」

基女。「あれは確に、樂の音ですね、私共が茲に居るのを歡ぶためにせう」

哀憐。「まあ不思議ね。家の内でも音樂、心の裡でも音樂、いと高き天でも音樂、それは皆な私共が茲にあるのを歡ぶためとはね」

かうして暫らく話してから、やがて睡つてしまつた。

さて翌る朝、目が醒めると、基督女は哀憐女に言つた。「あなたは夜中に睡つてゐながらお笑ひになりましたが、どうしましたか。夢を御覽になつたのでせう」

哀憐。「さうですの、楽しい夢でした。ほんとうに私が笑ひまして」

基女。「えい、心からお笑ひになつたの。哀憐女さん、どうぞ其の夢のお話しをして下さい」

哀憐。「私は夢の中で、唯獨り寂しい處に座つて、心のなやみを歎いてをりました。まだ座つてそれほごもならぬ内に、大勢の人達がぐるりに集まつて来て、私を見たり、又私の言ふことを聴うごしたりしました。大勢の人が聴いてゐても、尙ほ私は心のなやみを歎き續けました。で、私を笑ふ者もあるし、馬鹿だといふ者もあるし、私を押退けやうとする者もありました。その時私は天を仰いで眺めると、一人の翼のある者が私の方を指して來るのを見ました。その人は眞直に私の側へ來まして、「哀憐女よ、卿はなにを歎くのか」と申されました。

で、私が種々訴へますと、それを聴いて、「卿平和かれ」と言つて、その手巾で私の眼を拭つて、金と銀で私を装つて下さいました。私の頸には金鎖をかけ、耳には耳環を穿め、首には美しい冠を被せて下さいました。それから私の手を取つて、「哀憐女とやら、隨つてお出で」と言はれまして、空へ昇つてゆかれますので、私もその後について、黄金の門へ參りました。その方が門をお叩きになると、内から開けられたので、その方は入つて行かれます。私もその後から玉座のある所まで參りました。その玉座に座りたまふ御方が、「よく來なすつた、娘よ」と言はれました。その場所は眩しいほどびか／＼してゐて、まるで星のやう、いな、太陽のやうでした。そこにあなたの御良人も居られたやうに想ひます。そこで夢が醒めましたのですが、私、笑ひましたでせうか」

基女。「笑ひましたとも、えい、そんな吉い夢を御覽になつたのですもの、確にそれは吉い夢に相違ありません。もうその初めの方は眞實になつてゐるのですから、後の方も最後には眞實になりますよ。』まことに神は一度二度と告示したまふなれど、人これを曉らざるなり。人熟睡する時、または床に睡る時に、夢或ひは夜の間の異象の中にて、彼れ人の耳をひらき、その教うる所を印して堅うす』(ヨブ卅三)とございます通り、私共の心は睡れる間に醒めてゐる

ることがあります。ですから、神様は人の目醒めてゐる時のやうに、睡つてゐる時でも、言葉や、諺や表號や譬喩で語りたまふのです」

哀憐。「さうですね、さういふ夢を見ましたのは嬉しうございます。その内に夢の通りになつて、又笑ひたうございます」

基女。「もう起きる時でせうね。起きて種々します事を承まはりませう」

哀憐。「若し暫らく留まるやうに言はれましたら、どうぞ、快く御承知なすつて下さいね。私は暫らく此家に逗留して、あのお嬢様方ともつと善くお近づきになりたうございますわ。

あの慎子さんと敬子さんと愛子さんはいかにも御立派な氣高いお顔をしてゐるでなされるね」

基女。「どう仕て下さいませるか、それを見てからね」

やがて起き出で、身仕度をして、娘達もおりて來た。互ひに挨拶して、快くお寢みになりましたかと問ねた。

「大變善く寢みました」と哀憐女が言つた。「私、生れてからこんなに善いお宿に宿つたことはございませぬ」

その時慎子と敬子とは言つた。「あなた方は暫らく御逗留なすつても宜しいのでせう。さうしたら此家にあるものは、なんでも差し上げます」

「それは快く差し上げますのよ」と愛子も附言した。

やがて旅人達はさうすることにして、一月餘りも茲に逗留して、互ひに甚だ有益に暮した。ある時慎子は基督教女が子供達にどんな躰をしてゐるか知りたと思つて、子供達と問答して見ても宜しいでせうかと言つた。基督教女はどうぞ御自由にと承知したので、慎子は「一番年下のヤコブから始めた。

慎子は言つた。「さあ、ヤコブさん。あなたをお造りになつたのは、ごなたですか、言つてごらん下さい」

ヤコブ。「父の神、子の神、また聖靈の神です」

慎。「善い子ですこと。では、あなたをお救ひになつたのは、ごなたですか」

ヤコブ。「父の神、子の神また聖靈の神です」

慎。「尙更善い子ね。では、父の神はどうしてあなたをお救ひになつて」

ヤコブ。「その恩寵に依つてです」

慎。「子の神はどうしてあなたをお救ひになつて」

ヤコブ。「その義と死と血と生命に依つてです」

慎。「それでは聖靈の神はどうしてあなたをお救ひになつて」

ヤコブ。「その照すこと、新しくすること、保つことに依つてです」

それで慎子は基督女に向ひ、「あなたはお子さん達を美事にお躰けなさいましたのね。一番

小さい方さへこんなによく御答へなさいますのですから、他の方には同じお問ねをするには

及びませんでせう。では、今度は下から二番目の方にお問ねしませうかね」

やがて慎子は言つた。「さあ、ヨセフさん(その子はヨセフと言つた)お尋ねしても宜しい

ですか」

ヨセフ。「えい、どうぞ」

慎。「人はどういふ者ですか」

ヨセフ。「道理の解る者で、弟の言つたやうに、神から造られたのです」

慎。「救はれるといふ語についてどういふ事が想はれますか」

ヨセフ。「人は罪に依つて自ら奴隷と艱難の状態に落ちたといふ事が想はれます」

慎。「では、三位の神に依つて救はれるといひますが、それに依つてどういふ事が想はれますか」

ヨセフ。「罪はあまりに大きな力ある暴君なので、神のほかには、私共をその手より離すことは出来ないといふ事と、それから神は人を愛し、これに善くしたまふので、その憐れな状態から離れしめられるといふ事です」

慎。「それでは、憐れな人々を救ひたまふ神の聖意は何んですか」

ヨセフ。「神はそれに依つて、聖名と、その恩寵と、その正義を願めさせたまふ。又その造

られし物に永遠の幸福を與へたまふのです」

慎。「それでは、救はれる人々は誰でせう」

ヨセフ。「それは神の救ひを悦んで受ける人々です」

慎。「善い子ですね、ヨセフさん。それを能くあなたに教へなすつたお母様もお母様ですし、

それを能く聞きなすつたあなたもあなたです」

やがて慎子は次男のサムエルに言つた。

慎。「さあ、サムエルさん、あなたも悦んで私と問答して下さいませうね」